

黒谷川郡頭遺跡 I

昭和59年度発掘調査概報

1986

徳島県教育委員会



調査区全景（西より旧吉野川を臨む）

序

本調査概報書は、黒谷川中小河川改修工事に関連して、昭和59年度に発掘調査を実施した「黒谷川^{こうす}郡頭遺跡」をまとめたものであります。

黒谷川郡頭遺跡は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の住居跡、溝等が検出された集落跡の遺跡であります。この遺跡から出土した遺物は、本県にとって、極めて貴重な学術資料となるものと考えています。

この調査概報書を広く活用していただき、斯学の発展や埋蔵文化財に対する理解を深めていただく一助になることを願っておるものであります。

最後になりましたが、本遺跡出土品の土器文様について、宇佐晋一先生、斎藤和夫先生から玉稿をいただきましたこと、あつく謝意を申し上げます。また、これまで発掘調査や概報書の作成にあたり、御指導、御協力いただいた関係各位並びに関係機関に感謝するとともに、次年度以降継続して行います発掘調査にも御指導、御協力くださいますようお願い申し上げます。

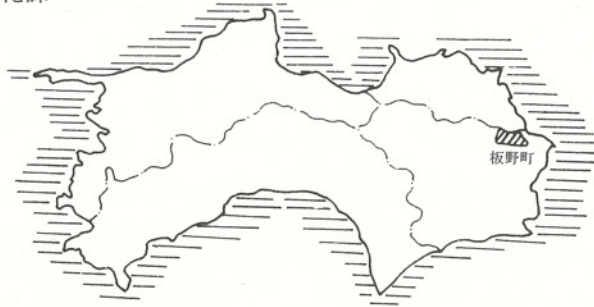
昭和61年3月

徳島県教育委員会

教育長 中 田 清 春

例 言

- 1 本書は黒谷川河川改修事業に伴う発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は徳島県土木部河川課の要請を受けて教育委員会文化課が実施した。
- 3 調査は昭和59年7月16日から60年1月10日、同年1月28日から2月5日まで行った。
- 4 収録した資料の実測は遺構は全員が分担したが、遺構の製図・遺物の実測製図は菅原が行った。写真撮影はPL. 1の空中写真はアジア航測(株)、その他は菅原が行った。
- 5 本書で用いた絶対高は海拔を表わす。方位はすべて磁北である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』1967によった。
- 7 fig. 1の地図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地図『大寺』(図幅)を転載したものである。
- 8 今回の調査において下記の方々より御指導、御教示を受けた。
秋山泰，網干善教，市毛勲，一山典，岡山真知子，滝山雄一，都出比呂志，寺沢薫，
寺戸恒夫，森浩一。
また出土した土器文様の検討については宇佐晋一，斎藤和夫両氏より玉稿を戴いた。
- 9 調査は以下の組織で行った。
調査主体 徳島県教育委員会文化課
課長 前川武
課長補佐 本庄午郎(当時)
庶務係長 清水博(現課長補佐)
大八木芳子(主事)
文化財保護班長 立花博
調査担当 菅原康夫(主事)
文化財調査員 高橋正則(当時)，
中妻克裕(当時)，早淵隆人，大谷泰久，平田文昭
- 10 本書は菅原が編集・執筆した。



本文目次

	頁
I 黒谷川郡頭遺跡周辺の歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	4
III 層序（土層の堆積状況）	7
IV 遺構と遺物	8
1号住居跡	8
2・6号住居跡	11
3号住居跡	14
4号住居跡	17
5号住居跡	20
7号住居跡	21
1号建物跡	21
2号建物跡	22
方形周溝墓	22
土坑1	26
土坑6	28
土坑8	29
土坑9	30
土坑10	31
土坑13	32
土坑21	32
溝1	33
溝2	49
溝3	50
溝8	53
V まとめ	56
VI 黒谷川郡頭遺跡の溝1出土の土器の文様について	66

挿 図 目 次

		頁
fig. 1	黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡	2
fig. 2	調査区位置図	4
fig. 3	遺構面検出状況	6
fig. 4	調査風景	6
fig. 5	調査風景	6
fig. 6	4 K 8 グリッド東壁土層堆積断面実測図	7
fig. 7	遺構配置図	(附図)
fig. 8	1・7号住居跡実測図	9
fig. 9	1号住居跡出土土器実測図	10
fig. 10	2・6号住居跡実測図	(附図)
fig. 11	2号住居跡出土土器実測図	13
fig. 12	3号住居跡実測図	15
fig. 13	3号住居跡出土土器実測図	17
fig. 14	4号住居跡実測図	18
fig. 15	4号住居跡出土土器実測図	19
fig. 16	5号住居跡実測図	20
fig. 17	1号建物跡実測図	22
fig. 18	2号建物跡実測図	23
fig. 19	2号墓壇域実測図	24
fig. 20	土壇17実測図	24
fig. 21	土壇18実測図	25

fig. 22	方形周溝墓出土土器実測図	27
fig. 23	土坑 1 実測図	28
fig. 24	土坑 6 実測図	28
fig. 25	各遺構出土土器実測図	29
fig. 26	土坑 8 実測図	30
fig. 27	土坑 9 実測図	30
fig. 28	土坑 9 出土土器実測図	31
fig. 29	土坑 10 実測図	32
fig. 30	土坑 13 実測図	32
fig. 31	土坑 13 出土土器実測図	33
fig. 32	土坑 21 実測図	33
fig. 33	溝 1 (4 H 7 ~ 4 J 10 グリッド) 実測図	34
fig. 34	溝 1 (4 F 7 グリッド) 実測図	35
fig. 35	溝 1 (4 A・B・C 6 グリッド) 実測図	36
fig. 36	溝 1 出土土器実測図	38
fig. 37	溝 1 出土土器実測図	40
fig. 38	溝 1 出土土器実測図	41
fig. 39	溝 1 出土土器実測図	43
fig. 40	溝 1 出土土器実測図	44
fig. 41	溝 1 出土土器実測図	46
fig. 42	溝 1 出土土器実測図	48
fig. 43	溝 3 実測図	50
fig. 44	溝 3 出土土器実測図	51
fig. 45	溝 8 実測図	51
fig. 46	鉄製品実測図	52
fig. 47	鉄製品実測図	53

fig. 48	勾玉実測図	54
fig. 49	石製品実測図	55

表 目 次

Tab. 1		83
--------	--	----

図 版 目 次

PL. 1	調査区全景
PL. 2	調査区全景
PL. 3	1・7号住居跡全景
PL. 4	2号住居跡炭化材検出状況
PL. 5	2号住居跡炭化材検出状況
PL. 6	2・6号住居跡全景
PL. 7	4号住居跡全景
PL. 8	3号住居跡全景・5号住居跡全景
PL. 9	3号住居跡遺物出土状況
PL. 10	方形周溝墓全景
PL. 11	土坑 17 全景
PL. 12	2号墓壇域全景
PL. 13	1号建物跡全景・2号建物跡全景
PL. 14	土坑 9 全景
PL. 15	土壇 8 全景
PL. 16	土坑 1 全景・土坑 13 全景
PL. 17	溝 1 (4H7～4J10グリッド) 全景
PL. 18	溝 1 土器出土状況
PL. 19	溝 1 土器出土状況
PL. 20	溝 1 土器出土状況
PL. 21	溝 1 土器出土状況
PL. 22	溝 3 土器出土状況
PL. 23	出土遺物 (1)
PL. 24	出土遺物 (2)
PL. 25	出土遺物 (3)
PL. 26	出土遺物 (4)

P L. 27	出土遺物 (5)
P L. 28	出土遺物 (6)
P L. 29	出土遺物 (7)
P L. 30	出土遺物 (8)
P L. 31	出土遺物 (9)
P L. 32	出土遺物 (10)
P L. 33	出土遺物 (11)
P L. 34	出土遺物 (12)
P L. 35	出土遺物 (13)
P L. 36	出土遺物 (14)
P L. 37	出土遺物 (15)
P L. 38	出土遺物 (16)
P L. 39	出土遺物 (17)

I 黒谷川郡頭遺跡周辺の歴史的環境

黒谷川郡頭遺跡の所在する徳島県板野郡板野町は、吉野川北岸下流域・鳴門市大麻町に西接する。北に阿讃山脈をひかえ、南に平野部をもち旧吉野川に接しており、平野部が総面積の約 $\frac{1}{3}$ 、山地が約 $\frac{2}{3}$ を占めている。中央構造線は本町では山地の南縁を横断しており、北側には和泉層群が広がる。

遺跡の分布は阿讃山脈南裾を中心に展開しており、特に古墳の分布は鳴門市大麻町に形成された萩原墳墓群・天河別神社古墳群・宝幢寺古墳群など、大局的にみれば吉野川北岸下流域の阿讃山麓沿いの古墳群の領域に属させることが可能である。以下、周辺の遺跡の概要を述べる。

旧石器時代の遺跡は隣接する上板町や土成町、阿波町の遺跡密度に比べ極端に少なく、僅かに羅漢平山の台地からナイフ形石器が採集されているにすぎない。今後の分布調査によって遺跡の増加がもたれる。縄文・弥生時代の遺跡についても現時点では具体相は全く不明であり、羅漢平山、磯山、犬伏字蔵佐などから若干の石器が採集されているのみである。

本地域における可視的な遺跡の増加は古墳時代に入ってからであり、山裾を中心として多くの古墳が形成される。時期的に遡るものとして、川端字諏訪に所在する前方後円墳の愛宕山古墳がある。全長65m・後円部径21.8m・前方部幅13.5m・後円部高7m・前方部高5mを測り、北向きに構築されている。円筒埴輪・葺石を有し、後円部中央に結晶片岩板石を小口積みにした、主軸を東西にもつ竪穴式石室がつくられている。副葬遺物には碧玉製管玉、ガラス小玉、鉄剣片、鉄鏃、銅鏃、短甲片がある。5世紀初頭の年代観が与えられており、本地域では典型的な畿内型の古墳といえよう。本墳の東尾根には結晶片岩板石を用いた箱式石棺の諏訪神社古墳群がある。周辺地点から古式の須恵器を採集しており、古墳時代中期に属す古墳群の存在が考えられる。

本町の中央を流れる大坂谷川を挟む山塊には古墳の集中がみられ、東山塊には阿王塚が位置する。明治19年の社殿建築により現存しないが、笠井新也が「石塚の研究」で報じた聖天山古墳に該当するものと思われる。それによれば、直径20mの積石塚であり、箱式石棺を内部主体としている。⁽²⁾副葬遺物に画文帯神獸鏡二面（宮内庁所蔵）、⁽³⁾鉄剣、鉄鏃などを出土している。

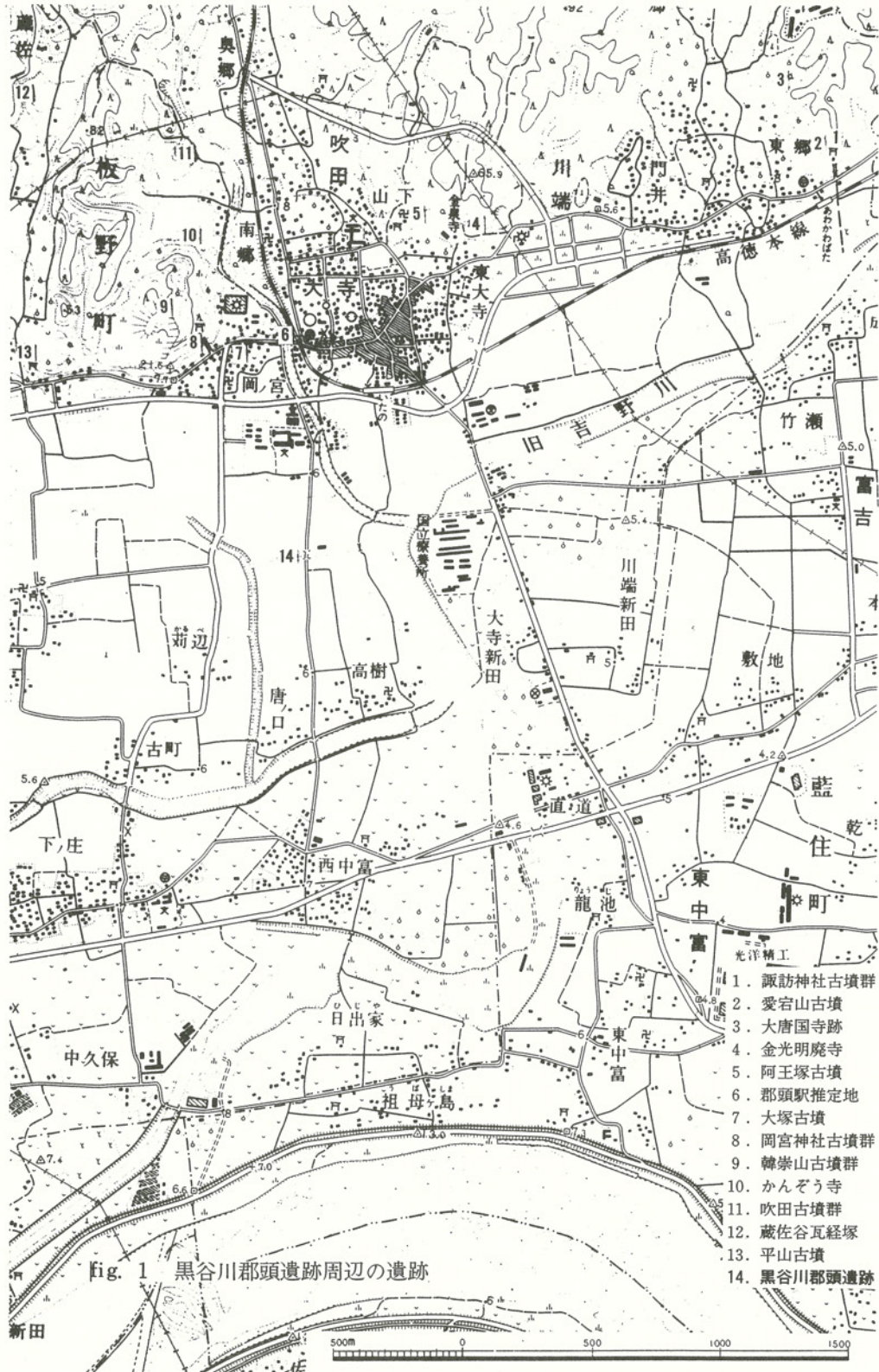


fig. 1 黒谷川郡頭遺跡周辺の遺跡

1. 諏訪神社古墳群
2. 愛宕山古墳
3. 大唐国寺跡
4. 金光明庵寺
5. 阿王塚古墳
6. 郡頭駅推定地
7. 大塚古墳
8. 岡宮神社古墳群
9. 韓崇山古墳群
10. かんぞう寺
11. 吹田古墳群
12. 蔵佐谷瓦経塚
13. 平山古墳
14. 黒谷川郡頭遺跡

西山塊には大塚(岡の宮塚穴)、岡宮神社古墳群、韓崇山古墳、吹田古墳群、平山古墳などが形成されている。このうち大塚古墳は緑泥片岩を利用した横穴式石室で、全長6.7m、幅1.8m程度の規模を有していたようである。副葬遺物に皮袋形提瓶をふくむ須恵器、土師器、鉄斧、倣製神獸鏡などが認められる⁽⁴⁾。韓崇山古墳は採土工事によって確認されたものであり不明な点が多いが、箱式石棺を主体とし、直弧文鹿角大刀を出土している⁽⁵⁾。

平山古墳も現存していないが、石室の天井石と考えられる一枚石が現在用水路の橋に利用されている。本墳は弘化三年(1846)に書かれた『粟の落穂』式の巻に「板野郡犬伏村平山にある塚穴は郡中にて大なるものなり、天保十年かしこに行て見たりしに、口より奥まで三丈七尺計り内の高さ八尺ばかり幅七尺ばかりなり、里長は其のころ七拾余りの老人なるがいふ、己幼きころは、この塚穴の奥に石の棚の如くなるものありて、其の上に茶碗皿など二三十もありしを、童部の玩弄ものにせしか、後には皆破損して無くなりしに、今の其の国たにみえずといへり、其の陶器の様をきくに素焼にて、今俗に神世焼また曲玉壺などといふものの類ときこへたり」と記載がみえ、石棚と椀貸し伝説を伝える⁽⁶⁾。現存していれば、本町域では最大の規模を有した横穴式石室と推定される。

古墳時代以降では本地域は古代の官道南海道沿いにあたり、当該地点は延喜式にみえる郡頭駅周辺に比定される。これに相前後して大寺の金光明廢寺、かんぞう寺などの新たな遺跡が形成されている。金光明廢寺からは天平期の蓮華文鏡瓦・忍冬唐草文平瓦などが出土している⁽⁷⁾。平安時代では川端の大唐国寺跡、犬伏の藏佐谷瓦経塚のほか、須恵器窯跡、瓦窯跡などが認められる。なお地名に唐園、苜辺、唐ノ口、唐土、唐土谷などが遺存していることを付け加えておく。

黒谷川郡頭遺跡はこうした歴史的環境の中にあるが、これまで確認されていた徳島県の集落遺跡とは少し様相を異にしている。即ち遺跡の立地が現地地表下約3.5mにあり、旧吉野川に面していること、周知の集落遺跡が概して山裾に形成されているのに対し、沖積低地に進出していることなどが揚げられよう。遺跡の性格については今後継続される調査によって明らかにされていくであろうが、本遺跡にみえる遺物包含層の地下深くへの埋没は、従前の方法による分布調査の限界と共に今後県内の弥生～古墳時代集落の様相に対する認識をかなり変えるものではないかと考える。

II 調査に至る経緯と経過

本遺跡は従来遺跡台帳に記載されていない空白地帯であった。遺跡の確認は昭和59年3月16日、本県文化課が吉野川北岸農業水利事業に伴う遺跡精密分布調査を実施中、板野町犬伏字佐谷地区において水田客土中に多量の弥生土器片が混在していることを発見し、その結果郡頭地区の河川改修工事に伴う排土であることが判明したのにはじまる。黒谷川のうち、工事が進められている地点は明治10年に人工的に開削された幅15mの排水路部分であり、上流の冠水地域対策のため旧吉野川に排水する事業計画である。

同年3月19日には河川改修工事現場を確認したが、工事事業は昭和53年度から実施され、幅50m・約500m以上にわたって暫定掘削されており、その時点では遺物の帰属地点を含め、明確にすることはできなかった。3月26日には再度現地全面を精査することによって遺物の散布範囲を把握することに努め、同時に既に護岸工事の終了している部分以外の掘削断面を精査した結果、遺跡は掘削範囲全面に拡がっていると共に、遺物包含層は現地表下

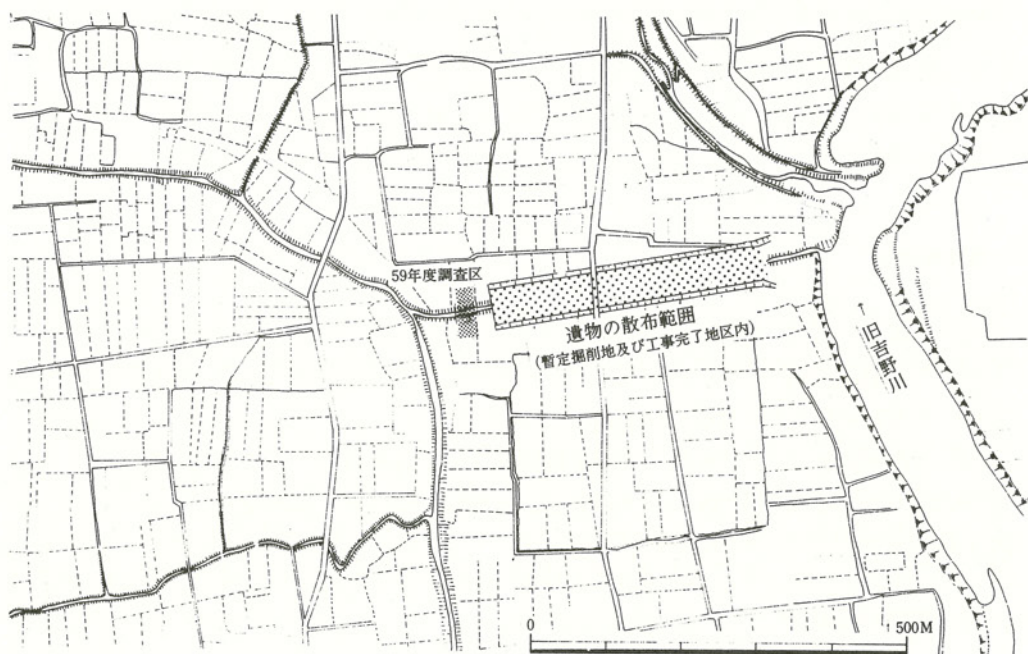


fig. 2 調査区位置図

3.00m前後に存在するという、これまでの徳島県の遺跡立地とは異なる知見を得た。

この結果を基に、3月28日事業を担当している徳島県鳴門土木事務所に工事現場が埋蔵文化財包蔵地である旨連絡をとり、3月30日鳴門土木事務所にて担当者と協議を行った。即ち、文化財保護法第57条の6に基く手続が必要であること。それに従い発掘調査が必要になること。併せて今後の事業計画の概要を聞き、調査との調整について協議を行った。今回の調査については以下の調査日誌に抄述するところであるが、昭和59年度は当面すでに計画のあった堰建設部分約1000㎡について調査を行い、次年度以降の調査については暫定掘削地内の遺物包含層の扱い、及び遺跡の範囲確認を含めて協議の必要性を残している (fig. 2)。

調査にあたっては第3章に述べるように、遺構の上面には約3.4mの堆積土があった。上面の堆積土にも中世を中心とする土器細片が認められ、今回調査の対象となった遺物包含層上面までの掘削に際しては重機を用いたが、上層においても遺構あるいは明確な遺物包含層が認められれば、その上面で止めて手掘りの調査を行うことにした。結果としては今回は中世遺物に伴う確実な遺構は検出しえなかったが、次年度以降の調査の留意項目といえよう。なお、調査対象面までこの方法で約1か月を要している。

調査区の設定は遺物包含層の上面で止め、手掘りで進めたが、工事中中心杭(各杭間100m)のNo.4を起点として東西を1~20・南北にA~Mのアルファベット表示し、調査区に5m方眼を設定して行った。今回の調査区は4A~M・6~10グリッドにあたる。後述するように遺構は極めて低位にあり、連日湧水とそれに伴う遺構の崩壊という状況に悩まされた。

調査日誌抄

- 1985. 7. 16 資材搬入。
- 7. 17 包含層上面の排土作業を始める。
- 7. 25 5M方眼の設定。
- 8. 6 4B10グリッドで土器溜り、溝検出。
- 8. 15 台風の影響による雨で調査区上流の工事道路の除去が行われる。
- 8. 16 上流からの流水により調査区全面冠水、土砂の堆積。排水、排土の繰り返し。
- 9. 7 包含層除去終了。全景写真撮影。
- 9. 10 4J7~4J10グリッドの土器列(SD101)の精査。
- 9. 11 SD101の掘り下げ。ミニチュア土器など出土。
- 9. 12 SD101の掘り下げ。土坑101の掘り下げ。4CD7グリッドで住居跡プラン検出。
- 9. 14 4D9・10グリッドで住居跡プランの検出。

- 9. 17 SD101写真撮影。
- 9. 19 住居跡SB101掘り下げ。
- 9. 20 住居跡SB101を切る土坑106を確認、
精査。
- 9. 22 溝2, 3検出。住居跡SB101は湧水
が激しいため、床面まで掘り下げずに
最後まで残すことにする。
- 9. 25 板野町文化財保護委員会現地研修。
- 9. 26 方形周溝墓の溝SD104確認。
- 9. 28 溝1の実測が終り、土器の取り上げを
始める。
- 9. 29 住居跡SB102, 103のプラン検出。
- 10. 1 溝SD103の掘り下げ。
- 10. 3 4F7グリッドで溝SD101の続き, 土器列を検出。
- 10. 6 住居跡SB102の掘り下げ開始。
- 10. 11 住居跡SB102の床確認, 炭化材が
抜がる。住居跡SB105検出, 精査。
- 10. 15 溝SD101出土土器中に絵画文土
器を確認。
- 10. 22 住居跡SB102炭化材写真撮影。
- 10. 26 住居跡SB102床面精査。
- 10. 30 土坑SK113検出, 掘り下げ。
- 11. 6 住居跡SB104プラン確認。
- 11. 7 方形周溝墓のコーナーを一部確認。
- 11. 9 住居跡SB104の掘り下げ。
方形周溝墓内の精査開始。
- 11. 14 方形周溝墓内土坑SK117検出,
掘り下げ。
- 11. 20 住居跡SB106床精査。
- 12. 2 現地説明会。
- 12. 3 住居跡SB102・103・106 写真撮
影。
- 12. 6 板野小学校現地見学。
- 12. 10 ほぼ遺構の精査を終了する。
- 12. 12 航空写真撮影に向けての準備。
- 12. 16 航空写真撮影。
- 12. 17 全景写真撮影。



fig. 3 遺構面検出状況



fig. 4 調査風景

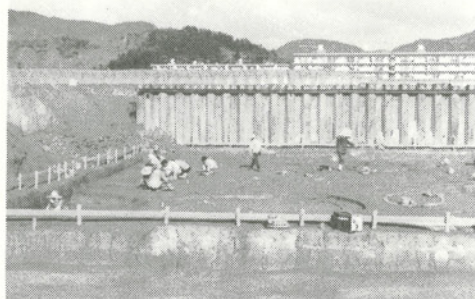


fig. 5 調査風景

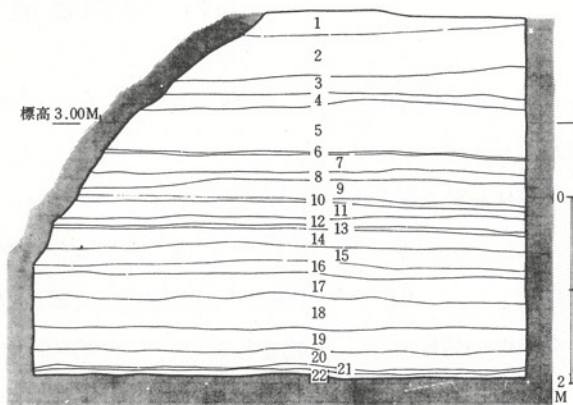
12. 19 土層図の作成を始める。
12. 27 住居跡S B107を確認、掘り下げ。
1986. 1. 4 方形周溝墓内の土器取り上げ。住居跡S B107写真撮影。
1. 5 ピット配置の検討。
1. 10 資材撤収。当初予定の調査を終わる。
1. 14 河川課・鳴門土木事務所の担当者と協議。今年度の追加調査の依頼あり。併せて次年度調査の協議。
1. 25 鳴門土木事務所の担当者と現地協議。1. 28から一部追加の調査に入ることになる。
1. 28 再度調査に入る。溝S D101の続き検出。
2. 4 溝S D101の精査終了。
2. 5 資材撤収。改めて今年度の調査を終わる。

Ⅲ 層序（土層の堆積状況）

調査地点の現地目は水田であり、海拔約4.2mを測る。遺構面までの堆積土層は18層に分離され、平均3.4mの層厚をもつ。これらの堆積は約500m東に流れる旧吉野川による作用と考えられるが、地質学サイドの検討を残している。ここでは4 K 8グリッド東壁の所見を基に基本的な堆積状況を示す。1は現在の水田耕作土、2 淡黄色シルト層、3 淡黄色シルト層、4 黄褐色シルト層、

5 黄褐色シルト層、6 暗赤褐色シルト層、7 赤褐色粘質土層、8 黄褐色シルト層、9 褐色粘質土層、10 黄褐色シルト層、11 明褐色粘質土層、12 にぶい赤褐色粘質土層、13 極暗褐色粘質土層、14 暗赤褐色粘質土層、15 極暗褐色粘質土層、16 オリーブ褐色粘質土層、17 黄褐色粘質土層、18 黒褐色粘質土層となる(fig. 6)。

このうち現地表下約1mの第4・5層には、鎌倉時代を中心とする遺物細片が認められた。



1. 盛土 2. 淡黄色5Y%シルト 3. 淡黄色5Y%シルト 4. 黄褐色10YR%シルト
5. 黄褐色10YR%シルト 6. 暗赤褐色5YR%シルト 7. 赤褐色5YR%粘質土
8. 黄褐色10YR%シルト 9. 褐色7.5YR%粘質土 10. 黄褐色2.5Y%シルト
11. 明褐色7.5YR%粘質土 12. にぶい赤褐色5YR%粘質土 13. 極暗赤褐色2.5YR%粘質土
14. 暗赤褐色5YR%粘質土 15. 極暗赤褐色5YR%粘質土 16. オリーブ褐色2.5Y%粘質土
17. 黄褐色2.5Y%粘質土 18. 黒褐色2.5Y%粘質土 19. オリーブ黄色5Y%粘質土
20. オリーブ灰色5Y%砂質粘質土 21. オリーブ灰色7.5Y%砂 22. 黄褐色2.5Y%粘質土

fig. 6 4 K 8グリッド東壁土層堆積断面実測図

第6層に間層を挟むが、この時期の生活面として第7層を想定する。結果は第2章に述べたとおりであるが、次年度以降精査の余地を残している。第8～12層は無遺物自然堆積層であるが、第13層には僅かに焼土状の堆積物の拡がりが確認された。第14・15層も無遺物自然堆積層である。第16層は有機質の堆積土層であり、その下第17層が今回の遺構面と同様の土質を呈する堆積層であったため、調査開始段階では当然第16層を後時代の遺物包含層と理解し、第17層に遺構面を推定していた。結果的には両層とも無遺物層であったが、こうした土層の堆積要因の検討も課題となろう。

第18層は弥生時代後期後半から後期末の遺物包含層であり、土器類の出土はかなりの量にのぼった。第19層は遺構面で、オリブ黄色粘質土層である。本層以下は、20 オリブ灰色砂質粘土層、21 オリブ灰色砂層、22 黄褐色粘質土層、23 オリブ灰色砂層となり、以下砂層が続くようであるが、湧水のため本層までで堆積土層の精査を終了した。第19層に形成された遺構面の海拔は、全体的に80～90cmと低位に位置するが、今回の調査地点では調査区の中央に流れる本来の黒谷川部分の地山レベルが最も高く、微高地状の微地形を示していたが、遺構はこの地点ではなく、やや低まった地形に密集していた。今後遺跡の範囲確認と共に、この点についても考えていかなければならない問題点を提供している。

IV 遺構と遺物

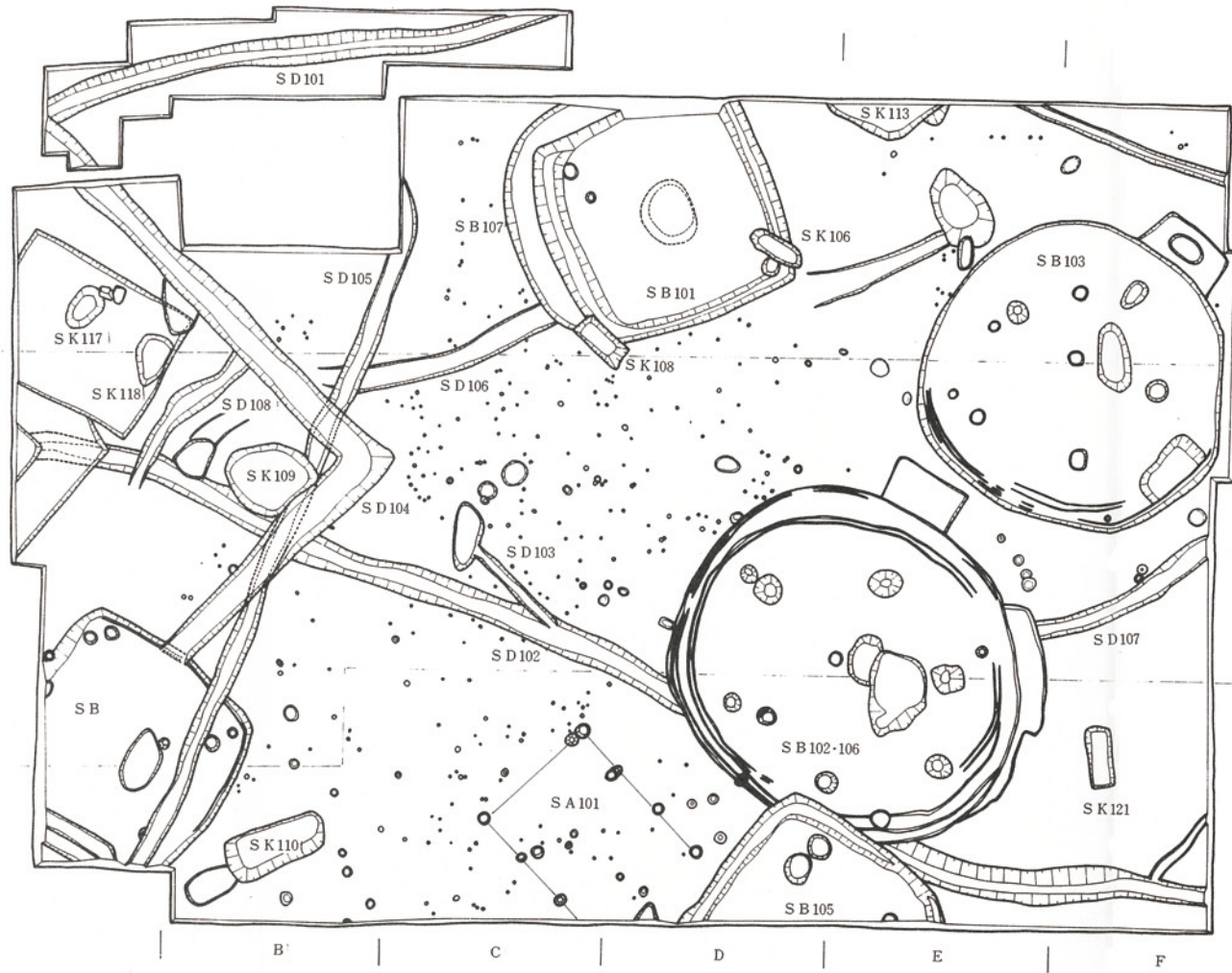
検出された遺構には、竪穴式住居跡7軒、堀立柱建物跡2棟、方形周溝墓1基、溝、土坑などがある (fig. 7)。

1号住居跡 (SB101)

4C・D7グリッドで検出された隅丸方形プランをもつ竪穴式住居跡で、一辺4・5mの規模をもつ (fig. 8)。住居跡内の埋積土は大要5層に分離でき、1 褐色粘質土、2 にぶい黄褐色粘質土、3 黄褐色粘質土、4 暗褐色粘質土、5 黄色粘質土となる。このうち1～4層までは遺物、炭化物、焼土を含んでおり、特に1・2層には明瞭な炭化材が認められた。5層には遺物を全く含んでおらず、床と考えられる。

本住居跡は遺構面を構成するオリブ黄色粘質土層を深く切り込んで構築されており、柱穴は本層以下の砂層に切り込まれている様子であった。そのため床面の把握以前に湧水と砂の吹上げが極めて激しく、掘り下げ段階で壁面が崩壊するという状況であった。従っ

標高 1.70M



6
7
8
9
10

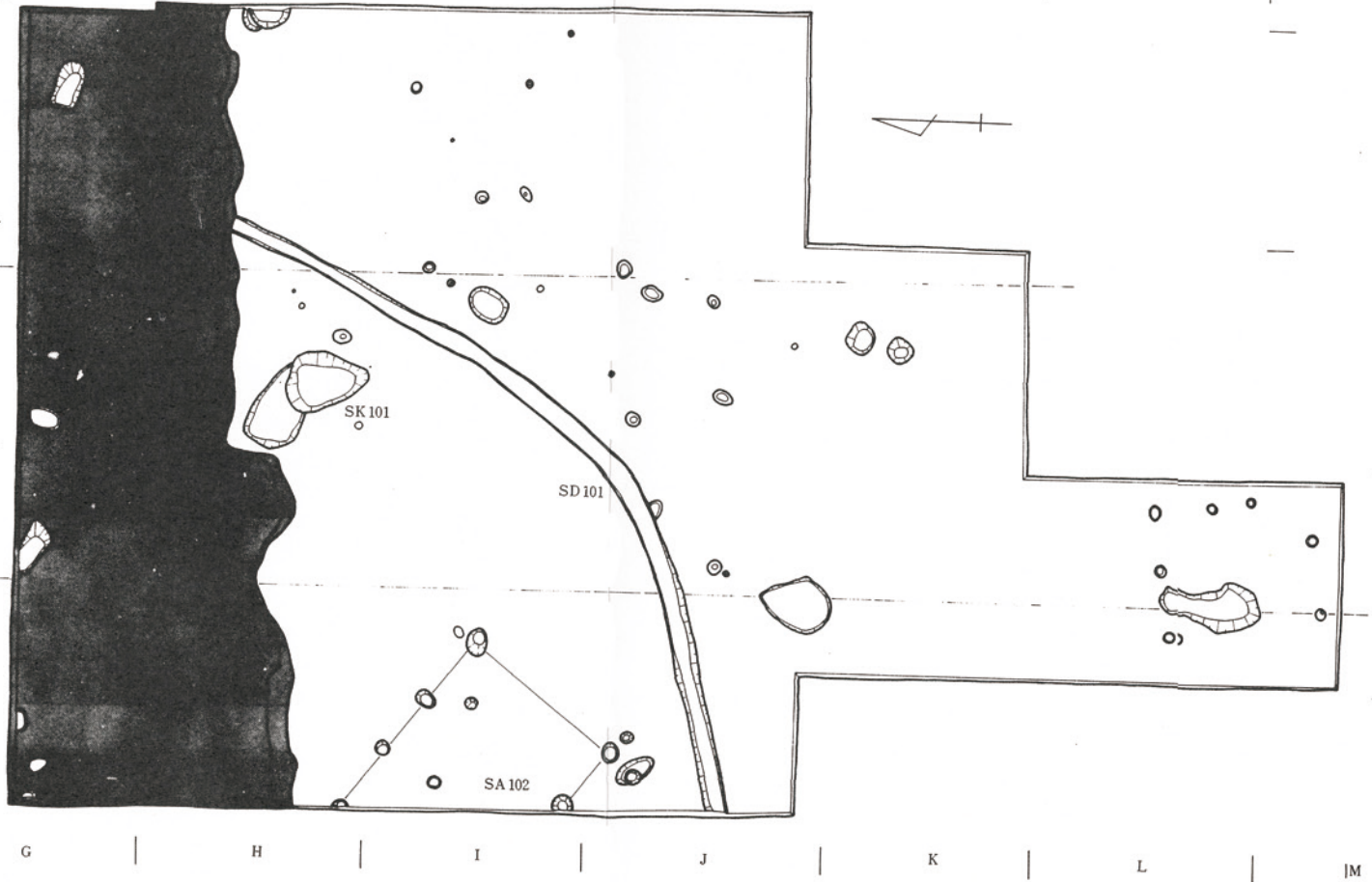


fig. 7 遺構配置図

標高 1.70M

て炉跡，僅かに精査段階で確認された柱穴を図上で復元しえたにとどまる。床面海拔高28cmを測る。

このうち炉跡と推定した部分には炭化物、焼土が拡がっており、僅かに浅い落込みが指摘される。柱穴跡は壁面に接して2か所土色の変化によって確認されたが、不明な点が多い。壁は遺構面形成土の落込みを精査することにより、48cmの高さを有していることを確認したが、壁と床の境に約20cm幅の段を有している。壁自体もなだらかに落込んでいるため、通有の住居跡形態とは若干様相を異にしている。

こうした形態は5号住居跡にも認められ、

4号住居跡にも一部類似個所が指摘された。従って、形態上の検討は今後の課題としても、住居跡と理解することに問題はないであろう。

埋積土第4層まで炭化物、焼土が含まれていることを述べたが、壁面の一部に火を受け

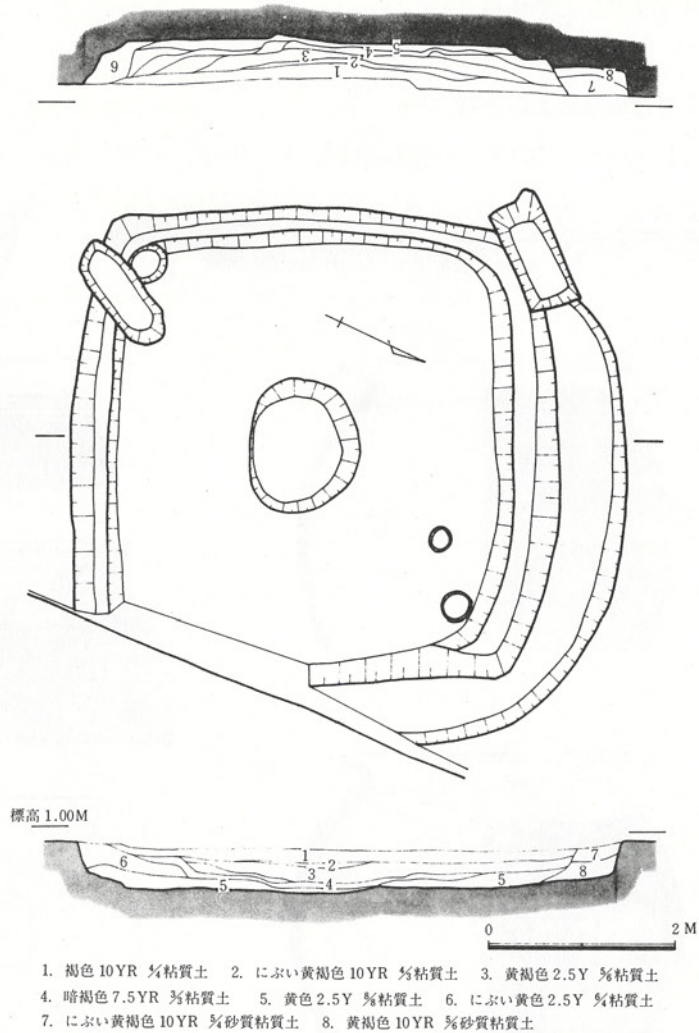


fig. 8 1・7号住居跡実測図

た痕跡が認められた。しかし火災を受けたものとは考えられない。埋積土5層上面からは甕形土器2点が出土している。

なお本住居跡は北西コーナーを土壇8、南西コーナーを土坑6に切られており、7号住居跡を切り込んで構築されている。

1号住居跡出土の土器 (fig. 9)

埋積土中からではあるが比較的多く出している。このうち2・4は床面と考えられる位

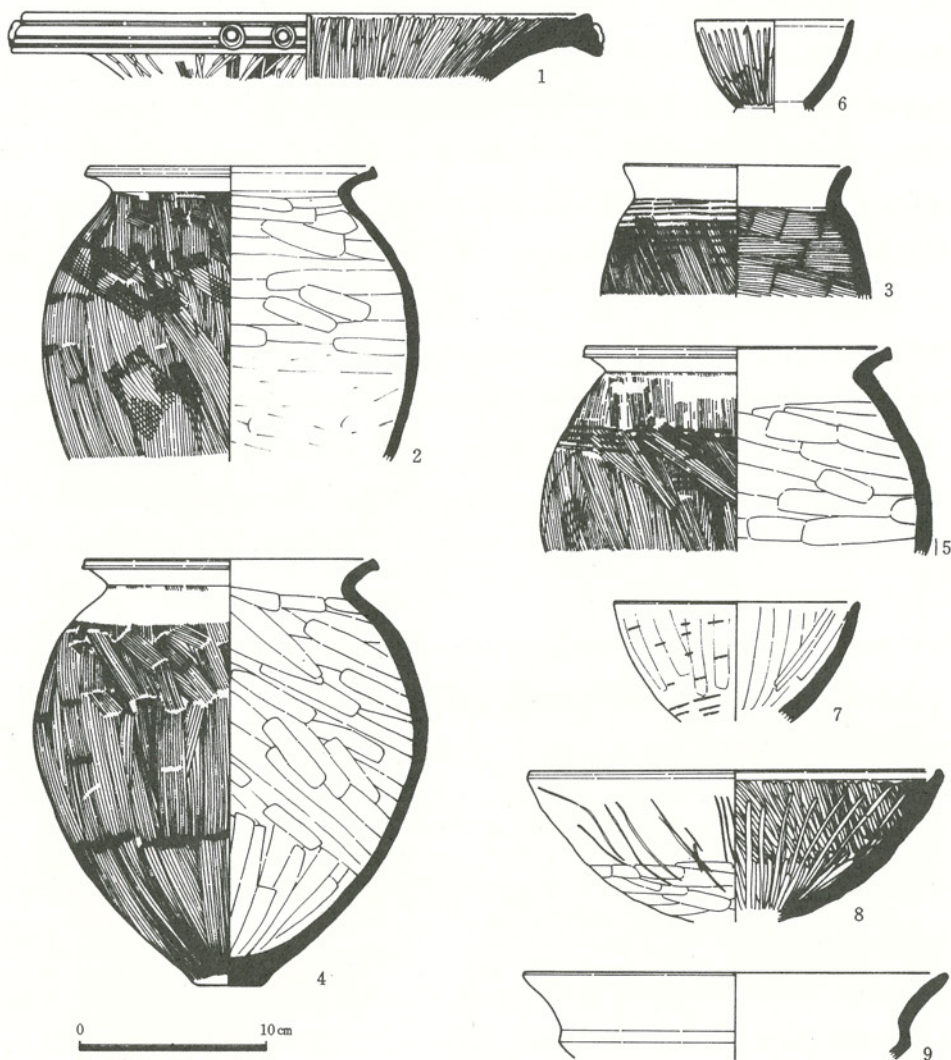


fig. 9 1号住居跡出土土器実測図

置からの出土である。

広口壺形土器(1)は口縁端部を貼り付けて外下方に拡張している。口縁部に3条の凹線を施し、円形浮文を加飾する。口縁部外面はハケのちヘラミガキ。内面は入念にタテ方向のヘラミガキを施している。

甕形土器(2・3・4・5)は口縁部が「く」の字状に外反し、体部中央に最大腹径をもつが、口縁端部をつまみ上げるもの(2)、丸くおさめるもの(3)、やや角張るもの(4・5)が認められる。(2)には擬凹線が施される。体部外面の調整はタテ方向のハケであるが、(3・5)には水平のタタキをとどめる。内面は体部上半ヨコ方向のヘラケズリ、下半タテヘラケズリであり、(3)のようなハケ目調整は例外的である。

小型丸底鉢(6)は体部のみであるが、今回の調査では比較的多く出土している器種である。口縁部はやや内彎して立ち上がり、端部を尖り気味におさめる。外面はタテヘラミガキ、内面はナデている。図示した以外に2点出土しており、体部が算盤玉形に張り出すタイプと明瞭な稜をもたずに丸くおさめるものがある。前者は口縁部外面タテヘラミガキ、内面ヨコハケで調整されており、後者は内外面及び体部外面粗いハケ目調整である。

鉢形土器は椀形状のもの(7)とやや大型のもの(8)がある。(7)はタタキ成形のち内外面ヘラケズリ。(8)は口縁外端面に1条の沈線を施す。体部外面下半はヨコヘラケズリ、上半にはヘラ状工具による搔痕をとどめる。内面は粗いハケのち入念なヘラミガキを行っている。なお胎土の塑性によるのであろうが、本個体の体部上半には焼成前の乾燥段階での収縮によると思われる器壁の亀裂が指摘される。こうした現象は本遺跡資料だけではなく、吉野川南岸鮎喰川流域の土器群にかなり認められるようである。

高杯形土器(9)は体部が屈曲して外反するものである。

その他図示していないが、広口壺形土器、讃岐系甕形土器などが出土している。

2・6号住居跡(SB102・106)

4D・E9・10グリッドで検出された。検出時点での平面プランは、東西径約8.5m、南北径約7.7mのいびつな円形を呈する竪穴式住居跡であるが、床面精査の結果、現位置での全周増築の痕跡が判明した。最初の住居跡を6号住居跡、拡張後の住居跡を2号住居跡と捉える(fig. 10)。

住居跡の埋積土は基本的に2層であり、1 暗灰黄色粘質土、2 オリーブ黒色粘質土である。

6号住居跡は南北7m、東西6.4mの円形プランをもつ。地山を壁とし、残存する壁高約13cmを測る。壁際には幅10cm、深さ7cmの周壁に用されたと推定される周溝を伴う。中央より僅かに東によった位置に、長軸110cm、短軸80cm、深さ約20cmの楕円形の炉(炉1)を構築している。本住居跡に伴うと考えられる支柱穴は6本である(P1・P2・P3・P4・P5・P6)。柱穴の深度は15~20cmのもの(P1・P4・P5)、30cm代のもの(P2・P3)、50cm代のもの(P6)であり、各柱心間距離はP1—P2 2m、P2—P3 2.5m、P3—P4 2m、P4—P5 3m、P5—P6 2.5m、P6—P1 2.5mである。深度35cmの中心柱(P7)をもち、床面からは鉄鏝が1点出土した。

2号住居跡は6号住居跡を削平、6号住居跡床面に地山のオリーブ黄色粘質土を貼って床とした住居跡である。残存する壁高15cmで、幅10cm、深さ5cmの周溝を巡らせる。支柱穴は6号住居跡と同位置にあるが、壁面との関係からは、P4・P5に代わり、P8・P9が掘り直された可能性も考えられる。この場合の柱心間距離はP1—P2 2m、P2—P3 2.5m、P3—P8 2.5m、P8—P9 3m、P9—P6 3m、P6—P1 2.5mとなり、P8の深度34cm、P9の深度40cmを測る。

本住居跡に伴う炉跡(炉2)は、長軸100cm、短軸120cm、深さ約8cmの浅い皿形状を示し、床面中央部より南に偏在して炉1と重複して形成されている。炉の北側には炭の掻き出し痕が認められ、また床には部分的に炭、焼土の拡がり指摘された。本住居跡は東壁面に方形土坑と切り合い関係をもつが、南壁部分には長さ約3m、幅70cmの張り出し部を伴う。床面より僅かに張り出し部のレベルが高い。本住居跡床面からも鉄鏝2点出土しているが、土器類の一括遺物は存在しない。本住居跡は確実に火災に遭遇しており、床面には垂木と推定される炭化材が中央部に向かって放射線状に検出された。南西部を5号住居跡に切られている。

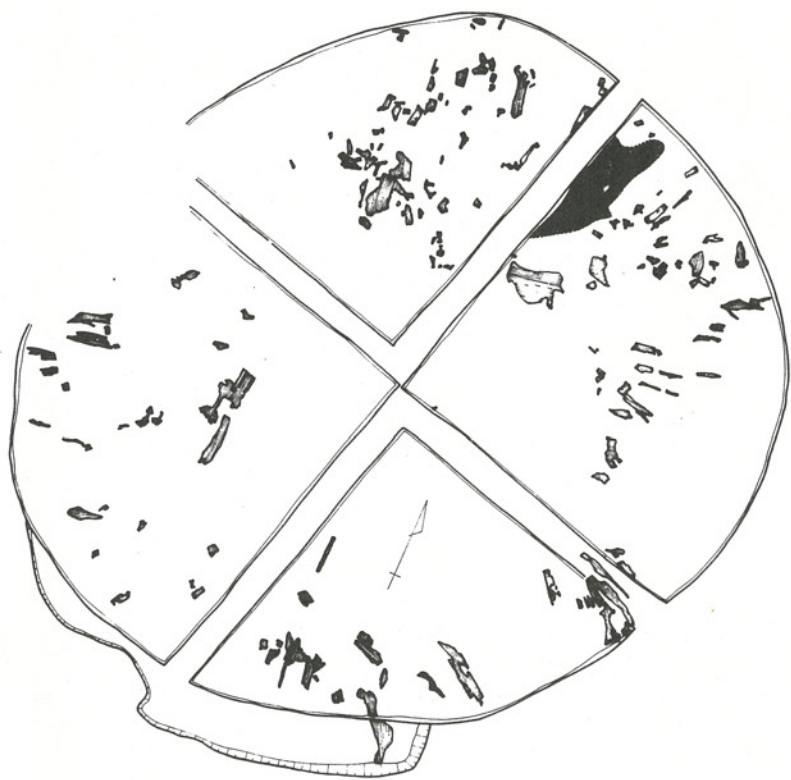
2号住居跡出土の土器 (fig. 11)

覆土中より多量の土器が出土しているが、床面からの一括遺物は存在しない。壺形土器(1)は口縁部が緩やかに屈曲して立ち上がり、二重口縁壺の亜形態ともいべきものである。口縁部はナデで調整されており、頸部外面はタテハケをとどめる。口縁部がこれほどカーブしない形態は徳島市樋口遺跡に類例をみる。(2)は広口壺形土器。口縁部は水平にのび、端部を上下に拡張する。3条の凹線を施す。頸部外面はタタキのちハケ目調整である。

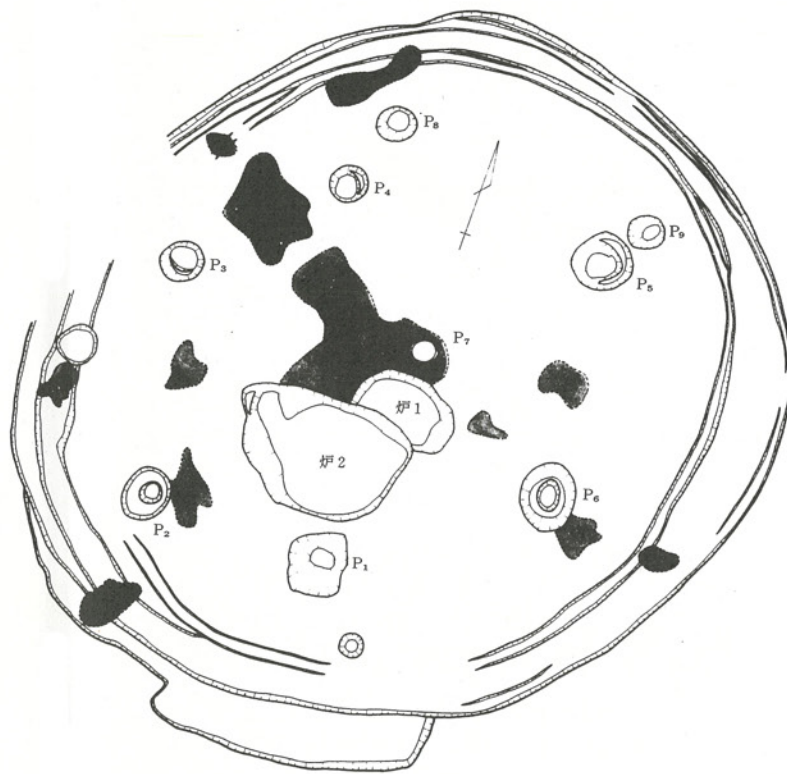
甕形土器(3)は口縁部が「く」の字状に外反し、端部が肥厚する。2条の擬凹線をとどめ



標高 1.00M



標高 1.00M



標高 1.00M

0 3 M

1. 暗灰黄色 2.5Y 粘質土 2. オリーブ黒色 5Y 粘質土 3. 黒褐色 2.5Y 粘質土 3'. 黒褐色 2.5Y 粘質土 (網目は焼土の範囲)

fig. 10 2・6号住居跡実測図

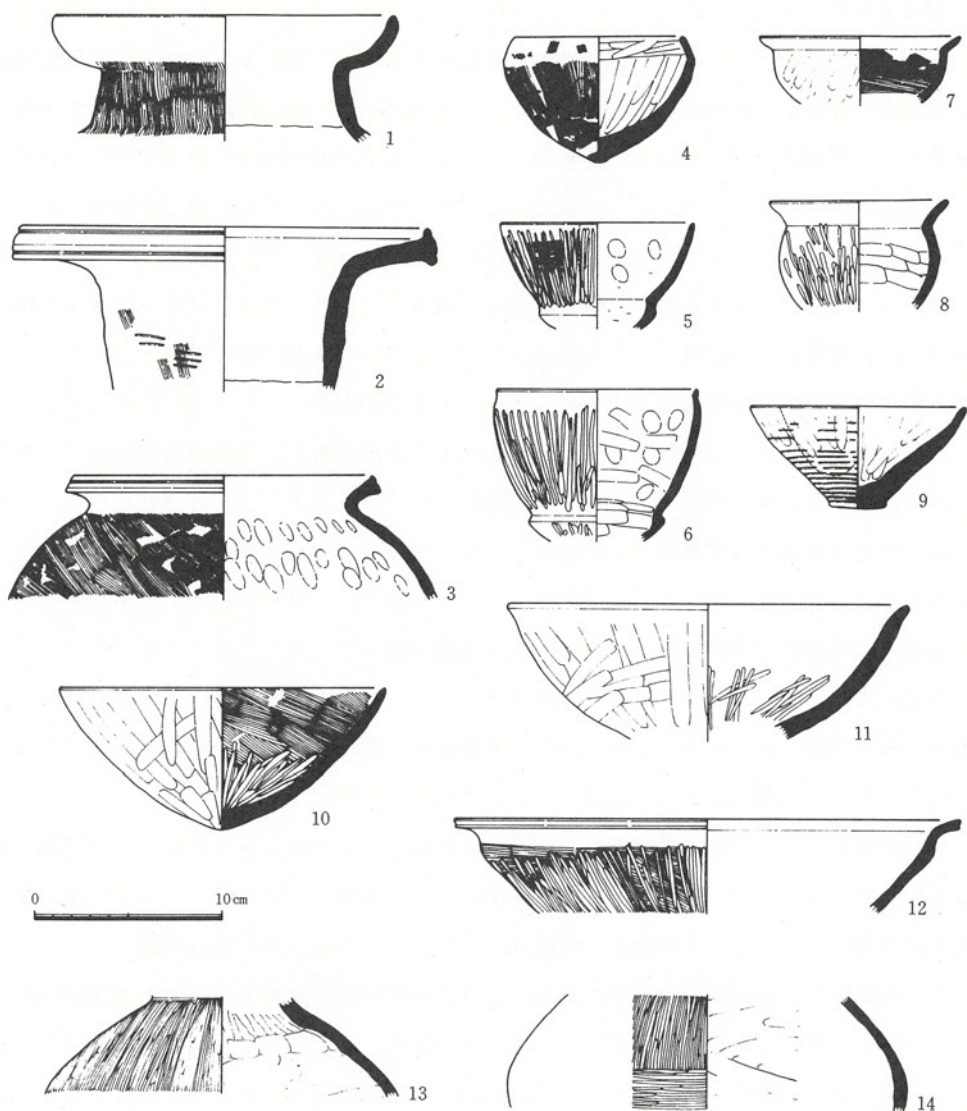


fig.11 2号住居跡出土土器実測図

る。体部外面は細かいハケ、内面は指頭圧痕をとどめる。

鉢形土器（4～12）は様々なタイプがある。(4)の小型鉢形土器は内傾する口縁端部と尖り気味の底部をもつ。体部外面は細いタタキのちハケ目調整、内面は口縁部ヨコヘラミガキ、体部ヘラケズリである。溝3出土の(4)と同様の胎土である。このように口縁部が内傾しないが、同様のプロポーシ⁽⁸⁾ョンをもつ鉢形土器は、兵庫県長越遺跡1号住居跡出土例

に類例をみる。

小型丸底鉢(5・6)は時期的に共伴すると思われるが、形態的差異がある。(5)は口縁部が緩やかに外彎し、体部との境がなだらかであるのに対し、(6)は口縁端部が僅かに内彎気味であり、体部との境に明瞭な稜を形成する。一方体部内面では(5)に稜の形成が顕著である。(5)は口縁部外面ヨコハケのちタテヘラミガキ、内面ユビオサエ。体部内面ヘラケズリをとどめる。(6)は口縁端部内外面ナデ、口縁部外面タテヘラミガキ、内面ユビオサエのちヨコヘラケズリ、体部外面タテヘラミガキ、内面ヨコヘラケズリである。口縁部と体部境はナデで調整されている。小型丸底鉢は図示した以外に3個体分の破片が出土している。胎土中吉野川南岸鮎喰川流域の土器群に一致を示すものが多い。

鉢形土器(7・8)は口縁部が外反し、やや扁平な体部をもち、丸底の底部を示す小型のものである。(7)は体部外面ヘラケズリ、内面細かいヨコヘラケズリ。(8)は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリである。(9)は平底の底部に内彎気味の体部をもつ小型の鉢。体部外面は水平のタタキののち粗いヘラケズリ、内面ヘラケズリを施す。(10・11)は尖り気味の底部に内彎気味の体部を有す中型の鉢である。(10)は体部外面ヘラケズリ、内面ナナメハケのち下半ヘラミガキ、(11)は外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキをとどめる。(12)は口縁部が外反し、平底をもつ大型の鉢である。口縁部はナデにより擬凹線状をなす。体部外面ヨコハケのちヘラミガキで調整する。

長頸壺形土器(13・14)は小片であるが3個体分出土している。いずれも球形の体部か算盤玉形の体部をもつものと思われる。(13)は体部外面上半タテ方向の細いヘラミガキ、体部中央ヨコ方向のヘラミガキを施す。内面はヘラケズリである。(14)も体部外面はタテヘラミガキ、内面はヘラケズリであるが、頸部との境に絞り目をとどめる。いずれも暗茶褐色(チョコレート色)を呈し、器形的には萩原墳墓群出土の長頸壺形土器に類似しており、同じ胎土を有している。このタイプの壺形土器と胎土は遺物包含層資料にもさほど多くはないが、かなり広範に認められる。

図示した以外にも口縁部内面、及び頸部に竹管文を巡らす広口壺形土器、高杯形土器、讃岐系甕形土器片などが出土している。

3号住居跡(SB103)

4EF8グリッドに位置する竪穴式住居跡で、直径6.8mを測る(fig.12)。本住居跡も2・6号住居跡と同様に方形土坑と切り合い関係をもつ。現地点では土層の観察からは住居

跡に伴うものとは考えられないが、後時期に住居跡に付設された遺構としての可能性はあり、今後の課題としておきたい。住居跡内の埋積土は2層に分離でき、1 黒褐色粘質土、2 暗灰黄色粘質土である。本住居跡も検出面からの湧水が激しく、床面が地下水位によって絶えず上下に震動するというような状態であった。地山を壁とし、壁高25cmを測る。壁際には一部周溝の痕跡が認められたが、全周するかどうかは不明である。また部分的に二重に巡る箇所が指摘されるが、これについても拡張痕跡を示すものであるか否かは明確にし難い。

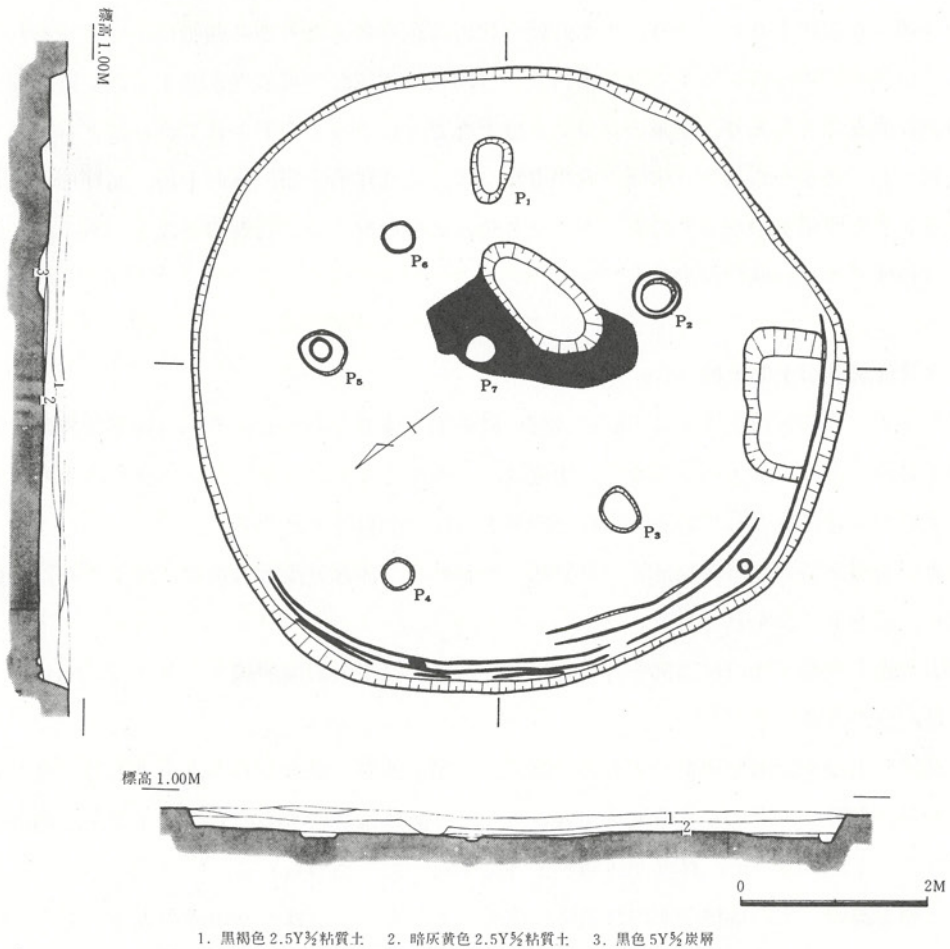


fig. 12 3号住居跡実測図

支柱穴と考えられるピットは5本である(P1・P2・P3・P4・P5)。いずれも遺構面形成土下層の砂層—例えば本住居跡では床面下10cm程度で砂層になっているが—に切り込んでいるため、本来の深度は明確ではない。各柱心間距離は2.5mで対応しており、2・6号住居跡と同様に中心柱穴(P7)をもつ。炉跡は中央部より南東に偏在されており、長軸160cm、短軸70cm、深さ8cmの長楕円形のプランを呈している。床面には北西に向って炭の掻き出し痕がみられた。床面南西には周溝に接して長軸160cm、短軸80cmの長方形プランをもつ深さ約5cmの浅い貯蔵穴に類似した落込みが検出されたが、若干の土器細片を出土したのみであり、性格については今ひとつ明らかにし難い。

本住居跡の平面プランは一見円形を呈すように見えるが、最終段階の精査の結果、北壁の一辺が直線状をなしており、また貯蔵穴状の落込みのあたりから西側にかけてやや角張っているところから判断すると、多角形(五角形か)住居跡の可能性が強まった。遺構面土質の軟弱なこともあり、本来のプランが様々な要因によって変形されていることも考慮に入れておく必要がある。床面からの遺物には、有孔鉢形土器、鉢形土器、高杯形土器がある。また埋積土中からではあるが、ミニチュアの壺形土器、石製勾玉など、他の住居跡には指摘できない遺物が出土している。

3号住居跡出土の土器 (fig. 13)

ミニチュアの壺形土器(1)は平底の底部に肩の張る体部をもつもので、口縁部は外反する。体部外面上半はナナメヘラミガキ、中位はヨコヘラミガキ、下半はタテヘラミガキである。いずれも入念になされている。口縁部内外面にはハケ目をとどめる。

直口壺形土器(2)は口縁端部を尖り気味におさめる。体部外面は入念なヘラミガキ、内面は粘土紐巻上げ痕をとどめる。

広口壺形土器(3)は口縁端部を外下方につまみ出す。1条の擬凹線をとどめる。内外面ハケ目調整である。

高杯形土器(4)は碗形状を呈すもので脚部を欠損するが、床面からの出土である。受部は緩やかに内彎し、端部を尖り気味におさめる。外面はヨコハケののちヘラミガキ、内面はヘラミガキである。他に杯部が屈曲して外反するものも認められる。

鉢形土器(5・6)は体部が内彎気味に立ち上がるもの。(5)はやや口径の大きいもので、外面は水平タタキののち下半にヘラミガキを施す。上半は粘土紐巻上げ痕を入念にナデて調整している。内面はヨコハケののちヘラミガキを施している。(6)は口縁端部をユビオサ

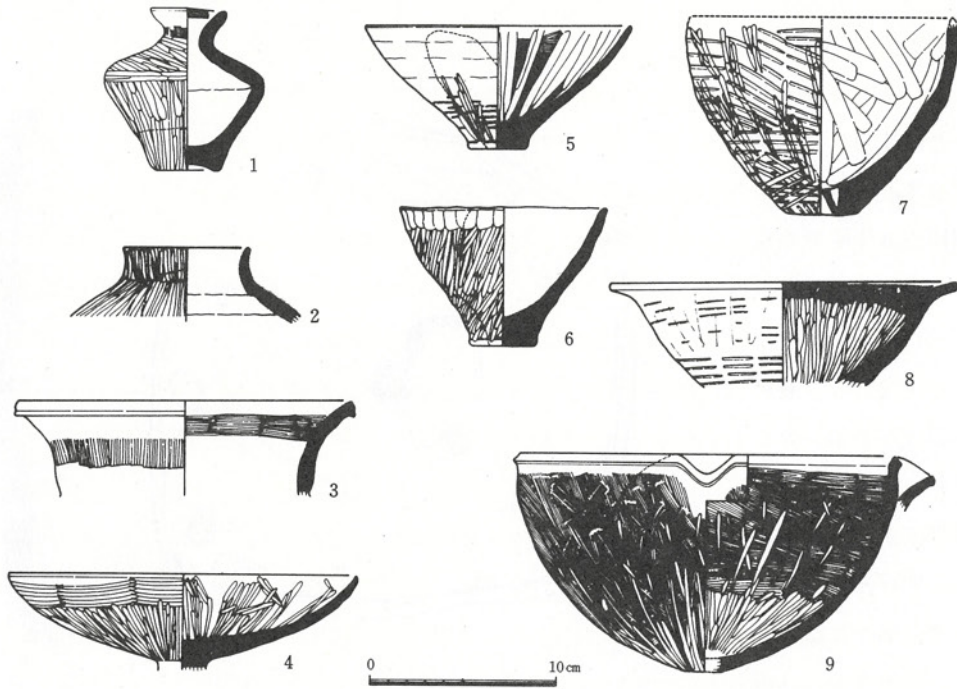


fig. 13 3号住居跡出土土器実測図

エにより成形する。体部外面はヘラミガキである。

有孔鉢形土器(7)は床面からの出土である。2孔施すが、1孔は貫通していない。体部外面幅の広いタタキののち粗いヘラミガキ、内面粗いヘラケズリである。吉野川南岸の胎土である。

鉢形土器(8)は口縁部が外反するものであるが、屈曲はさほど強くない。体部外面はタタキのちナデで消しているが、器壁の亀裂が認められる。内面は口縁部細い連続するハケ目調整、体部入念なヘラミガキである。(9)は片口をもつ大型の鉢で、口縁端部を僅かに拡張する。体部外面はタタキのち細かいハケ調整、のち粗いヘラミガキを施す。これも器壁に亀裂を生じている。内面はヨコハケのちヘラミガキである。

4号住居跡 (SB104)

4A9・10グリッドに位置する。東壁の一部は方形周溝墓の周溝に、西側は溝111に切られている。一辺約4.5mを測る隅丸方形竪穴式住居跡であるが、上層の堆積土圧によって

東、南壁がやや外側に張り出している (fig. 14)。1号住居跡とほぼ同一の規模を有す。住居跡内の埋積土は3層であり、1 暗灰黄色粘質土、2 にぶい黄褐色粘質土、3 オリーブ褐色粘質土となる。地山を壁とし、壁高28cmを測る。南・東壁際には幅8 cm、深さ4 cmの周溝をとどめるが、北壁部分には痕跡は認められず、壁から床にかけてなだらかな落込み状を呈し、1号住居跡に似た在り方を示している。

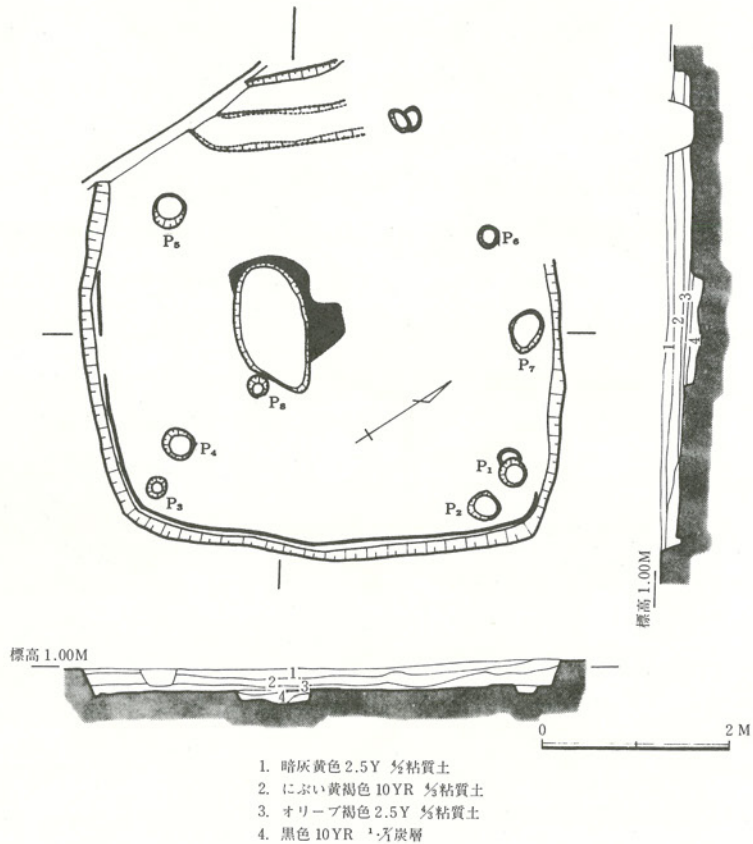


fig. 14 4号住居跡実測図

床面に検出されたピットは8か所をかぞえるが、いずれも深度が20cm以下のものであり、P1・P2に位置関係から一応主柱穴を想定できるが、他のピットは柱穴としては十分な属性に欠ける。全体を調査した訳ではないが、この対応関係から柱心間距離約3.5mをもつ4本主柱の構造を考えておきたい。炉は床中央より多少南に偏在して構築されており、長軸150cm、短軸85cm、深さ約15cmの楕円形の平面プランをもつ。炉の北側に炭の掻き出し痕をとどめる。本住居跡も埋積土中に炭化物・焼土を含み、壁面に火をうけた痕跡をとどめていたが、火災の所産であるかどうかは明らかにできなかった。床面からの一括遺物は存在しないが、炉跡に落込んだ状態で若干の土器が出土している。

4号住居跡出土の土器 (fig. 15)

広口壺形土器(1・2)は口縁端部が垂直に立ち上がるものとやや内傾するものである。いずれも口縁部に2条の擬凹線を施す。(1)は頸部外面タテハケ、内面ヨコハケをとどめる。突帯を付加する例としては萩原墳墓群出土例⁽⁹⁾があるが、口縁部が水平に伸びる形態差がある。(1)は明らかに吉野川南岸の胎土である。

(3)は外彎しながら広がる口縁部をもち、体部は球形を呈するものと思われる。奈良県纏向遺跡壺Bに対応する。口縁部外面細いタテヘラミガキ、内面ヨコヘラミガキ。体部外面幅の広いヘラミガキである。胎土中に多量の砂粒を含む。

甕形土器(4・5)は口縁部が「く」の字状に外反し、やや球形の体部をもつものである。

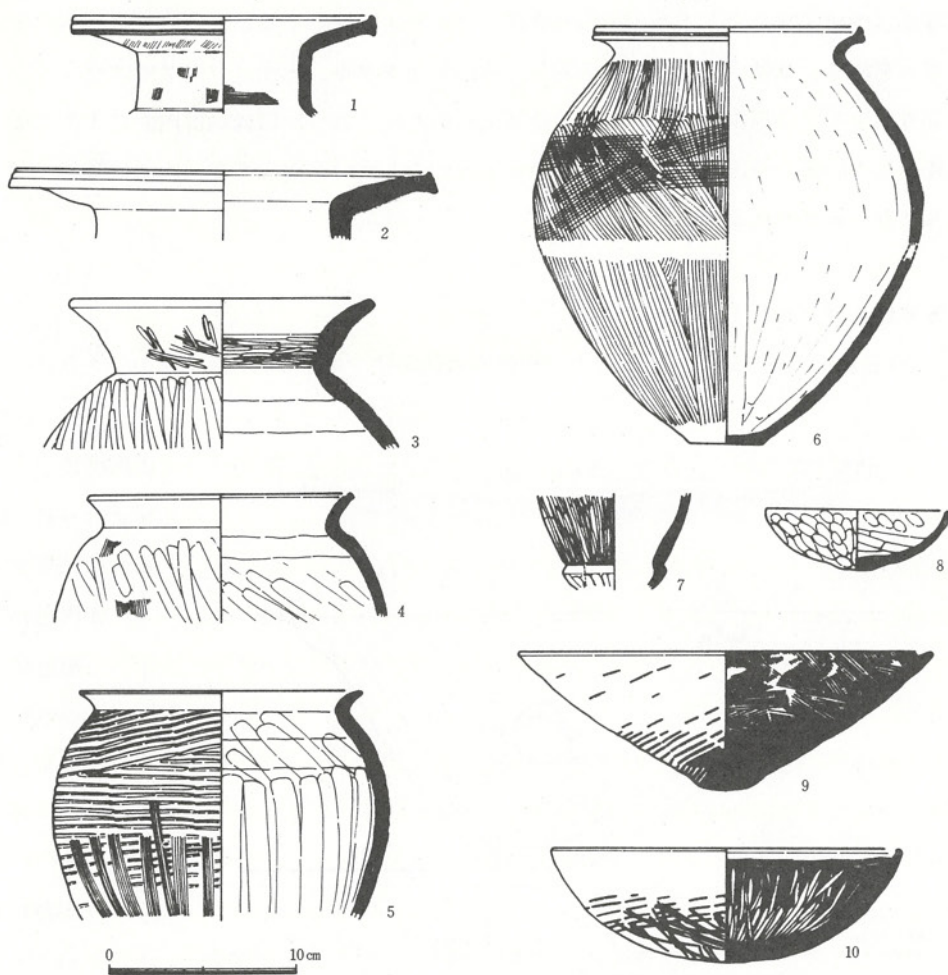


fig. 15 4号住居跡出土土器実測図

(4)は口縁部内面に1条の沈線を施す。体部外面はハケのちヘラケズリ、内面はヘラケズリで成形する。(5)は体部外面タタキのち下半にハケ目調整を施す。内面は口縁部際までヘラケズリである。

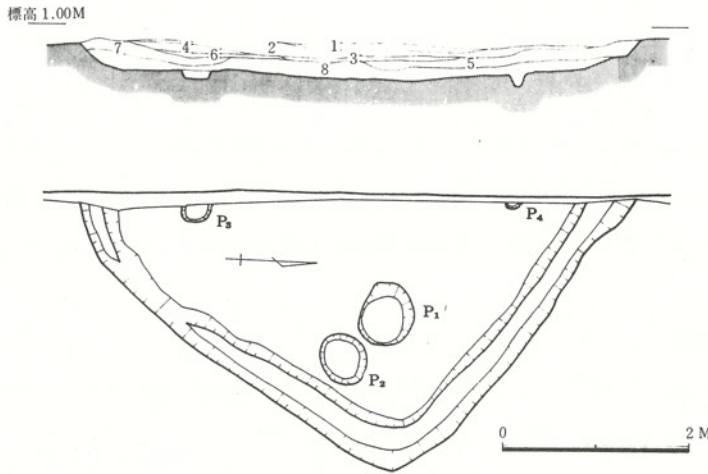
甕形土器(6)は口縁部を屈曲して端部をつまみ上げる。1条の擬凹線をとどめる。平底で体部中央に最大腹径をもつ。外面はハケ目、内面はヘラケズリを施す。

小型丸底鉢(7)は体部がさほど屈曲しないタイプのものである。口縁部外面はハケのち入念なヘラミガキであるが、体部との境屈曲点にハケ目をとどめる。体部外面下半はヘラケズリである。

鉢形土器(8・9・10)は小型から大型までである。(8)は僅かに平底を残した小型のもので、口縁部は内彎気味に立ち上がる。内外面共ユビオサエで成形するが、内面下半はヘラケズリをとどめる。(9)は平底をとどめており、体部外面タタキ、内面ヨコハケで調整するが、体部外面上半には亀裂を認める。(10)はほぼ丸底のものであり、口縁端部内面に1条の弱い沈線をとどめる。外面は右上がりの細かいタタキのち粗いヘラミガキ、内面はヨコハケのちヘラミガキである。

5号住居跡 (SB105)

4 D・E10グリッドに位置する隅丸方形竪穴式住居跡であるが、一部を検山しえたにとど



- | | | | |
|-----------------|-------------------|--------------------|---------------------|
| 1. 黄褐色 2.5Y 粘質土 | 2. にぶい赤褐色 5YR 粘質土 | 3. 褐色 7.5YR 粘質土 | 4. 褐色 10YR 粘質土 |
| 5. 暗褐色 10YR 粘質土 | 6. 暗灰黄色 2.5Y 粘質土 | 7. オリーブ褐色 2.5Y 粘質土 | 8. 暗オリーブ褐色 2.5Y 粘質土 |

fig. 16 5号住居跡実測図

まる (fig. 16)。住居内埋積土は8層認められ、1 黄褐色粘質土、2 赤褐色粘質土、3 褐色粘質土、4 褐色粘質土、5 暗褐色粘質土、6 暗灰黄色粘質土、7 オリーブ褐色粘質土、8 暗オリーブ褐色粘質土となる。

地山を壁としているが、1号住居跡と同様に床と壁との境が明瞭ではなく、僅かにテラス状の段を形成しており、周溝は認められない。規模的には1・4号住居跡とほぼ同一と考えられる。床面の海拔42cmを測る。

床面の精査の段階では砂泥の吹き上げが激しく、崩壊したが、直径70cmの砂層を切り込んだピット(P7)から鉢形土器が1点出土している。ピットは他に3か所認められたが、いずれも砂層を切り込んでいるため僅かにプランを把握できたのみである。明確な柱穴については不明である。本住居跡からは、石錘が2点出土している。壁高30cmを測る。

5号住居跡出土の土器 (fig. 25)

小型丸底鉢(1)は口縁部と体部境が屈曲し、体部に稜を形成するが、体部のあまり発達しないものである。口縁部外面タテヘラミガキ、内面ユビオサエ、体部内面ヨコヘラケズリである。口縁端部は僅かに外反気味である。

鉢形土器(2)は口縁部が殆ど発達しないものである。球形の体部をもち、僅かに平底をとどめる。体部外面右上がりのタタキののち粗いハケ目調整。内面ヨコハケののちヘラケズリを施す。口縁部は貼り付けられている。

鉢形土器(3)はほぼ丸底で、体部は内彎気味に立ち上がる。体部内外面共ヘラケズリである。P7からの出土である。

7号住居跡 (SB107)

土壇8・1号住居跡に切られている。僅かに1号住居跡北側に5m程度の円形プランの一部を遺存する竪穴式住居跡である(fig. 8)。地山を壁とし、床面までの深さ32cmを測る。住居跡内埋積土は1 にぶい黄褐色砂質粘質土、2 黄褐色砂質粘質土である。周溝は認められず、床面より鉢形土器が1点出土しているのみである。

7号住居跡出土の土器 (fig. 25)

鉢形土器(4)が1点床面から出土している。平底で体部は内彎気味に立ち上がる。体部内外面ハケのちヘラケズリである。吉野川南岸の胎土である。

1号建物跡 (SA101)

4C・D10グリッド、1号住居跡北側に位置する堀立柱建物跡である(fig.17)。主軸を北

東—南西にもち、梁間1間・桁行3間まで確認された。梁間3m、残存桁行3.7mを測る。柱穴はP1—P7をとどめ、各柱穴間距離は1.3, 1.2, 2.9, 1.2, 1.3mを測る。各柱穴の深度は20~40cmで、プランは概ね直径28cmの円形を呈する。オリブ灰色粘質土で充填されている。柱穴内から土器細片が出土しているが、位置関係からは円形住居跡群に伴うものと考えられる。

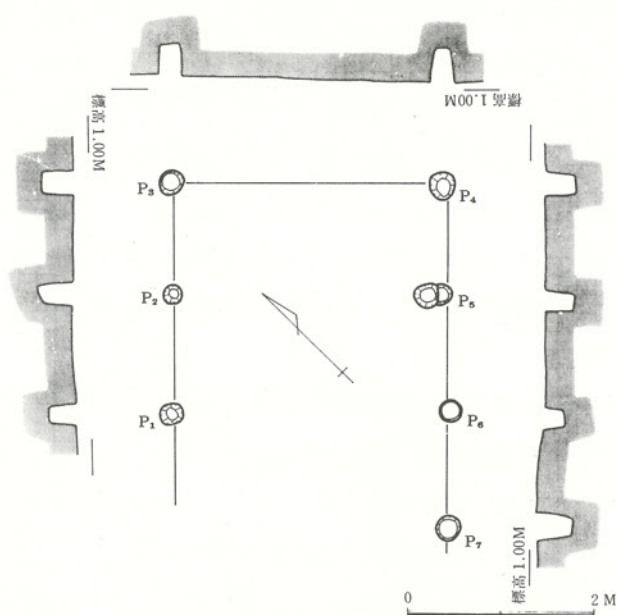


fig. 17 1号建物跡実測図

2号建物跡 (SA102)

4I10グリッドの緩やかに南東に下降する傾斜面に位置する堀立柱建物跡である(fig. 18)。主軸を北西—南東にもち、梁間1間・桁行3間まで確認された。梁間長4m、残存桁行長5mを測る。柱穴はP1—P6をとどめ、各柱穴間距離は1.7, 3.9, 1.8, 1.5, 1.6mを測る。柱穴の深度は40~50cmで、プランは概ね直径40cmの円形を呈するが、P3~P6には、20cm程度の柱痕が認められた。ピット内埋積土はオリブ灰色粘質土で充填されている。土器細片が出土しているが、本建物跡も円形住居跡群に伴うものと考えられる。

方形周溝墓 (SD104・SK117・118)

4A・B7・8・9グリッドで検出されたが、 $\frac{1}{3}$ 程度精査しえたにとどまる。周溝の一边10m以上を測る。コーナー部は4B8グリッドに1か所検出した。周溝幅90cm、深さ30cmを測り、4号住居跡と切り合い関係をもつ。周溝内埋積土は1 暗灰黄色粘質土、2 暗オリブ褐色粘質土で、梯形断面を有す。周溝内からは壺形土器、鉢形土器片などが出土しているが、供献されたと考えられる出土状態ではなかった。周溝墓マウンドは4A8・9グリッドで僅かに地山上にオリブ灰色粘質土が約10cm遺存していた。

埋葬施設は全体の様相は不明であるが、中央部に方形のコーナーをもつ墓壇域(1号

墓壇域)の
 一部が認め
 られ、その
 北東に1号
 墓壇域を切
 るかたちで
 2号墓壇域
 が構築され
 ている。1
 号墓壇域の
 規模は不明
 であるが、
 深さ約20cm、
 一辺3m以
 上を測り、
 内部から鉄
 器片が1点
 出土した。

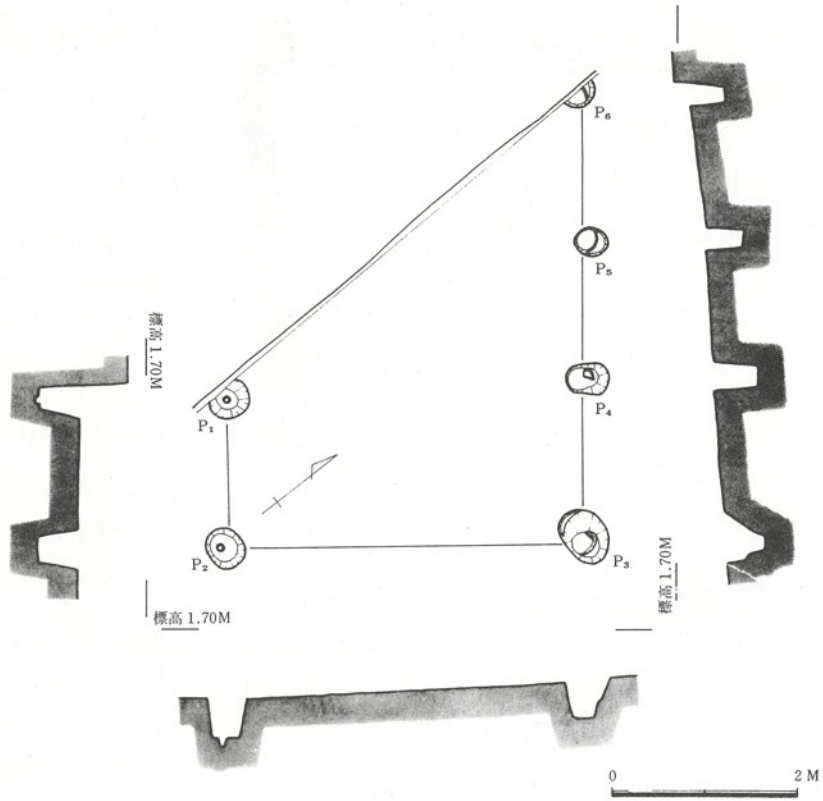


fig. 18 2号建物跡実測図

墓壇域内埋

積土はオリーブ褐色粘質土である。

2号墓壇域は東西3.2m、南北4.0m、深さ20cmの長方形の規模を有し、北東—南西の主軸をもつ。地山を切り込んで構築されており、埋積土はオリーブ褐色粘質土であるが、掘り方検出面には炭化物と焼土の堆積が約4cm認められた。墓壇域内には2基の墓壇が並列しており(fig. 19)、墓壇西側には壺形土器片、甕形土器などの供献土器が配されている。

S K 117と呼称する墓壇は長軸105cm、短軸71cm、深さ約20cmの楕円形プランを有して掘り込まれており、内部に体部下半を打ち欠いた二重口縁壺を墓壇内北東部に安置し、北西部に鉢形土器を供献している。主軸を北東—北西にもち、墓壇内埋積土は暗灰黄色粘質土であるが、壇底には約2cmの厚さで炭化物層の堆積が認められた(fig. 20)。本墓壇の東南掘り方上には、墓標として置かれたと推定される砂岩河原石2個が積んだ状態で認められ、さらに標石北にも破碎・供献されたと考えられる甕形土器片が検出され、その下、地山に接して

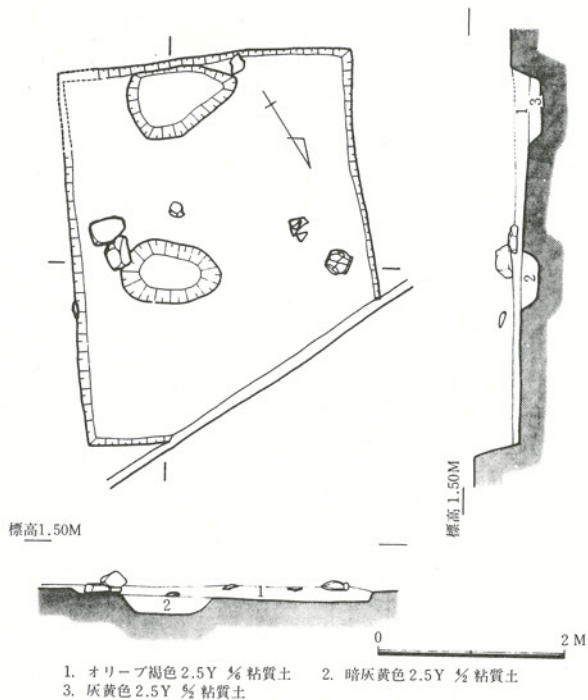


fig. 19 2号墓壇域実測図

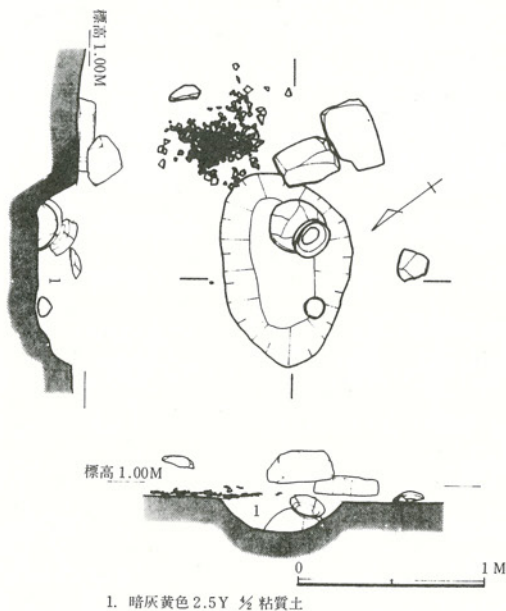


fig. 20 土壇17実測図

炭化物の拡がりが見られた。

S K 117の南側に位置する墓壇・S K 118は長軸118cm, 短軸78cm, 深さ13cmを測り, 東部分が広がった不整楕円形の平面プランを有す(fig. 21)。埋積土は灰黄色粘質土である。墓壇内供献土器は存在しないが, 墓壇掘り方北西隅にS K 117と同様に破砕された供献土器片が検出された。本墓壇は墓壇域掘り方に接して構築されているが, 接点, 即ち墓壇掘り方上面には鉢形土器を中心とした土器が列状に供献されていた。

墓壇域の位置関係からは, 1号墓壇域が周溝墓本来に伴う中心埋葬施設と考えられるが, 2号墓壇域の存在から複数の主体が推定されよう。

方形周溝墓自体は徳島県では名西郡石井町清成遺跡⁽¹⁾, 三好郡池田町東州津遺跡⁽²⁾に類例があるが, いずれも周溝の一部が確認されているにすぎず, 具体的様相については今後の資料の増加がまつられる。

方形周溝墓出土の土器 (fig. 22)

(1~7)は周溝内, (8~13)は墓

堀域に伴う土器である。図示した以外に周溝内からは比較的多くの土器が出土している。

広口壺形土器(1)は瀬戸内系長頸壺形土器の延長上にあるものと思われる。外方にのびる頸部と外反する口縁部を有し、球形の体部がつくものである。口縁端部は上方に鋭くつまみ上げている。口縁部外面に2条の凹線を施す。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。口縁部の形態に若干の相違はあるが三好郡三好町足代東原遺跡⁽¹³⁾にも類例があり、当該時期の徳島では広範に認められる器形と考えられる。

(2)の広口壺形土器は直立する頸部と緩やかに外上方に屈曲する口縁部を呈し、卵形の体部を有す。口縁部は内外

面ナデで端部を丸くおさめる。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケ。体部外面は右上がりのタタキののちタテハケ、内面はヘラケズリである。平底の底部がつくものと思われる。

鉢形土器(3)は口縁部が外反するもので、丸底の底部をもつものである。体部外面はタタキののちハケ、内面は細かいハケである。

(4・5)は小型丸底鉢である。図示した以外に4個体分の小片が出土している。(4)は体部と口縁部の境が緩やかに屈曲して内彎気味に立ち上がるもので、体部に稜は形成されない。口縁端部はナデで尖り気味におさめる。口縁部外面は粗いヘラミガキ、内面は指頭圧痕をとどめる。体部内面はヨコヘラケズリである。吉野川南岸の胎土かと思われる。(5)は底部のみの出土であるが、ほぼ丸底を呈している。この形態以外に尖り気味の小さな平底をもつものが認められる。外面タタキのち粗いハケ、のち底部にヘラミガキを施している。内面は細かいヘラケズリである。

鉢形土器(6・7)は平底のものである。(6)は小さな平底に内彎気味に立ち上がる体部を有す。体部外面は水平タタキ、内面はヨコハケであるが、下半にクモの巣状ハケ目をとど

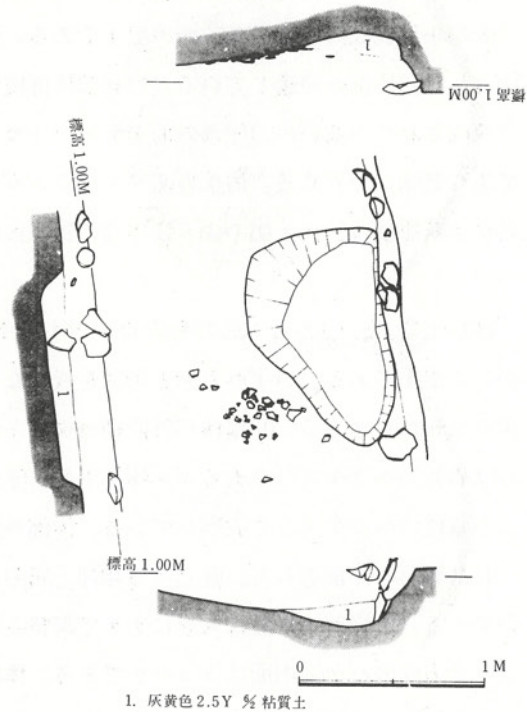


fig. 21 土坑 18実測図

める。(7)は中型のもので、体部外面水平タタキ、内面ナナメハケで調整される。

(8)の小型丸底鉢は1号墓壇域の出土である。他の類例の体部がやや扁平なのに対し、本例は比較的体部が発達している。口縁部体部境は大きく屈曲するが丸みをおびており、稜は形成されていない。口縁部外面タテヘラミガキ、内面指頭圧痕をとどめる。端部はナデで尖り気味におさめる。体部外面タテヘラミガキ、内面ヨコヘラケズリである。本遺跡資料には萩原墳墓群出土例のように体部の屈曲部にヨコヘラミガキを施す手法は指摘されない。

鉢形土器(9・10)は丸底のもので、(9)は2号墓壇域内供献土器、(10)は墓壇17(S K 117)からの出土である。いずれも殆ど平底を残さない深い碗形状を呈するもので、口縁端部は尖り気味におさめる。(9)は体部外面細いタタキののちヘラケズリ、内面細かいハケ目調整。(10)は内外面ヘラケズリであるが、体部下半に僅かにタタキ目をとどめており、また底部際は小単位のヘラケズリで成形している。体部外面上半に器壁の亀裂を認める。

(11)は球形の体部をもち、直立する頸部と屈曲して外反する口縁部をもつ二重口縁壺形土器である。口縁部内外面は入念にナデで調整され、屈曲部に弱い稜を形成する。頸部外面はタテ方向のハケ、内面はヨコハケである。体部外面は右下がりのタタキののち細いタテハケを施し、そののち上半に1条毎のタテヘラミガキを体部中央に向って放射線状に施す。内面はユビオサエののちヘラケズリである。墓壇17(S K 117)の出土。

鉢形土器(12)は丸底で内彎気味に立ち上がる体部を有す。浅い碗形状である。口縁端部はやや肥厚し、上端に1条の沈線を施す。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキで仕上げる。2号墓壇域の供献土器である。

甕形土器(13)は球形にちかい体部に「く」の字状に外反する口縁部をもつもので、口縁端部は内傾してつまみ出されている。端部に1条の擬凹線をとどめる。丸底である。体部外面は僅かに右上がりの幅の細いタタキののち外底面まで細かいハケ目調整、内面は下半ヘラケズリであるが、上半には指頭圧痕をとどめる。外面下半に煤の付着、内面下半には焦げ付き痕を認める。2号墓壇域の供献土器である。図示していないが、墓壇17の掘り方に供献された甕形土器も同様の口縁部形態を呈している。

土坑1 (S K 101)

4 H 8 グリッドに位置する。主軸を南北にもち、長軸 180 cm、短軸 130 cm、深さ 35 cmを

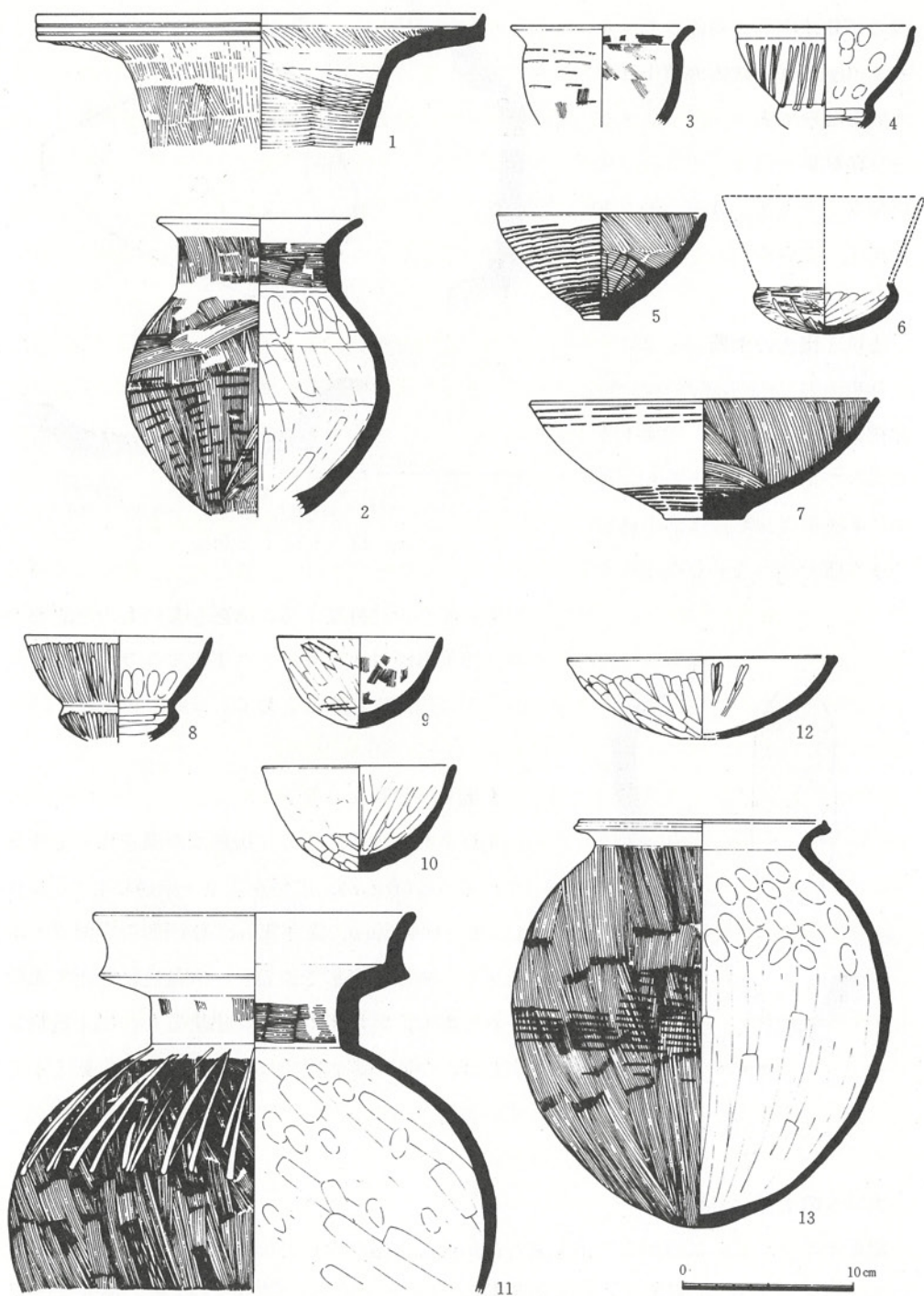


fig. 22 方形周溝墓出土土器実測図

測る不整楕円形の平面プランを有す(fig. 23)。土坑内埋積土は基本的に2層であり、1 灰オリーブ色粘質土、2 オリーブ褐色粘質土となる。鉢形土器などが出土している。

土坑 1 出土の土器 (fig. 25)

鉢形土器(5)は平底のもので、体部外面へラミガキ、内面へラケズリである。壺形土器(6)は僅かに平底を残した、体部中央があまり張り出さない算盤玉形を

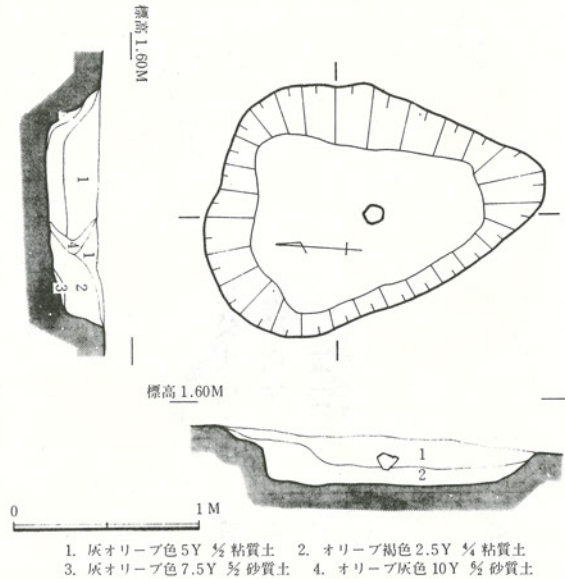


fig. 23 土坑 1 実測図

呈す。緩やかに外反する口縁部をもつものと思われる。体部外面はタタキのち下半にへラケズリ、内面上半に指頭圧痕をとどめる。

土坑 6 (SK 106)

4 D 7 グリッド、1号住居跡南西隅を切って構築されている(fig. 24)。主軸を北東—南西にもち、長軸 125 cm、短軸 50 cm、深さ 25 cm の楕円形の平面プランを呈し、断面船底形である。暗灰黄色粘質土で充填されており、甕形土器などが出土した。出土遺物によれば、今回の調査区では最も新しい年代観を示している。

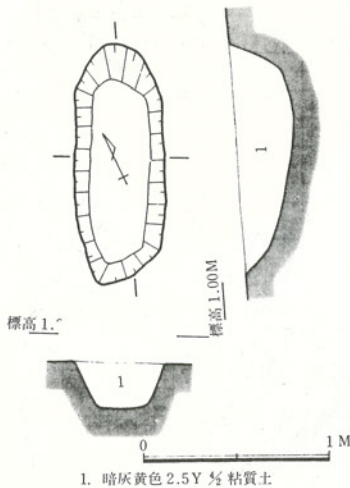


fig. 24 土坑 6 実測図

土坑 6 の土器 (fig. 25)

甕形土器(12・13)は球形の体部をもち、口縁部は緩やかに外反し端部を上方につまみ上げる。いずれも体部外面ハケ、内面指頭圧痕をとどめる。(13)は讃岐系の胎土である。ほかに奈良県纏向遺跡辻地区土坑 4 にみられる鉢形土器 D を出土している。

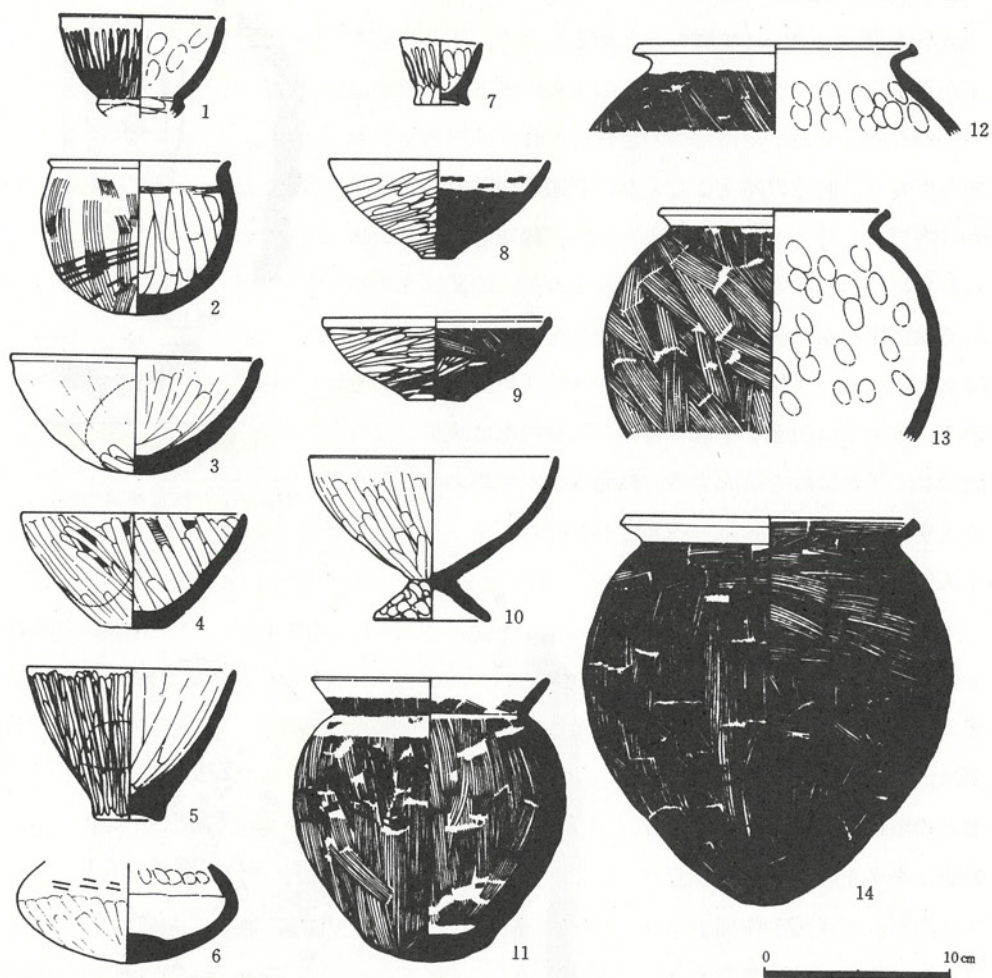


fig. 25 各遺構出土土器実測図

土坑 8 (SK 108)

4 C 8 グリッド, 1号住居跡北西隅を切って構築されている(fig. 26)。主軸を北東—南西にもち, 長軸 120 cm, 短軸 55 cm, 深さ 15 cm を測る。長方形の平面プランを有し, 2 段掘りの断面を示す。土坑内に幅 40 cm, 長さ 92 cm の木棺状の痕跡が検出された。土坑内埋積土は北東部をピットに切り込まれているが, 基本的には 2 層であり, 木棺状痕跡内・褐色粘質土, 土坑内・暗灰黄色粘質土となる。土坑内上部中央及び北西隅に鉢形土器がそれぞれ供献されていた。幼児墓と推定される。

土坑 8 出土の土器 (fig. 25)

鉢形土器(8・9)は平底をとどめるもので、体部の立ち上がりが深いものと浅い碗形状を示すものがある。胎土はいずれも同じであるが、地場の土とも吉野川南岸の土とも異っており、産地の同定はしえないが搬入の可能性がある。(8)は内彎して立ち上がる体部をもち、口縁端部は尖り気味におさめる。体部外面は入念なヘラミガキ、内面はタテハケで調整するが、下半に連続するハケをとどめる。口縁部はナデによりハケ目を消している。(9)は浅い体部をもつもので、(8)よりは大きな平底を有す。口縁端部はナデにより肥厚して僅かに段を形成する。外面はタタキののち底部まで入念にヘラミガキされ、内面もハケのち下半ヘラミガキである。

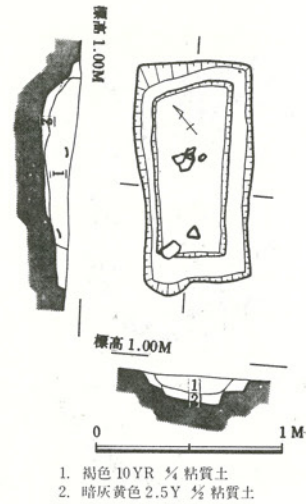


fig. 26 土坑 8 実測図

甕形土器(14)は土坑 8 を切るピットからの出土である。尖り気味の小さな平底をとどめ、口縁部は内彎気味に屈曲し、内面体部との境には鋭い稜を形成する。外面はタタキののち底部までハケ、内面は口縁部・体部上半ヨコハケ、下半タテハケである。内面へのハケ目調整は本遺跡では例外的である。

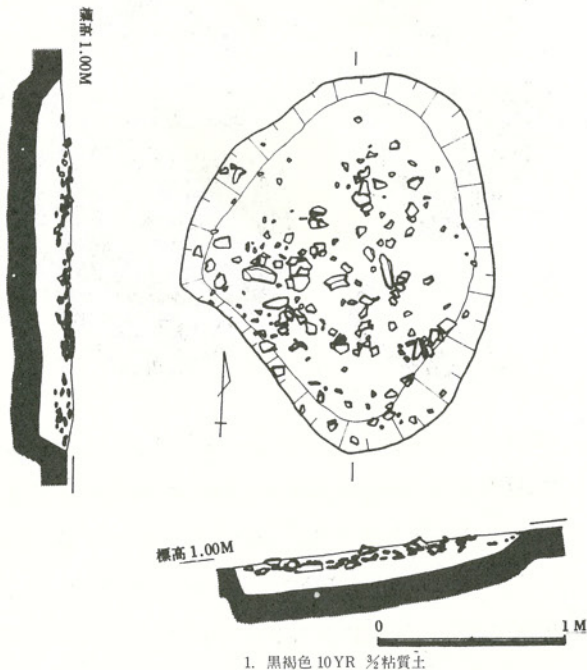


fig. 27 土坑 9 実測図

土坑 9 (SK 109)

4 B 8 グリッド、方形周溝墓の周溝に一部接する。主軸を南北にもち、長軸 200 cm、短軸 160 cm、深さ約 20 cm の不整円形を呈する土器溜まりである。黒褐色粘質土で充填されており、土器は掘り方上面に集中している。

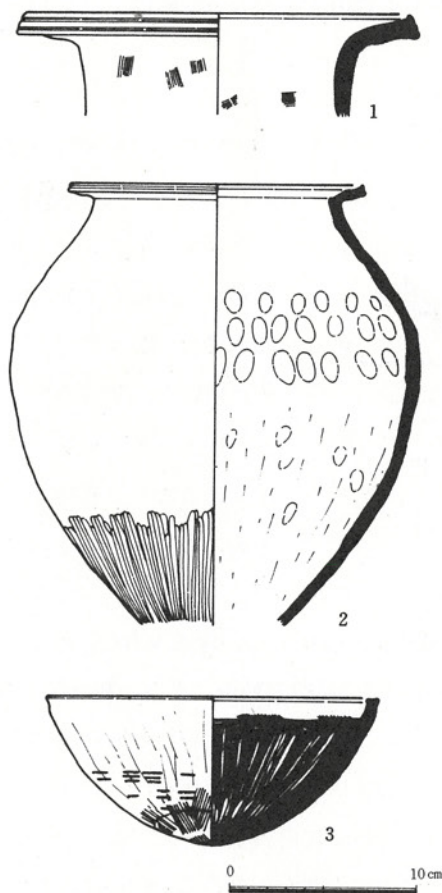


fig. 28 土坑9出土土器実測図

土坑9出土の土器 (fig. 28)

広口壺形土器(1)は直立する頸部と外反してやや外上方にのびる口縁部を有す。口縁端部は上方につまみ上げており、2条の凹線を施す。頸部内外面にハケ目をとどめる。

甕形土器(2)は口縁部は「く」の字状に外反し、体部は中位よりやや上で強く張る。讃岐系甕形土器で、丸底にちかい平底がつくものである。口縁端部に1条の擬凹線を施す。口縁部内面にはナデによる凹状の窪みを形成し、体部との境に鋭い稜を形成する。体部外面上半はナデ、下半ヘラミガキ。内面ユビオサエののち下半にヘラケズリを施す。

鉢形土器(3)は碗形状のもので、体部は内彎気味に立ち上がり、僅かに尖り気味の丸底を呈す。口縁端部は方形状におさめる。体部外面タタキのちハケ調整であるが、上半は板ナデ状の調整を示す。内面ヨコハケののち粗いヘラミガキである。

土坑10 (SK110)

4 B10グリッドに位置する (fig. 29)。検出時点では良好な土器溜まりであったが、盗掘にあい、落込み跡が僅かに把握できたにとどまる。長軸230cm、短軸100cm、深さ10cmを測る。

土坑10出土の土器 (fig. 25)

図化しえるものが1点遺存していたのみである。脚台付鉢形土器(10)は短い脚部に内彎して立ち上がるやや深い碗形状の体部をもつ。口縁部は尖り気味におさめる。脚部外面ユビオサエ、体部外面粗いヘラケズリであるが、器壁に亀裂を認める。内面はナデで調整している。類例として大阪府古池遺跡、徳島市矢野遺跡 (変電所内) 出土資料があり、矢野例

に胎土が酷似する。これも吉野川南岸鮎喰川流域の土器であろう。

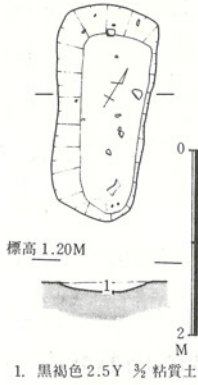


fig. 29
土坑10実測図

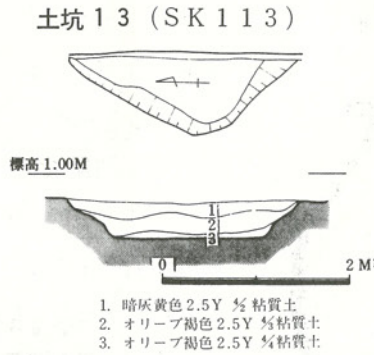


fig. 30 土坑13実測図

4 E 7 グリッドに一部検出された (fig. 30)。方形の平面プランを呈すようであり、深さ40cmを測る。土坑内埋積土は3層に分離され、1 暗灰黄色粘質土、2 オリーブ褐色粘質土、3 オリーブ褐色粘質土である。遺物は1層を中心に出土している。

土坑 13 出土の土器 (fig. 31)

広口壺形土器(1)は外方に立ち上がる頸部と緩やかに外反する口縁部を有し、球形の体部がつくものである。口縁端部は上方につまみ上げる。口縁部外面に2条の擬凹線を施す。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケで調整する。方形周溝墓出土資料と同器形である。

甕形土器(2・3)はいずれも口縁部が「く」の字状に外反し、端部をつまみ上げるものであるが、口縁下端部は丸みをおびる。外面ハケ、内面に指頭圧痕をとどめるが、(3)は体部中位よりやや上が張り出しており、細い右下がりのタタキをとどめる。内面下半はヘラケケズリである。吉野川南岸の胎土である。

高杯形土器(4)は杯部上半が外反するもので、筒状の脚部がつくもの。杯部上半面はハケのちヘラミガキ、内面ナナメハケ、杯部外面下半にハケ目をとどめる。

図示した以外に萩原墳墓群で認められた讃岐系の胎土をもつ大型の壺形土器と同じ胎土の壺形土器片が出土している。

土坑 21 (SK 121)

4 F 9・10グリッドに位置する。主軸を東西にもち、土坑8と同様に土坑墓と考えられる (fig. 32)。長軸136cm、短軸54cm、深さ約25cmの長方形の平面プランを有し、梯形断面を示す。オリーブ褐色粘質土で充填され、出土遺物は皆無である。

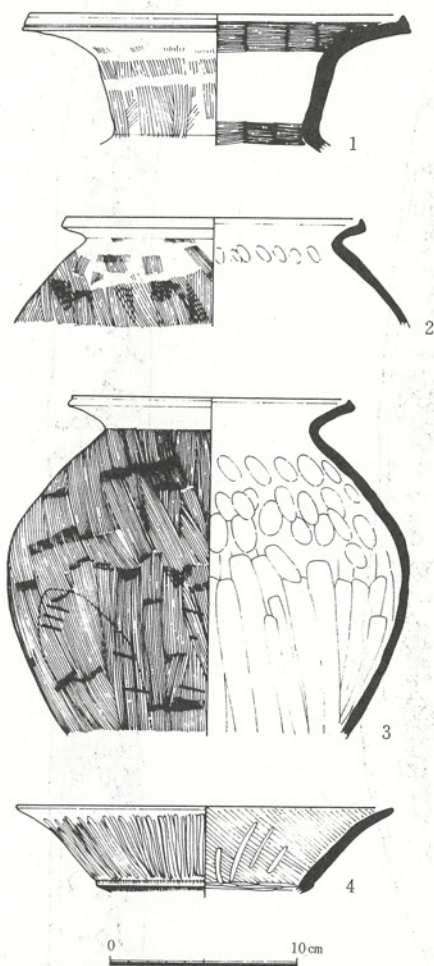
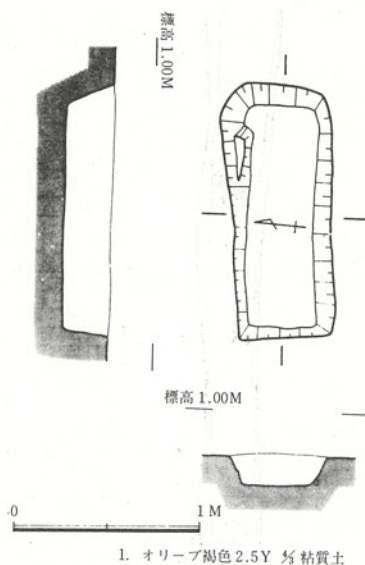


fig. 31 土坑13出土土器実測図



1. オリーブ褐色2.5Y 5/6 粘質土

fig. 32 土坑21実測図

溝1 (SD101)

調査区を4 J 10～4 A 7グリッドに横断して走る溝である。調査区中央以南では弧状を呈し、4 I 8～4 F 7グリッドにかけては直線状に伸び、4 A 6グリッドにかけて再び弧状にカーブしている。隅丸方形の平面プランを呈し、調査区内での延長距離約54mを測る。溝幅は調査区中央以南では約50cm、調査区北側の4 A・B 6グリッドでは50～60cmを測る。

溝内埋積土は地点によって多少の相違はあるが基本的には2層に分離が可能であり、1 灰オリーブ色粘質土、2 オリーブ黒色粘質土であるが、時間的な隔りは指摘できない。断面形状も地点による差異があり、4 J 10～4 F 7グリッドにかけては長方形断面を示し、4 A・B・C 6グリッドではV字形を呈す。溝底までの深度は概ね40cmであり、調査区中央部の微高地状の高まりを越えて南北の低地形に広がっている。流水痕跡はなく、今回の調査部分による限り、本溝以東に明瞭な同時期遺構の形成は認められない。全体の形状、規模は次年度以降の調査をまつとしても、現段階では本溝にある時期での環溝的な性格を

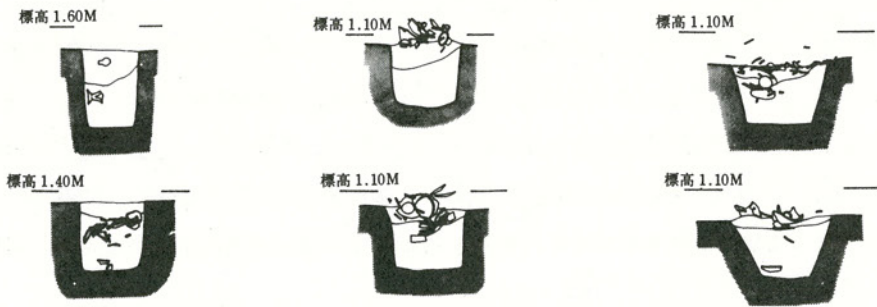
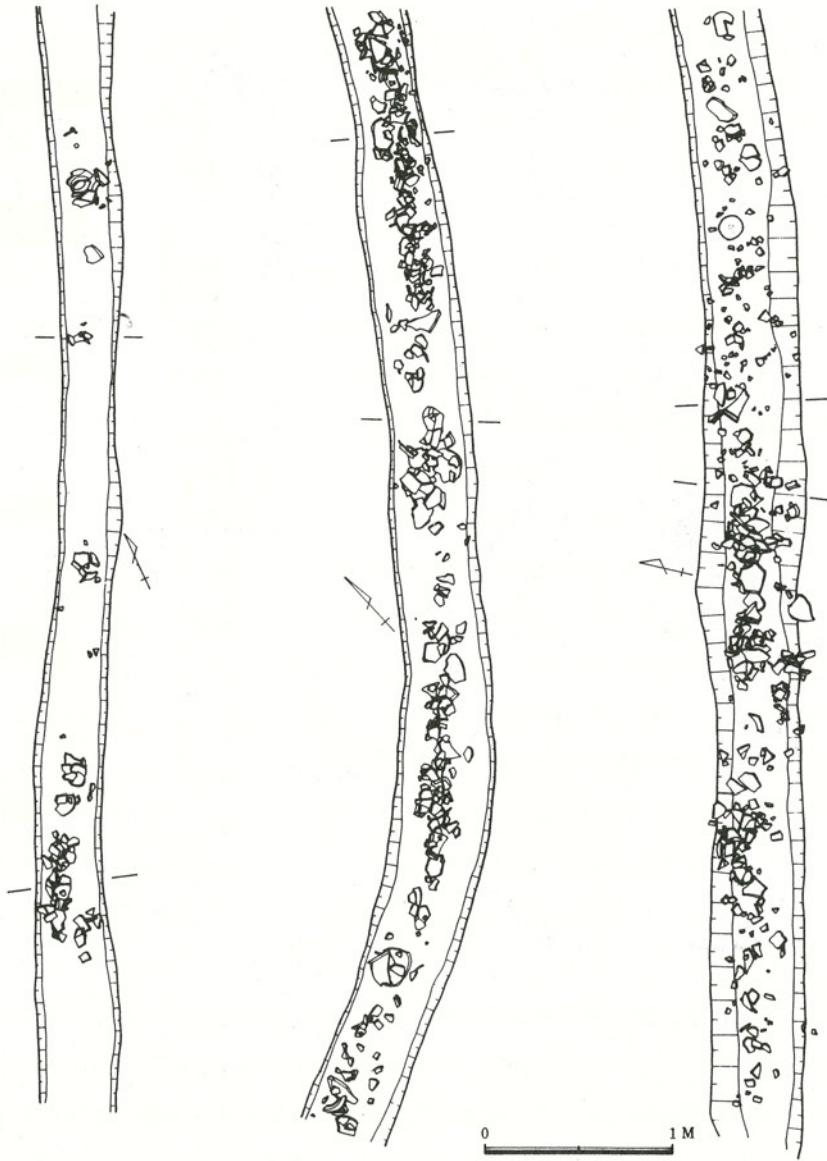


fig.33 溝1 (4 H 7 ~ 4 J 10 グリッド) 実測図

与えることに大過はないであろう。

本溝の最大の特徴は溝幅一杯に土器列を伴うことである。土器の出土状態は地点によって異なるが、全般に良好であり、一定の時期における溝機能の停止と共に一括投棄された様相を呈するものである。但し土器そのものの状態としては据え置かれたことを示すものが大部分であり、多分に祭祀の様相をとどめている。4H7～4J10グリッドでは全体に破片となった出土状態であったが、それぞれに接合関係をもち、溝上面に土器列が形成されている(fig. 33)。4G・H7グリッドでは黒谷川の掘削により溝は削平されているが、4H7・8グリッド部分では広口壺形土器、ミニチュアの長頸壺形土器などが認められた。4I8・9グリッド部分では高杯形土器、線刻をもつ広口壺形土器などが溝上層に置かれており、その下層には鉢形土器が集中する様相が指摘され、また完形にちかい甕形土器の集中が認められた。4J9・10グリッド部分には細頸壺形土器が比較的目立ったが、その他高杯形土器脚部、甕形土器片などが出土している。

4F7グリッド部分の土器列は今回の調査区では最も遺存状態の良好な在り方を示している(fig. 34)。この部分では南から鉢形土器が横に倒れた状態で出土し、それに続いて甕形土器2個体が据えられていた。一方は横倒しになっているが、もう一方は正位を保っている。これに続いて広口長頸壺形土器が溝壁一杯に置かれており、やや傾いた状態で出土した。さらにその北には横転した甕形土器が認められた。これらの土器はいずれも内部まで埋積土の充填はみられず、安置された直後にちかい状態を示している。

4A・B・C6グリッド部分の土器列は第2章で述べた追加調査段階で確認された個所であるが、土器の出土量と遺存状態では典型的な土器祭祀の様相を示すものといえよう(fig. 35)。図化した資料の約半分はこの地点からの出土である。4G6グリッド部分では南から小型の細頸壺形土器、高杯杯部などが認められた。4B6グリッドではこれに続いて鉢形土器、甕形土器、細頸壺形土器、甕形土器、無頸壺形土器、甕形土器、広口長頸壺形土器、甕形

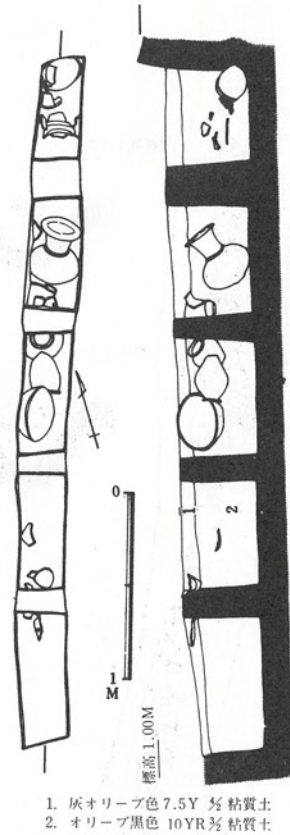


fig. 34 溝1
(4F7グリッド) 実測図

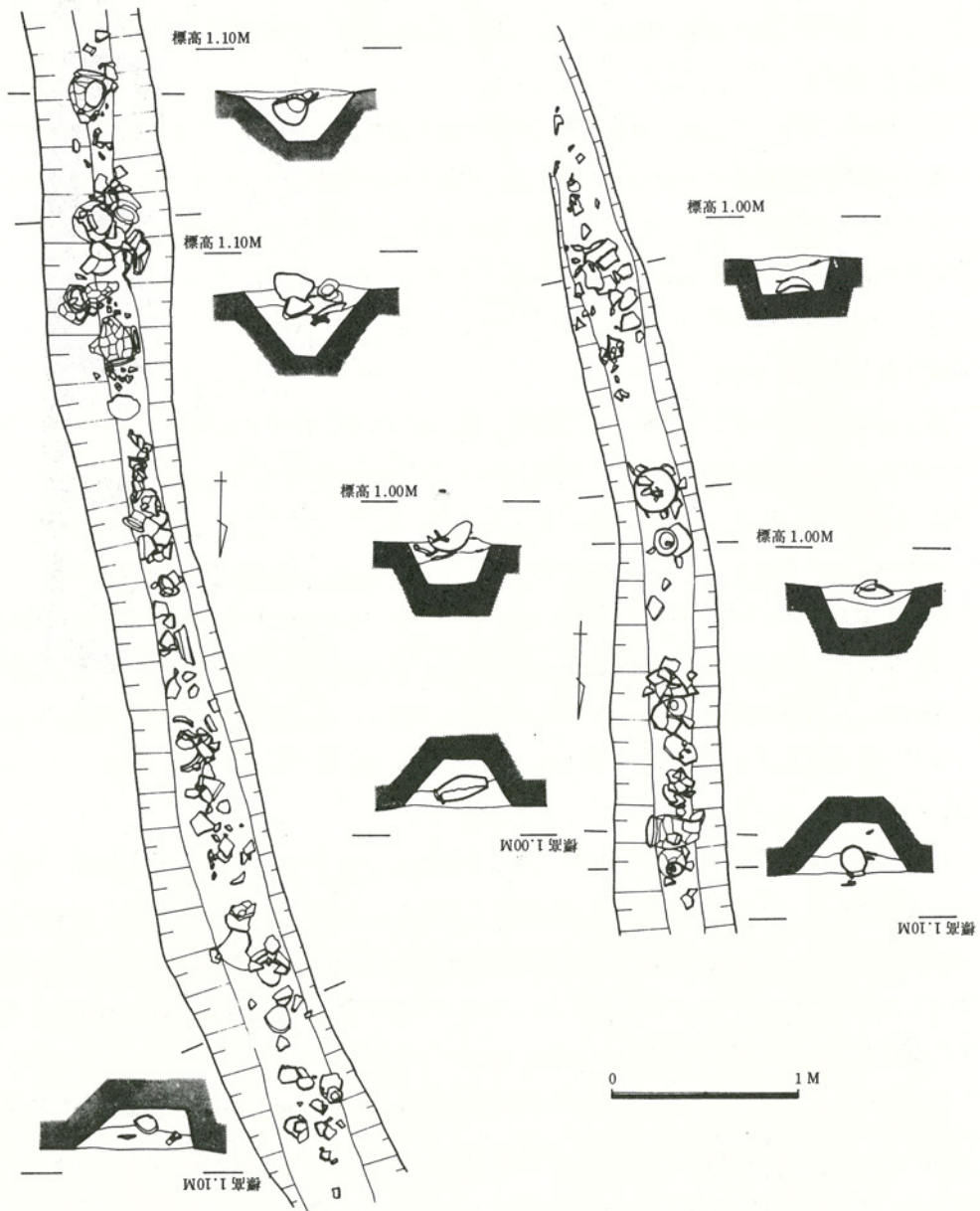


fig. 35 溝1 (4A・B・C6グリッド) 実測図

土器の集中があり、最も個体の多い地点である。この部分では甕形土器が様々なバリエーションをもつと共に、2個体の線刻広口長頸壺形土器が出土している。これらの完形土器群も内部に埋積土が充填しておらず、4F7グリッドと同じ在り方を示している。4A6グリッド部分では完形土器は認められないが、高杯形土器、甕形土器などが接合関係を持ち出土している。

以上の溝1に伴う土器群は地点により器種の配置構成に違いをみせ、また溝全体の中でも個々の群単位の抽出が可能なのである。それぞれの具体相は次年度以降の調査を通して、最終的には土器祭祀行為の全容が明らかにされると考えるが、本資料に一括遺物としての認定を与えることは確実であろう。

溝1出土の土器 (fig. 36~42)

溝1からの出土土器には壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高杯形土器などがあるが、今回の調査区では全体に甕形土器及び鉢形土器の占める比率が高い。

広口壺形土器(1~9・20)は頸部が直立あるいは外上方に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するものである。全体に体部中位に最大腹径をもつ。口縁部が方形断面を形成し、擬凹線を施すタイプ(2・3・4・7・8)と尖り気味あるいはやや角張る程度のもの(1・5)がある。(1)は直立する頸部に緩やかに外反する口縁部をもつもので、口縁端に竹管文を配する。口縁部外面下半は交互にヘラミガキを行うことによるみかけ上の鋸歯文状ミガキ、頸部外面はタテヘラミガキ、内面は頸部との境にヨコヘラケズリ、頸部ヨコハケをとどめる。球形にちかい体部がつくものと思われる。

(2・3・4・7・8)はやや外方に立ち上がる頸部と緩やかに外反する口縁部をもつ。小さな平底を有し、体部は球形にちかい(7)から扁平なもの(8)まで認められ、プロポーシオンからは(6・20)も同様の頸部をもつものであろう。口縁端部の調整はナデだけのもの(4)、1条の擬凹線を伴うもの(2・3・7)、竹管文を配するもの(8)がある。頸部外面はいずれも入念にヘラミガキされるが、ハケ目で調整する例(4)が認められる。内面は様々であり、ナデだけのもの(2)、ヘラケズリを施すもの(3)、ハケ調整するもの(4)、入念にヘラミガキするもの(8)がある。体部外面はヘラミガキを多用しているが、タテ方向のヘラミガキのほか、(20)のように中位にヨコ方向のヘラミガキを行う例、あるいは(8)のように体部全面をヘラミガキせず、中位に向って粗く放射状に施すものも認められる。体部内面はヘラケズリが顕著であるが、(20)はハケで調整されている。また(6)は上半ユビオサエ、(8)は頸部との境に

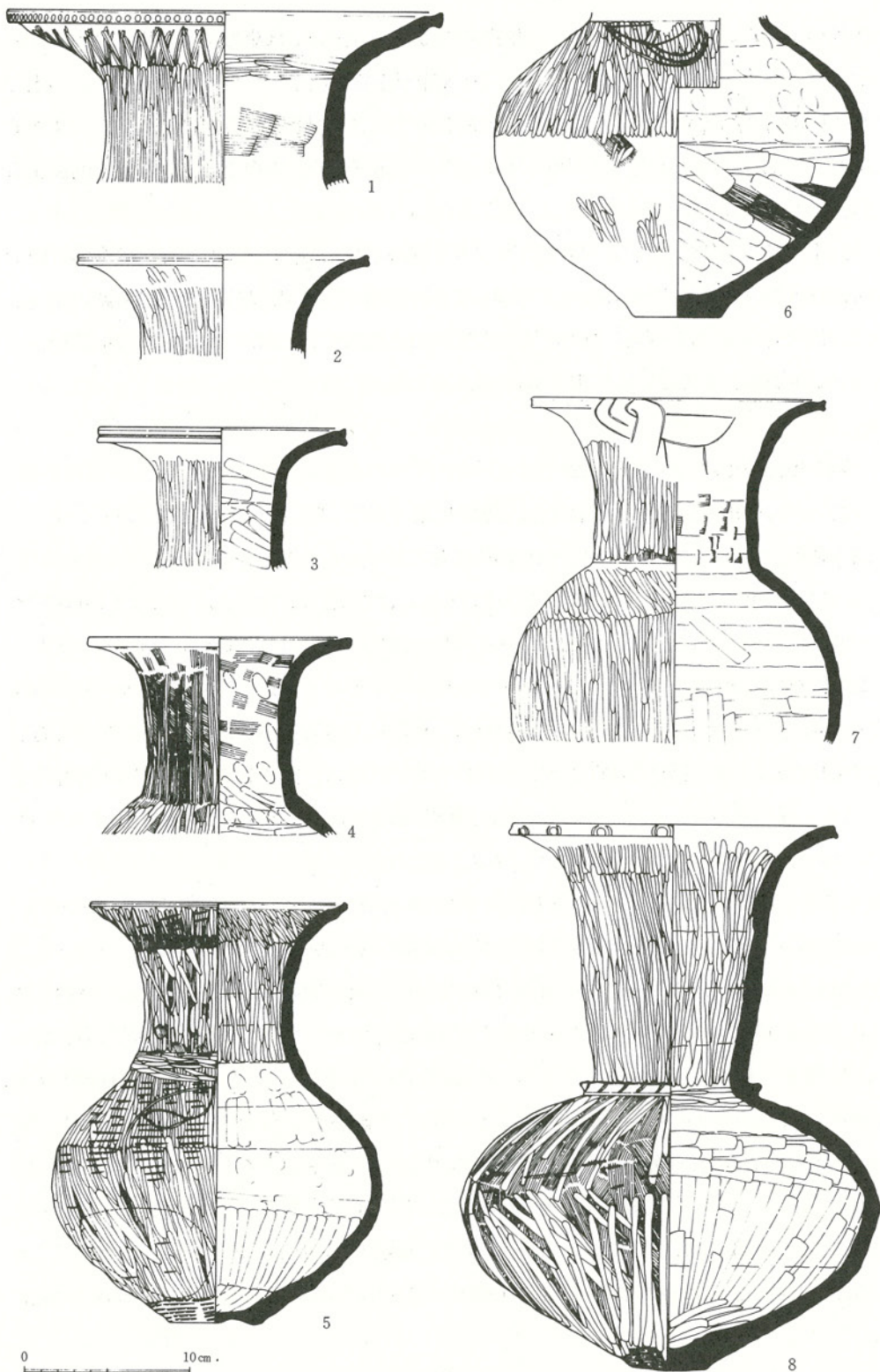


fig. 36 溝1出土土器実測図

ヨコヘラケズリをとどめる。(8)には頸部体部外面境に刻み目をもつ突帯を貼り付けているが、突帯をもつ壺形土器はこれのみである。

このうち(6・7)にはヘラによる絵画文が描かれており、(6)は体部外面上半頸部との境に、(7)は口縁部内面に施されている。また破片ではあるが(9)の壺形土器肩部と考えられる部分にも認められる。(6)は横6.5 cm、縦2.5 cmに1本の直線と4本の曲線から構成される図柄を表現しており、しっかりとしたタッチで描かれている。一部を欠損する。(7)は(6)に比べ線刻自体はやや弱い、向って左から3本の曲線が平行して描かれ、それに直交するかたちで2本の曲線がある。続いて右側に1本の直線とそれに繋がるように曲線が描かれており、直線が2本のびている。横8.5 cm、縦4 cmの範囲に施されており、組帯文と考えられる。類似した資料は他にもう1点小破片が出土している。

(9)は一部分のみであるため明確ではないが、1本の直線と2本の曲線がやはり明瞭に描かれており、上部にはこの3本の沈線が水平に描かれている。

(5)は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形をもつもので、体部中位に最大腹径を有す。口縁端部は僅かにつまみ上げられている。口縁部から体部まで右上がりのタタキのちハケ、そののち入念に細かいヘラミガキを施すが、頸部体部境にはヨコ方向のヘラミガキを施す。口縁部頸部内面は細かいヘラミガキであるが、体部はユビオサエののち下半全面及び上半の一部にヘラケズリを認める。本例にも体部上半に記号文が認められる。これは上記の3例に比べ原体工具がヘラ状のものではなく、藁状の繊維質のもので描かれており、線自体のタッチはやや弱い。縦・横5.5 cmの範囲に、向って左側は右上から左下にかけての緩やかな曲線が施され、右側には囊状の図柄の線刻から右上にのびる線が描かれる。本来は左下から右上にかけて描いた線をカーブさせて再び左下に描くべきところを上方に跳上げてしまい、その結果再度跳上げた部分から左下に描いたものと考えられる。記号文と考えられるが、他方蛇をモチーフとしているものとも思われ、頭の表現と共に舌をも具象表現しており、かなりその特徴を忠実に描いたものとも考える見方も捨て難い。

広口壺形土器(10・11)は短く立ち上がる頸部と外反する口縁部を有し、口縁端部が上下に拡張し、擬凹線をとどめる(10)と口縁端部に断面三角形の粘土紐を貼り付け、外下方に僅かに垂下させヘラ描き鋸歯文を施す(11)がある。(10)は頸部内外面、体部外面ヘラミガキ、口縁部内面ヨコハケ、体部内面ヘラケズリである。(11)は従来上野Ⅱ式として捉えられていた壺形土器に帰属させることのできる器形をもち、頸部内外面ハケ調整である。

(12)はミニチュアの長頸壺形土器で手づくねで造られているが、体部外面にはハケ目をと

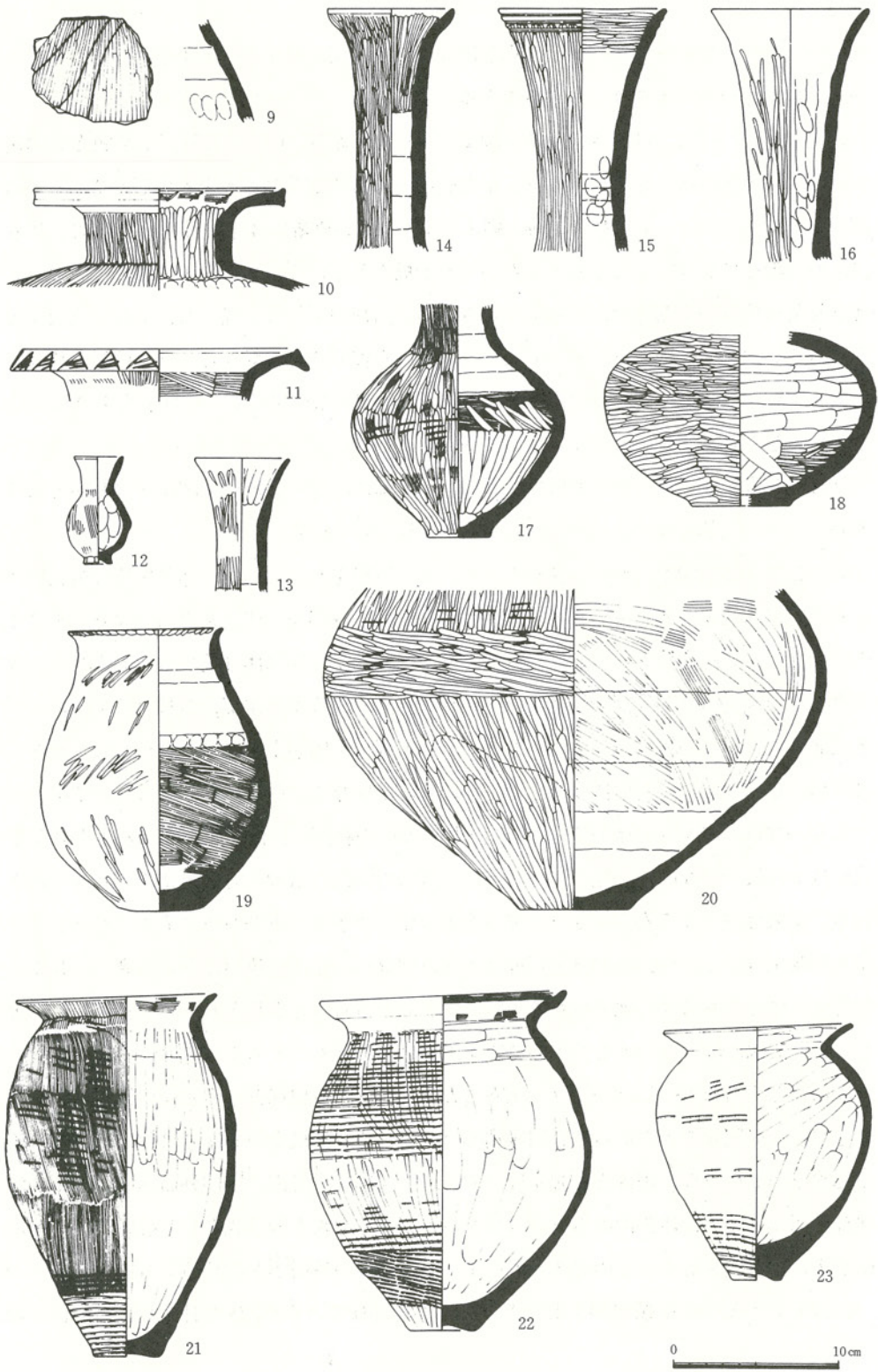


fig. 37 溝1出土土器実測図

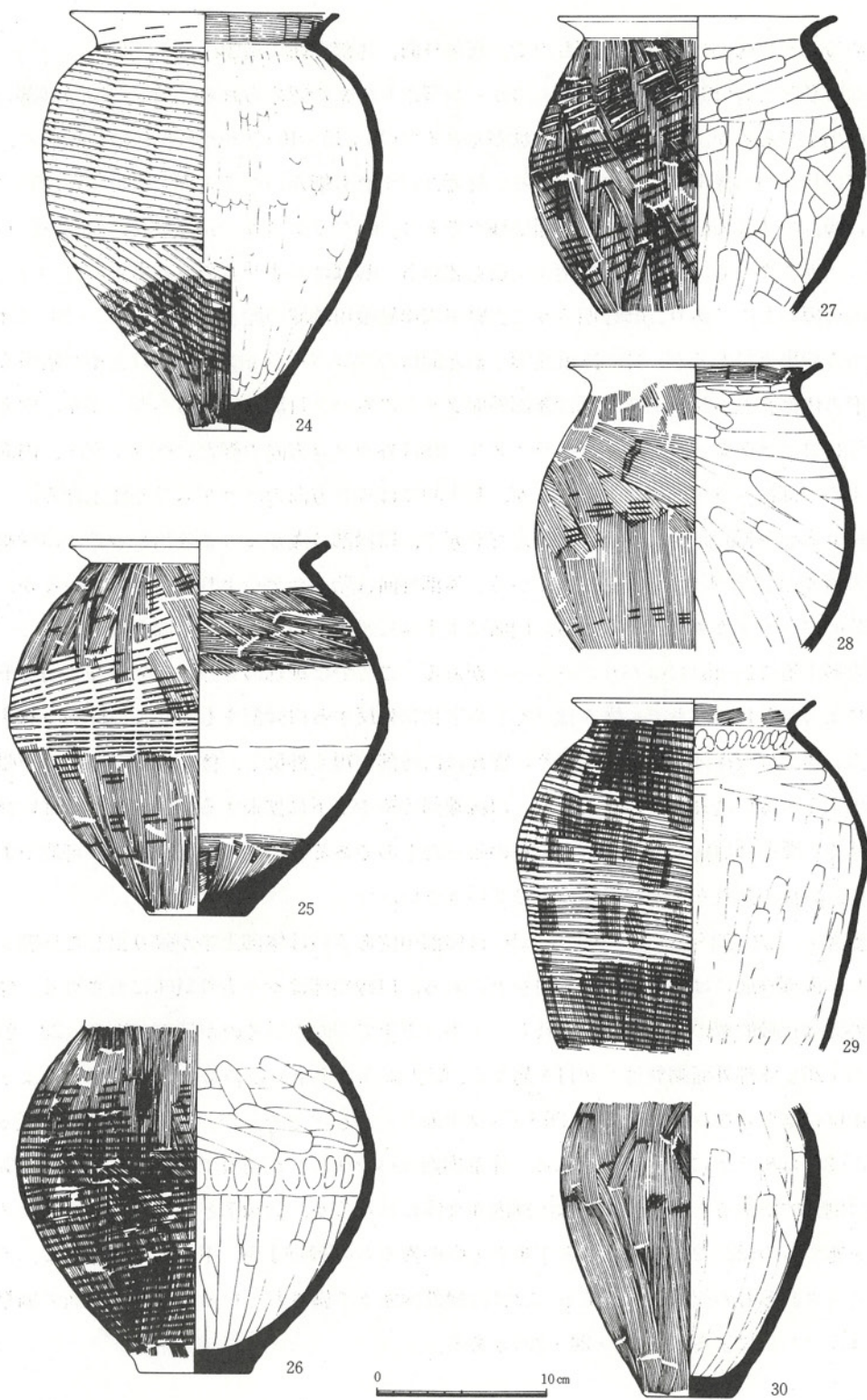


fig. 38 溝1出土土器実測図

どめる。やや底部の張り出したもので、底部外面、体部内面に指頭圧痕を認める。

細頸壺形土器(13~18)は小型のものから大型のものまで認められる。(13~16)は頸部のみの出土であるが、緩やかに外方に拡がるタイプ(13・15・16)とやや外反気味に拡がる、「受口状」の口縁をもつもの(14)がある。外面はいずれも細かいヘラミガキであるが、(15)には口縁部に3条の凹線を施す。内面は様々であり、(13)ヘラケズリ、(14)タテヘラミガキ、(15)ヨコヘラミガキで、頸部下半に指頭圧痕を認める。(16)はユビオサエのみである。(15・16)は同規模のものであり、(15)は明らかに吉野川南岸鮎喰川流域の胎土である。(17・18)は体部のみの出土であるが、広口長頸壺形土器と同様のプロポーションをもつ(17)とやや扁平な球形の体部をもつ(18)がある。(17)は体部外面タタキのちハケ目調整、のちヘラミガキ。内面中位にヨコハケをとどめ、下半ヘラケズリ。(18)は外面ヨコ方向の細かいヘラミガキ、内面下半の一部にヘラミガキをとどめるが、基本的にはヨコ方向のヘラケズリで仕上げる。

無頸壺形土器(19)は体部がやや膨らんだ形態で、口縁部は僅かにつまみ出される。口縁端部の調整はユビオサエで行われている。体部外面は殆どナデにより調整されているが、部分的にヘラミガキが認められる。内面は下半ユビオサエのちヨコ方向のハケである。

甕形土器(21~45)にはバリエーションがある。ここでは細部の分類はやめ、基本的な形態によって分類しておく。甕Aは「く」の字状に外反する口縁部をもち、長い体部を有すもの。体部最大径は口径をやや凌ぐ。甕Bは口縁部が短く外反し、体部中位より上半が張り出すかあるいは丸みをおびたもの。口縁端部はやや上下に拡張する。体部最大径は口径を凌ぐ。甕Cは口縁端部が拡張し、肩の張ったものである。これらは更に細分が可能であるが、以後の調査をまって再編成させていきたい。

甕A 1 (22・23・24・25・26・27・29)は体部中位あるいは体部上半が張り出した形態を示し、体部外面には明瞭にタタキ目をとどめる。口縁端部はやや尖り気味におさめる。体部外面は比較的幅の広いタタキを残し、上半と下半で方向が異なるのが通例である(22・24・25・26)。体部外面調整はハケ目を施すが、(24)のように下半のみのもの、(25・29)のように中位には至らないもの、また(26・27)は全面にハケをとどめるが、タタキは明瞭に残る。(22・23)は板ナデにより調整される。体部内面はヘラケズリが通有で、(25)のようなハケ調整は例外的である。ヘラケズリは体部内面全体にわたるが、口縁部との境にヨコヘラケズリを施すもの(22・27・29)上半と下半で方向の異なるもの(26)のほか、下半まで同方向にヘラケズリされるもの(23・24)がある。(23)は口縁部内面まで施されている。口縁部内面の調整はほかにハケによるもの(22・24・29)がある。

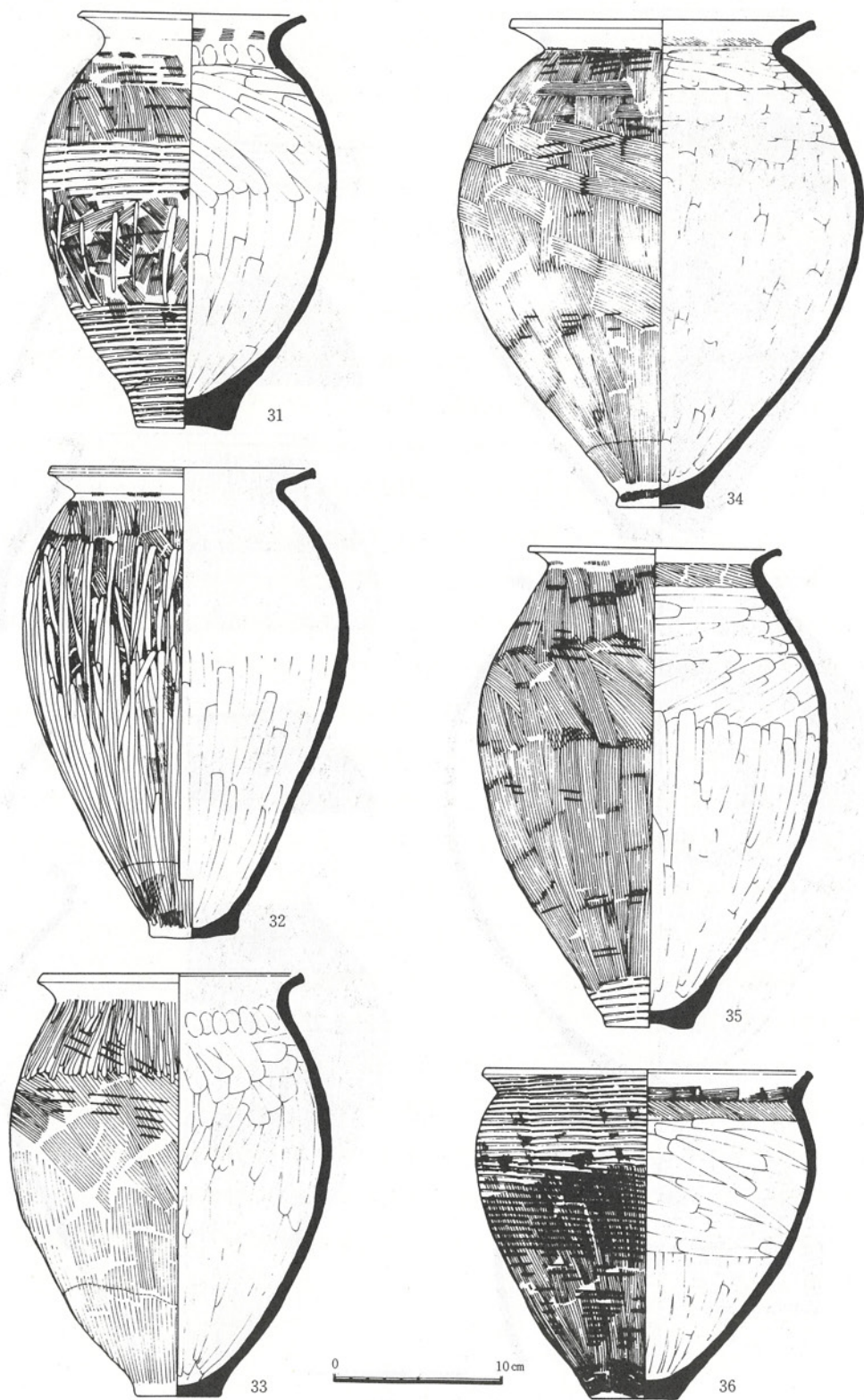


fig. 39 溝1出土土器実測図

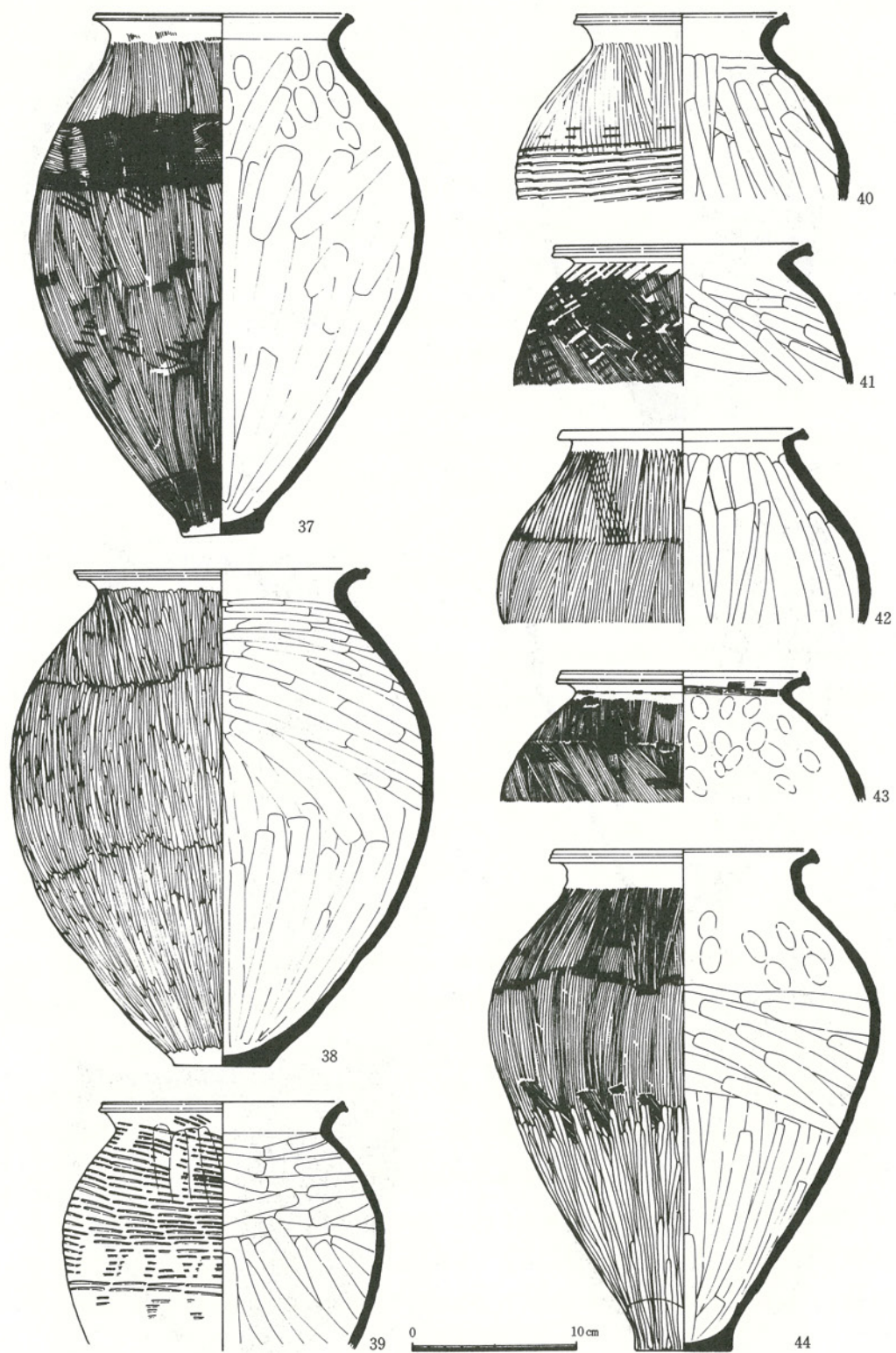


fig. 40 溝1出土土器実測図

甕A 2 (21・28・30・31・32・33・34・35・37・38)は口縁部が緩やかに外反し、長い体部をもつもの。体部は中位で弱く膨らみ、体部径を凌ぐ。口縁端部は全般にやや角張っておさめられる。体部外面は比較的幅の細いタタキをハケあるいはヘラミガキで消している。このうちハケで調整するものは(21・28・30・31・34・35・37)であり、(37)には上半にヨコハケをとどめる。(34)は上半と下半のハケ原体が異なるようである。(33・34)はハケとヘラミガキを併用するもので、(32)はハケ調整のち下半から中位にかけてヘラミガキ、(33)はハケのち上位に入念なヘラミガキを施す。(38)は体部外面全体をヘラミガキするもので、極めて入念になされている。口縁端部はいずれもナデで調整されているが、(32・37)は擬凹線状をなす。(21)にはハケ目をとどめる。内面はヘラケズリが通例で、上半と下半で方向の異なる例が多いが、(32)のように下半のみのもの、(31・33・37)のように指頭圧痕をとどめるものがある。(21・28・31・34・35)は口縁部にハケを残す。(34・37・38・44)には外面煤の付着、内面焦げ付き痕を認める。

甕A 3 (36)は口径が発達したもので、体部最大径とほぼ同じである。口縁部は弱く外反し、体部上半が膨らむ。口縁端内に1条の弱い沈線を形成する。体部外面のタタキは上半と下半で方向が異なるが、口縁部をタタキ出している。下半はハケ目調整。内面は口縁部及び体部上位にハケをとどめるが、その上に上半ヨコ、下半タテヘラケズリを施す。

甕B (39・40・41・43)は口縁部が上下に拡張し、丸みをおびた体部をもつ。口縁端部には1～2条の弱い擬凹線をとどめる。体部外面はいずれも比較的幅の細いタタキが施されており、そのうちハケで調整されるが、(39)は板ナデ、(40)もハケというよりは板ナデ状の調整をとどめている。体部内面はヘラケズリが通有であるが、(43)は口縁部にヨコハケ、体部上半に指頭圧痕を認める。

甕C (42・44・45)は短く外反する口縁部と肩の張った体部とからなる。口縁端部は上下に肥厚する。(44)には2条の弱い擬凹線をとどめている。体部外面の調整はいずれもハケのち下半にヘラミガキを行っており、内面は上半ユビオサエ、下半ヘラケズリである。(42・44)は同形態のものであるが、(42)は上半からヘラケズリされている。(45)は土坑9出土資料にみられた甕形土器の前段階の形態を示す讃岐系甕形土器と思われ、(42・44)は類似形態を呈すが、胎土は異なっており在地のものである。

鉢形土器(46～63)も小型から大型までバリエーションがある。基本的な形態によって三分類できる。鉢Aは内彎気味に体部が立ち上がるもので、小型から大型まで様々なタイプを含む。鉢Bは口縁部が外反するもので、中型から大型のもの。鉢Cは有孔鉢である。

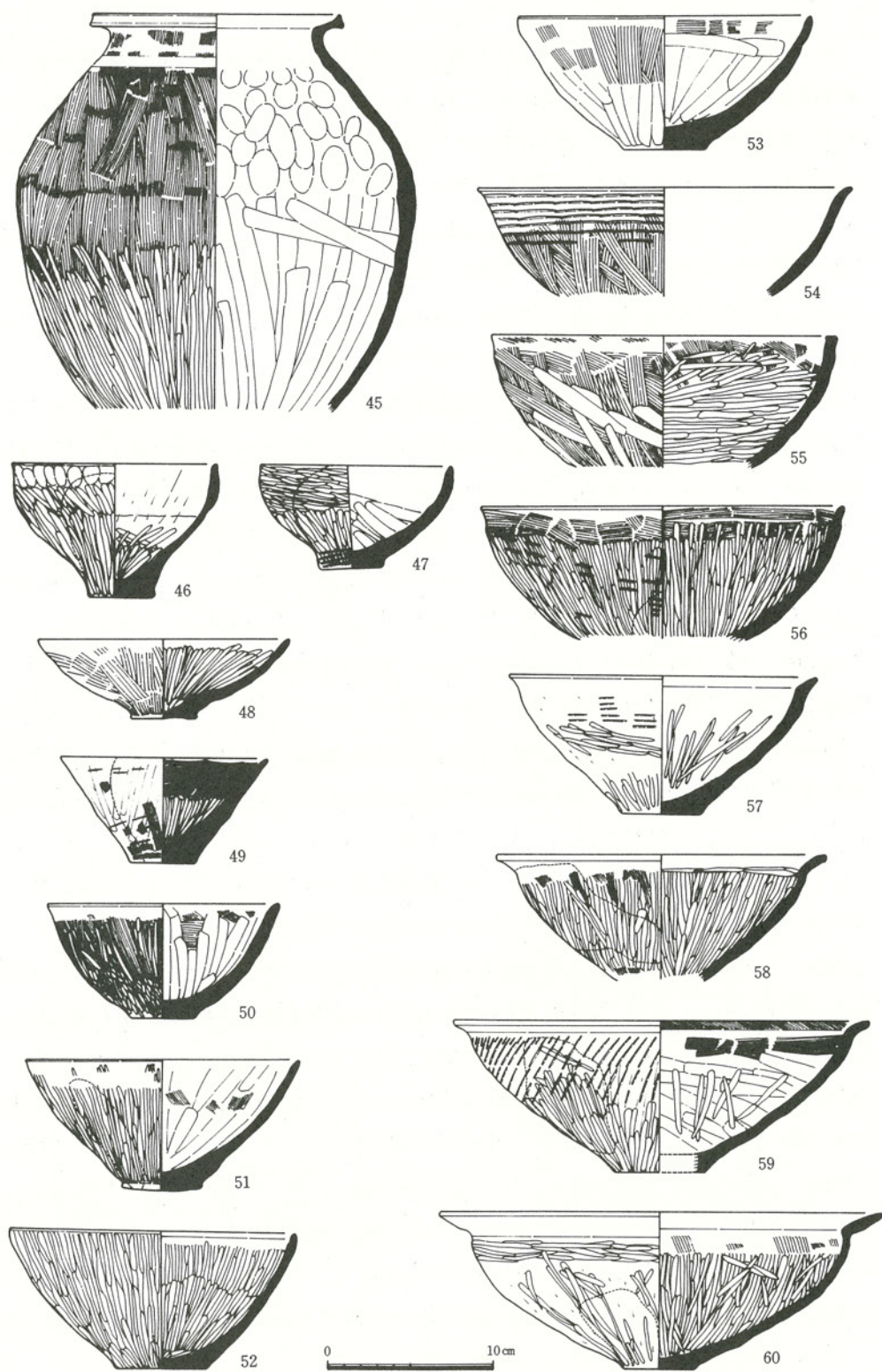


fig. 41 溝1出土土器実測図

鉢A1 (50~56)は内彎気味に立ち上がる体部をもち、14~22cmまでの小型から中型のものを含む。口縁端部は丸くおさまられているが、(55)のように平坦面を形成するものがある。体部外面は(54・55)にタタキをとどめるほかは、いずれも入念に調整される。ヘラミガキの行われるものは(50・51・52・56)であり、このうち(50・56)はハケ調整のちヘラミガキが施され、(50)の下半は細かなミガキで仕上げられている。(53・54・55)はハケ調整が認められ、(53)は下半にヘラケズリ、(55)は中位に幅の広いヘラミガキを施す。内面はヘラケズリによるもの(50・51・53)とヘラミガキによる例(52・55・56)がある。いずれもハケのち調整されている。

鉢A2 (46・47)は体部がやや半球形を呈す小型のものである。(46)は口縁部をユビオサエで成形し、体部外面ヘラミガキ、内面上半ヘラケズリ、下半ヘラミガキである。(47)は体部外面下半にタタキをとどめるが、上半ヨコヘラミガキ調整、内面ヘラケズリである。

鉢A3 (49)は体部が直線状に外方に拡がるもの。体部外面は細いタタキのち、ヘラケズリを行い、その上に部分的にハケ目をとどめる。内面はヨコハケのち下半ヘラミガキである。

鉢A4 (48)は体部が緩やかに外上方に拡がる浅い皿形状をなす。底部が僅かに突出する。体部外面ハケ、内面ヘラミガキである。

鉢A5 (61)は鉢A1の大型のもので片口をもつ。口縁端部はやや角張っておさめる。体部外面は粗いハケのち下半に粗いヘラミガキ、内面は上部ヨコ、下半はタテヘラケズリである。

鉢B1 (57)は口縁部の外反が弱いもので、体部外面はタタキのちヘラケズリを施し、そのち部分的にヘラミガキを行う。内面も部分的なミガキである。

鉢B2 (58・59・60)は若干の形態差があり、(60)は体部が内彎して立ち上がり、口縁部が強く外反するものである。体部外面はいずれもヘラミガキを施すが、(58)はハケ、(59)は右上がりのタタキを認める。(60)はヘラケズリのち上半ヨコ、下半タテヘラミガキである。内面はヘラミガキであるが、(59)はヨコハケとヘラケズリを併用し、そのち部分的にヘラミガキを施している。

鉢B3 (62)は大型の深鉢形状をなす。口縁部は緩やかに外反し、端部は角張って形成される。体部外面はタタキのち上位はナデによる擦消し、中位下半は短いハケであり、下半のみにヘラミガキを行う。内面はヨコハケのち入念なヘラミガキである。

鉢C (63)はほぼ直線状にのびる体部を有す。底部には外側から3孔を施している。体部外

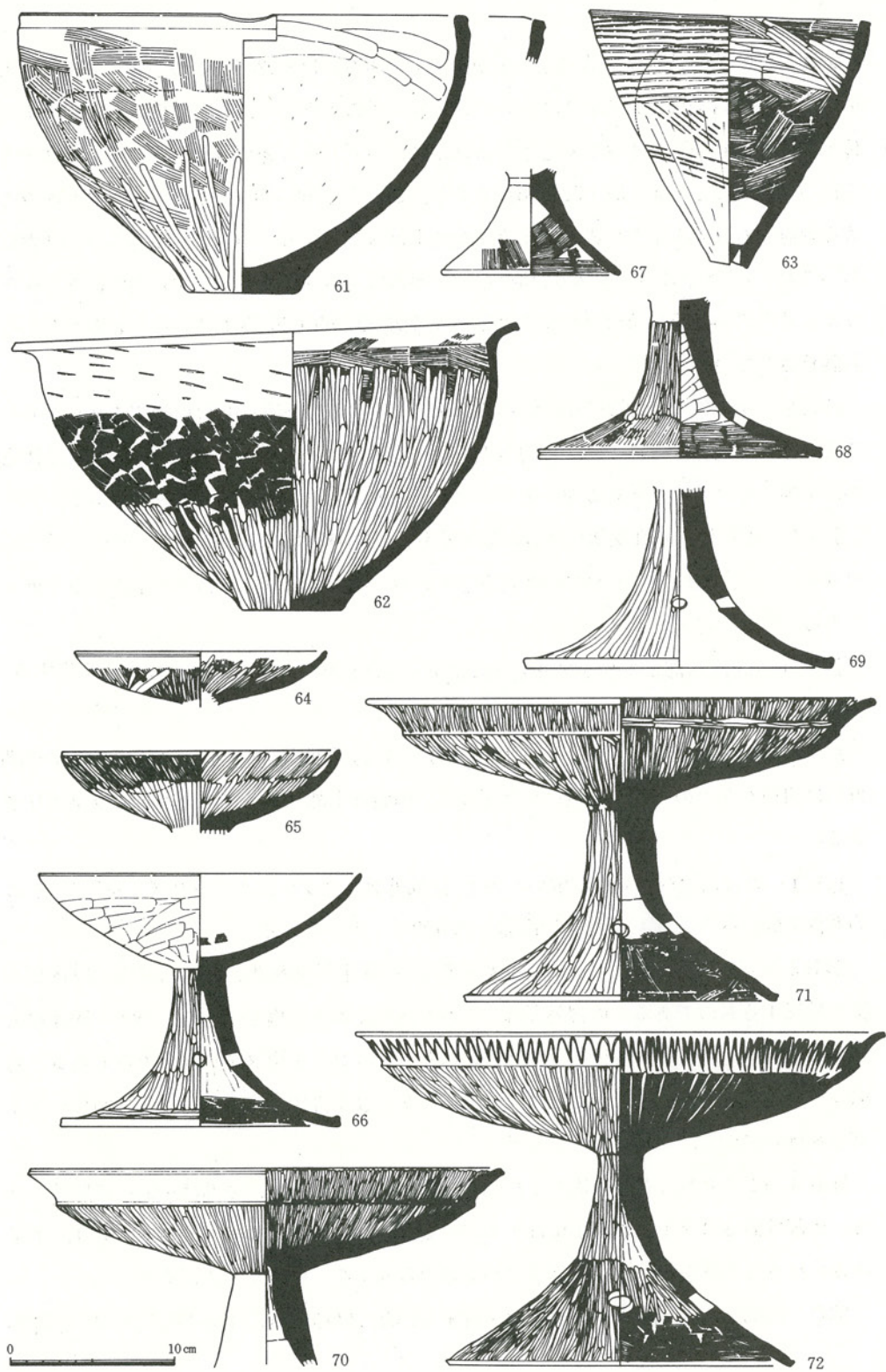


fig. 42 溝1出土土器実測図

面のタタキは上半と下半で方向が異なり、下半は板ナデ状あるいはナデによって入念に擦消されている。内面はヨコハケであるが、上位に幅の狭いヘラケズリを施している。

高杯形土器(64~72)は杯部の形状によって二形態に分類される。高杯A(64・65・66)は杯部が楕形状を呈すもので、浅い例(64)からやや深い例(66)がある。杯部外面はヘラミガキによるもの(64・65)とヘラズリを施すもの(66)が認められる。内面は(64・65)にヘラミガキが施されており、(64)には口縁外端面に1条の弱い沈線をとどめる。(66)の脚部は挿入付加法で行われており、4孔を施す。脚端部は方形状を呈し、脚柱部タテヘラミガキ、脚部下半ヨコヘラミガキ、内面下半細かいヨコハケである。

高杯B(70・71・72)は杯部上面が屈曲して外反するタイプで、大型のものである。いずれも脚部挿入付加法で接合されており、ヘラミガキが顕著である。口縁端部は丸みをおびた方形断面を呈し、脚端部はやや先細の方形状をなす。(71・72)共4孔を施す。器壁の調整はいずれも幅の細いミガキであるが、(71)には杯部内面屈曲部にヨコ方向のヘラミガキをとどめる。(72)は杯部内外面上半の暗文風のヘラミガキに特徴をもち、内面下半は細かいヨコハケののち中央部に向って放射線状のヘラミガキを施している。脚部内面は(71)ヨコハケののちタテハケ、(72)は細い脚柱部を有し、ヨコハケののち上部にヘラミガキを行う。

脚部(67・68・69)はいずれも挿入付加法の痕跡を示し、(68)は3孔、(69)は4孔を施す。(67)は脚柱の発達しないもので、内外面ハケ。小型の器台とも推定される。(68)は脚柱外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、脚部内外面ハケ調整である。端部に1条の弱い擬凹線をとどめる。(69)は外面ヘラミガキで仕上げる。

溝2 (SD102)

調査区北半4A8~4F10グリッドに貫流する溝で、溝幅約60cm、深さ34cmを測り、V字形の断面をもつ。遺物は僅かにミニチュアの鉢形土器が1点出土したのみであり年代を確定しえないが、各遺構に切られており、本調査区では最も古い時期のものと考えられる。溝内埋積土は1 オリーブ褐色粘質土、2 暗褐色粘質土である。溝底レベルは4C9グリッド部分が最も低く、南北溝底レベルとは約16cmの比高差がある。あるいは2・5号住居跡部分から西に分流する溝が走ることも想定される。今後の調査の結果をまちたい。

溝2出土の土器 (fig.25)

ミニチュアの鉢形土器(7)は底径3cm、器高3.5cmの手づくねである。底部及び体部内面

をユビオサエ、体部外面に僅かにヘラミガキを施している。1点のみで年代を確定しえないが、いずれにせよ後期の段階におさまるものである。

溝3 (SD103)

4C9グリッドで溝2に合流する小溝であり、一時期には溝2と共に機能していたものと考えられるが、とぎれているため性格は今ひとつ明らかにし難い(fig. 43)。ただ溝の北端に長軸155cm、短軸70cm、深さ約13cmの楕円形の落込みを伴っており、落込みから約20cmの落差をもつ溝3を通じて溝2に合流しているため、落込みに水を流して何らかのものを水簸する機能を有していたことも全く考えられない訳ではない。溝幅30cm、深さ36cm

を測り、梯形断面を呈する。溝内埋積土は4層に分離され、1 褐色粘質土、2 にぶい黄褐色粘質土、3 黒色炭化物層、4 黒褐色粘質土となる。このうち第2層には魚骨片などの自然物を含み、第3層には甕形土器を主として、多少の土器を出土している。

溝3出土の土器 (fig. 44)

広口壺形土器(1)は頸部が垂直に立ち上がり、口縁部が水平に外反する。肩はさほど張らず、球形の体部をもつものと考えられる。口縁端部に1条の擬凹線を施す。頸部外面ハケ、体部外面ハケのち粗いヘラミガキ、頸部内面上半ヨコヘラケズリ、下半及び体部ヨコハケである。

鉢形土器(2・3)は丸底の碗形状を呈するもの(2)と球形の体部をもち、口縁部が外反するもの(3)とが認められる。(2)は体部外面タタキのちナデ、内面ヘラケズリである。(3)は体部外面タタキのちハケ、体部内面下半ヘラケズリを施す。

甕形土器(4)は球形の体部に小さく突出した平底をもつ小型の甕で、口縁部は折り曲げて僅かに上方につまみ上げている。体部外面は比較的幅の広いタタキののち下半は入念にタテヘラミガキ、上半はヨコヘラミガキを行っている。口縁部体部境に細かいハケ目をとどめている。体部内面はヨコハケであるが、上位にヘラケズリを施す。精製されており、

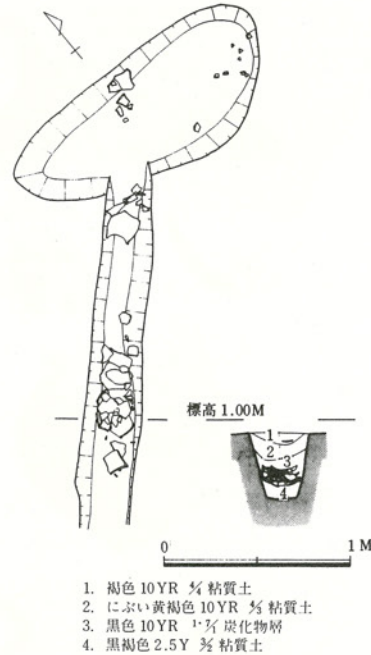


fig. 43 溝3実測図

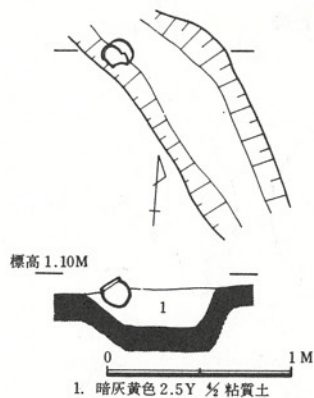
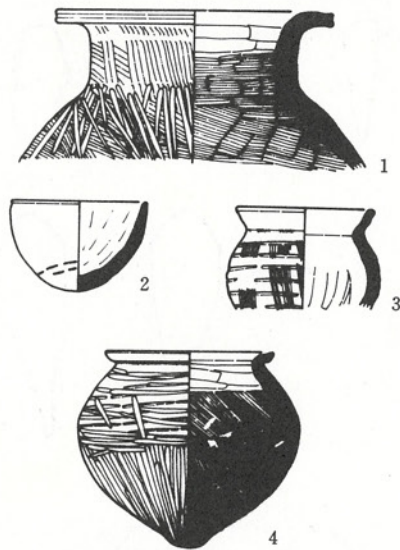


fig. 45 溝 8 実測図

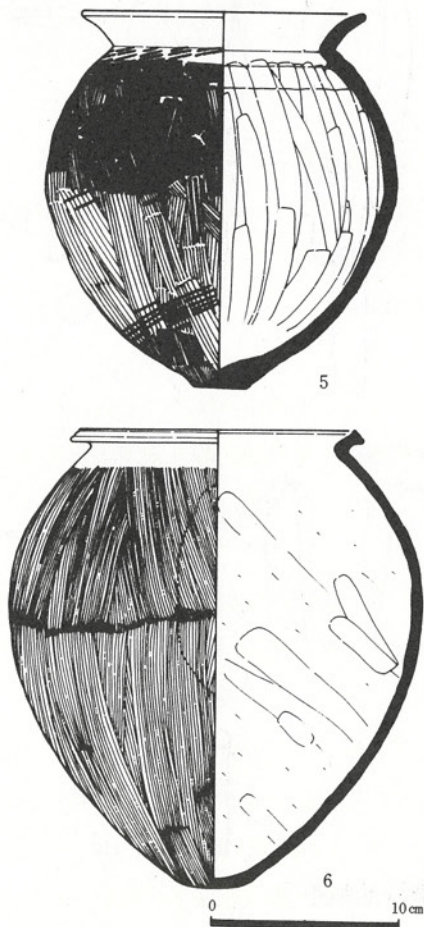


fig. 44 溝 3 出土土器実測図

2号住居跡出土の鉢形土器(fig. 11-4)、土
 坑 8 出土の鉢形土器(fig. 25-8・9)と同
 じ胎土を有している。

甕形土器(5)は小さな平底をもち、比較的
 大きな口縁部が強く外反する器形である。
 体部最大径は中位にあるが、あまり張らな
 いものである。口縁部は丸くおさめられて
 いる。体部外面は右上がりのタタキのち
 ハケを施すが、上半と下半で原体を異なら
 せる。内面は体部上半からタテヘラケズリ
 である。

甕形土器(6)は口縁部が短く外反し、端部
 を上下に拡張するもので、2条の擬凹線を
 施す。丸底にちかい平底をとどめるが、底
 部と体部の境は明瞭である。体部最大径は
 中位よりやや上にある。体部外面は細かい
 ハケ調整で、外底面まで行われている。内
 面はヘラケズリ。吉野川南岸鮎喰川流域の
 胎土である。

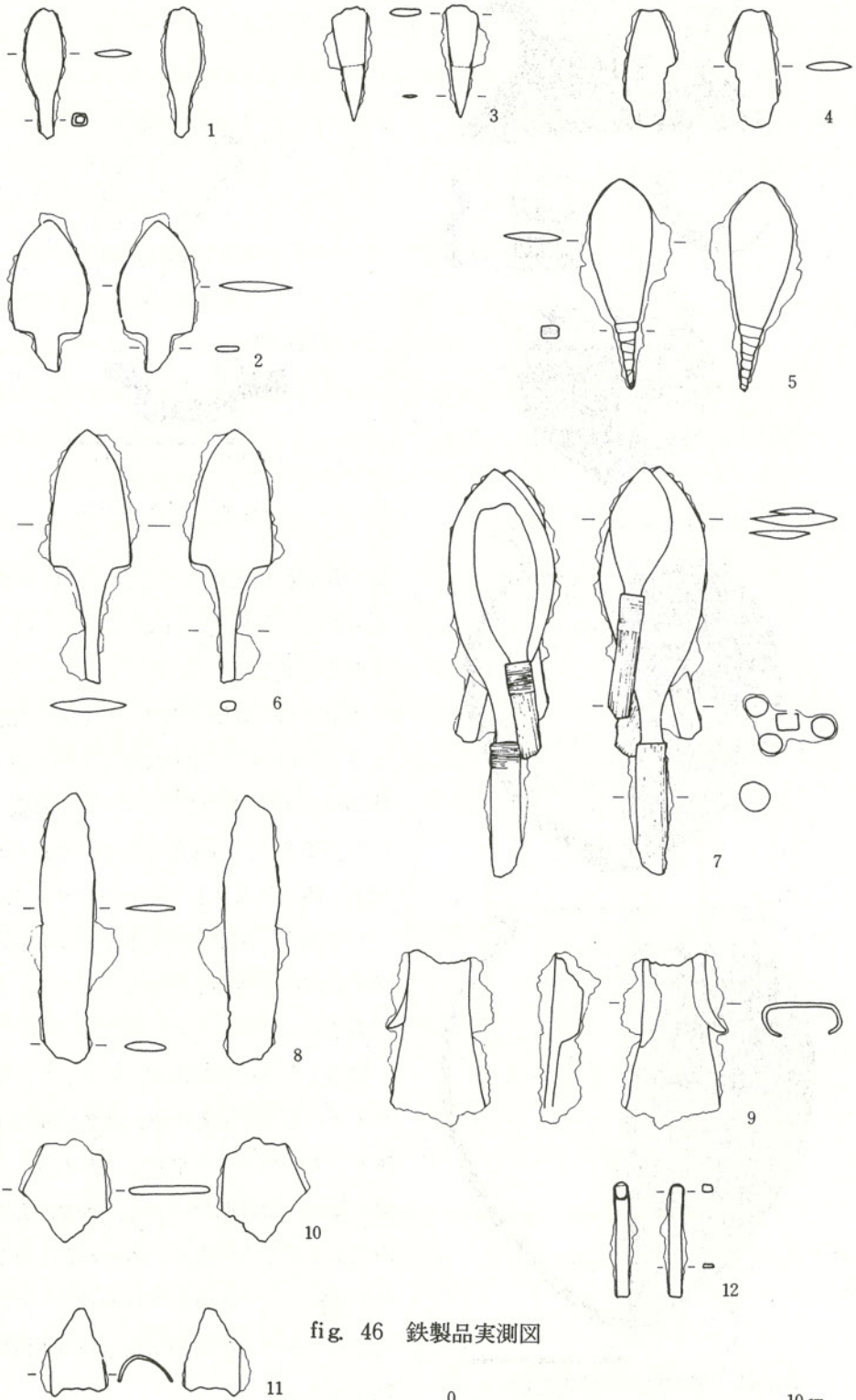


fig. 46 鉄製品実測図



溝 8 (SD108)

4A・B8グリッドに位置し、方形周溝墓の周溝に切られているが、僅かに一部が遺存しているにすぎない(fig. 45)。溝幅約50cm、深さ20cmで、上面より小型の甕形土器を1点出土している。

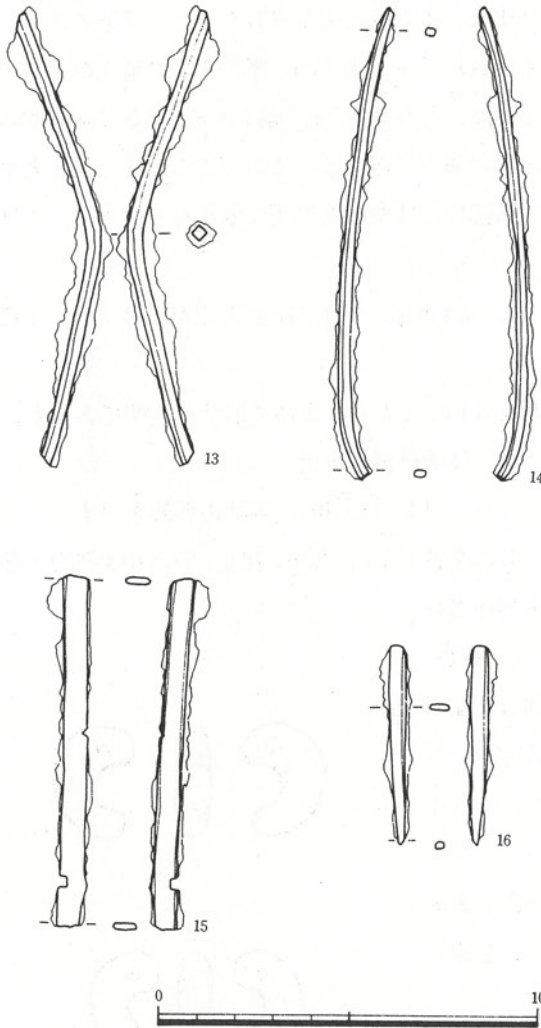


fig. 47 鉄製品実測図

溝 8 出土の土器 (fig. 25)

甕形土器(1)は口縁部が外上方に立ち上がり、やや体部の張った平底のものであるが、底部はしっかりとした平底を形成していない。体部外面は右下がりの細かいタタキののちハケを施しており、口縁部に及ぶ。内面もハケ調整であるが、下半はヘラケズリののちハケを施している。同様の形態は兵庫県長越遺跡1号住居跡出土資料に認められるが、長越例ほどは底部がしっかりしていない。

その他の遺物

鉄製品 (fig. 46・47)

遺物包含層資料を含め比較的多く出土している。主要なものを揚げておく。鉄鏃(1～7)は柳葉式(1・3・5・7)と有茎三角形式(2・6)に分けられる。(1)は先端が欠損し、残存長3.8cm、最大幅1.1cm、厚さ2mm、茎径5mmを測る。6号住居跡出

土。(2)は茎を欠損する。残存長4.4cm、最大幅2.2cm、厚さ3mmで、関幅1.8cmを測る。2号住居跡床出土。(3)は上部が欠損し、茎が遺存する。残存長3.2cm、4E8グリッド出土。(4)は上部、下部を欠損する。残存長3.4cm、幅1.5cmで、4E8グリッド出土。(5)は全長6.1cm、幅1.8cm、厚さ3mm、茎幅1.4cm、茎径4mmを測る。形態的には圭頭斧箭形式に属させたほうがよいかもしれない。茎部分に木質をとどめる。4E10グリッド出土。(6)は茎の一部を欠損する。残存長7.3cmで、関部が最も拡がり、幅2.4cm、厚さ4mm、茎径3mmを測る。4H8グリッド出土。(7)は4本の鉄鏃が重なっており、束ねられたような状態である。いずれも同じ形式に属す。向って左面から全長11.7cm、幅3cm、厚さ4mmの最大のものがあり、その上に重なる鉄鏃は先端を欠損するが、残存長7.3cm、幅1.3cm、厚さ3mmを測る。右面では全長7.3cm、幅1.7cm、厚さ2mmの鉄鏃が位置する。この下にもう1点挟まれているが、錆化のため不明である。いずれも茎部分には桜の樹皮状の木質をとどめる。4H8グリッド出土。

(8)は刀子。茎を欠損する。残存長7.8cm、幅1.6cm、厚さ2mmであるが、鋒は薄く不明瞭である。2号住居跡覆土上面出土。

(9)は袋状鉄斧と考えられる。刃部先端を欠損しており、全体の形状は不明であるが、残存長5.1cm、残存刃幅2.7cmをとどめる。2号住居跡覆土出土。

(10・11)は断片のために明らかにしえない。(12~14・16)は錐状の形態を呈す。いずれも断面形状がやや扁平な方形をなす。(12)は全長3.2cm、土坑6出土。(13)は中央部分が曲がっており両端を欠く。残存長12.1cm、方形周溝墓1号墓壇域出土。(14)も(13)と同形態であり、全長12.7cmを測る。方形周溝墓周溝内出土。(16)は下端が尖っており、残存長5.5cmを測る。4J9グリッド出土。このうち(12)は上端を斜めに裁断したような形状を呈している。

(15)は扁平な長方形断面をもつ棒状の鉄器であるが、本来の規模・形状については明らかにし難い。残存長8.4cmを測る。4J7グリッド出土。

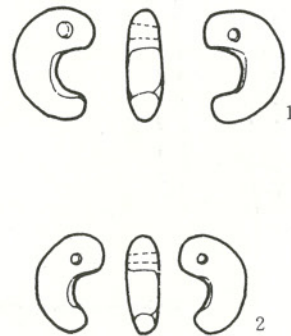


fig. 48 勾玉実測図 (実大)

勾玉 (fig. 48)

(1)は4F9グリッド、(2)は3号住居跡覆土から

の出土である。いずれもC字状の形態を示し、一方向から穿孔されている。暗青色の斑文をもち、全体に淡い緑灰色を呈す。凝灰岩製である。

石製品 (fig. 49)

石錘、砥石、ハンマーストーンがあり、ほかに石庖丁などが出土している。図示したものはいずれも砂岩製である。

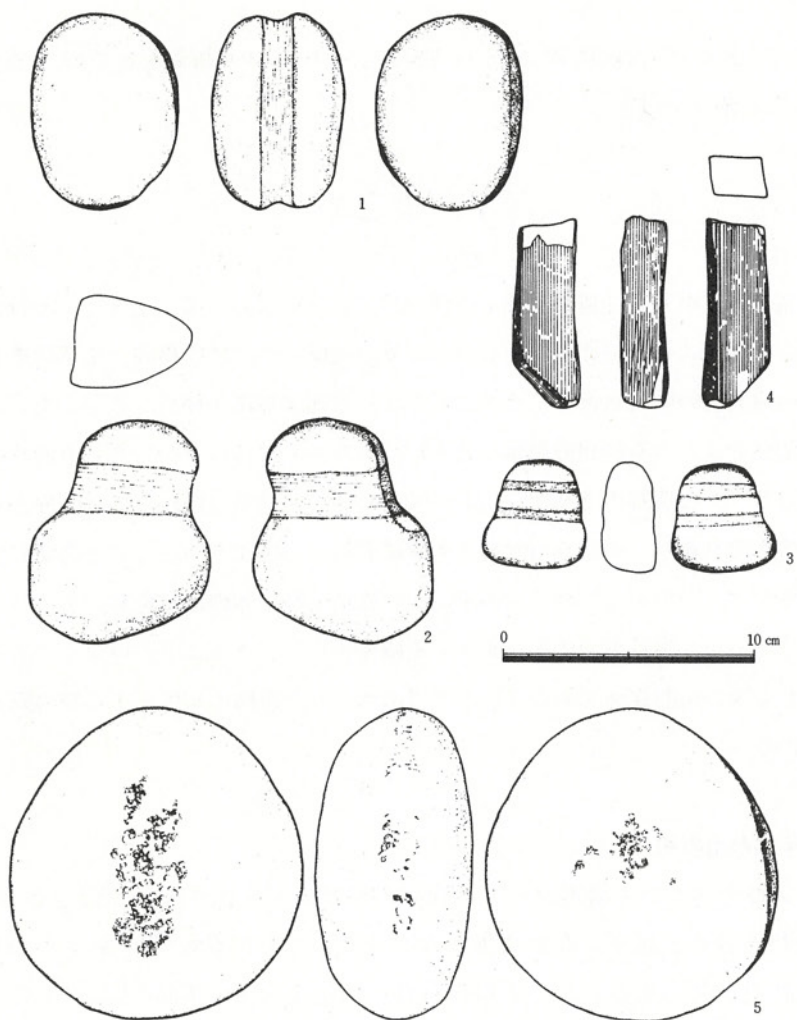


fig. 49 石製品実測図

石錘(1・2・3)は有溝石錘と自然石を利用したと思われるものがある。有溝石錘(1)は長さ8cm、幅約6cmの大型のもので、8mmの溝を形成している。自然石を利用したと考えられる石錘(2・3)はいずれも分銅型を呈し、縄掛け部分を磨いて窪ませたような形状を示す。(2)には幅の広い1条、(3)には幅の狭い2条の溝が認められる。これが人為的なものかあるいは縄掛けによる摩耗の結果であるのかは今ひとつ明らかにし難い。(1・2)は5号住居跡覆土中、(3)は4C9グリッドからの出土である。

砥石(4)は一部を欠損するが棒状を呈し、4面に研磨痕をとどめる。3号住居跡覆土中出土。

ハンマーストーン(5)は直径12.4cm、厚さ5.2cmを測る。中央部両面及び縁辺部に敲打痕をとどめる。溝1出土。

V まとめ

今回の調査では竪穴式住居跡、堀立柱建物跡、方形周溝墓、溝、土坑などが検出されたが、調査面積の割には遺構の密度が高い。個々の遺構についての構成、集落構造については次年度以降調査の継続もあり、その結果をまっけて逐次整理・検討していきたいが、今回の調査の所見では、本遺跡が徳島県で最大規模を有す遺跡のひとつになる可能性は大きいように考える。また遺跡の立地が海拔80~90cmと極端に低く、住居跡では床面のレベルが30cm前後のものもあり、当時の海水準を考慮に入れても居住空間としては適切ではない。低位であることについては、地質学の方面から徳島平野全体の地盤変動による沈下という示唆も得ているが、現時点ではそれを支える積極的なデータに乏しいようである。これについても今後の検討課題であろう。ここでは得られた遺構の年代と土器相の概要を述べるにとどめたい。

遺構の年代と土器相

今回の調査で得られた資料は弥生時代後期後半から庄内式併行に限定され、遺物包含層資料を含め、確実に布留式併行の段階にまで下がる資料は今ひとつ明らかではない。徳島県での当該時期の資料は吉野川南岸下流域(徳島市周辺)を中心として、1970年の名西郡石井町清成遺跡の調査以降僅かずつながら増加してきてはいるが¹⁷⁾、個別的な点としての内容を除いてはいまだ系統的、あるいはその全体が整理・公表されたものは

皆無といってよい。従って現実問題として他地域に比べ、地域内での土器の具体相、系譜、あるいは比較検討作業に支障をきたしており、いきおい他地域との比較というプロセスを踏まなければならないのが実状である。ここでは今回の調査結果を基に各時期毎の土器相を概観しておくが、これは以後の調査によって当然補強、修正の余地を残しており、溝資料以外には一括性に欠けるが、今後の調査に向けての土器相の実態把握のための基準設定とすると共に徳島県下での当該時期資料の編年構築への叩き台とされるべく、暫定的に提示しておきたい。将来的には当然解消されるべき設定形式である。以後、従来の未発表資料を含め、積極的な討議がなされることを期待してやまない。

黒谷川Ⅰ式

後期後半の時期である。溝Ⅰ出土資料を充てる。本資料は多くの器種を伴い、以後の調査によって更に具体相の追及が可能である。

広口長頸壺形土器はいずれもヘラミガキが顕著であり、内面にヘラケズリを行う共通性をもつ。球形の体部をもつものと算盤玉形のやや扁平な体部をもつものが認められた。球形の体部をもつ fig. 36-8 は形態的には兵庫県田能遺跡 1 A 調査区大溝出土資料にも類似⁽¹⁸⁾するが、体部のプロポーション、あるいは内面の技法に相違がある。fig. 36-5 は口縁部に若干の形態差はあるが、大阪府馬場川遺跡井戸出土Ⅰ類資料に類似⁽⁹⁾する。また球形の体部をもつ fig. 36-3・4・7 は口縁部に微妙な形態変化を示しつつも、全体の器形は馬場川遺跡井戸Ⅰ類資料に酷似しており、調整に相通ずるものがある。fig. 36-6 は頸部を欠くが、形態的には大阪府鬼塚遺跡 H O 3・4 地区出土の無頸壺にも類似⁽²¹⁾する。この段階では徳島県でも絵画文の採用が指摘され、fig. 36-7 の組帯文と推定される文様の存在は注意してよい。

広口壺形土器 fig. 36-10 は萩原墳墓群墳丘外周出土資料の前段階のものといえ、頸部がさほど発達しないものである。fig. 7-11 は垂下する口縁部をもち、鋸歯文を配するもので、中部瀬戸内系の広口壺の系譜に属させうる器形と思われるが、これ 1 点のみである。

細頸壺形土器は口縁部が外反しており、萩原墳墓群で長頸壺として捉えた器形よりは前出のものである。畿内の第 V 様式の細分を行った寺沢編年では様相 4 に出現するようである。徳島県ではこれ以前の細頸壺形土器の資料は不明である。fig. 37-18 は頸部を欠損⁽²²⁾するが、奈良県大福遺跡溝 2 などに類形態が指摘される。

甕形土器にはバリエーションがあり、基本的な器形でも三形態がある。全体的にタタキ目をハケで消す手法が認められ、かつて指摘したようにタタキ目をそのまま残す吉野川上流域の土器群とはやり様相を若干異にするようである²³。タタキは右下がり、あるいは水平方向のものが多いが、25個体のうち5個体に「口縁部叩き出し手法」が識別しえた。器壁外面の調整にはそのほか、タタキ+ハケ+ヘラミガキ、ハケ+ヘラミガキ、ヘラミガキが若干認められる。内面調整は鳴門市光勝院寺内遺跡²⁴でみられた第Ⅳ様式以来のヘラケズリを発展させており、体部上位から行われ、fig. 38-25のようなハケ調整は例外的である。本例は例えば馬場川遺跡井戸Ⅰ類資料中に近似するものである。全体に倒卵形の体部を呈すものが多いが、fig. 41-45のように庄内式段階で散見される讃岐系甕形土器の前段階のプロポーシオンに近いタイプも混在している。

鉢形土器にもバリエーションがある。特に鉢Bはこれまで徳島県では不明であった器形であり、このうちfig. 41-60のタイプは口縁部が大きく外反しており、例えば大阪府上六万寺遺跡第3トレンチ²⁵、62は大福遺跡溝2出土資料にも類似する。これよりは形態的にやや古い様相を示すとも思われる58・59は口縁端部に相違をもちながらも、田能遺跡第6Y調査区第2溝に類例が指摘できる。いずれもヘラミガキが顕著である。

高杯形土器はA・B二形態があり、高杯Aは寺沢編年V-3・4段階には出現しているようである。高杯Bはいずれも脚部挿入付加法を採用しており、口縁部の外反するもの自体は、古くは大阪府巨摩廢寺下層出土資料²⁶、鬼塚遺跡HO3・4地区、また同亀井遺跡SD3067²⁷、同若江北遺跡SK618²⁸、馬場川遺跡などに器形的に通ずるものがあり、瀬戸内地方では例えば岡山県百間川原尾島遺跡²⁹、同雄町遺跡³⁴などにも散見するが、本例ほど浅いなだらかな皿状を呈してはおらず、比較的類似したプロポーシオンをもつタイプとしては、田能遺跡第6Y調査区第2溝資料が指摘されよう。

以上の要点から本段階の年代に上六万寺式、田能遺跡第6Y調査区第2溝、馬場川遺跡井戸Ⅰ類併行にわたる年代観、あるいは百間川後期Ⅱ併行の年代観を与えておきたい。本段階の遺構としてはほかに土坑1があり、やや新しい様相を示すと考えられるものに3号住居跡出土資料を想定する。

黒谷川Ⅱ式

庄内式を二分した場合の前半にあたるが、より第Ⅴ様式からの過渡期的な様相を示すものと考えられる。本段階を設定する基準のひとつは、小型丸底鉢(埴)の出現にある。

良好な一括資料に欠け、具体相は今後の調査の資料の蓄積をまたなければならないが、住居跡1・2、溝3・8、土坑8を想定しておきたい。

広口壺形土器には垂下する口縁部に凹線を伴い、円形浮文を加飾するもの(fig.9-1)、凹線をもち上下に拡張するもの(fig.11-2)があり、二重口縁の亜形態ともいうべき器形を示すものが認められる。また1号住居跡からは、萩原墳墓群墳頂部出土の長頸壺と同タイプの壺形土器が確認される。

甕形土器は全体的に口縁端部が上方につまみ上げられてはならず、平底を保つ。庄内甕の古い段階のプロポーションにちかいタイプ(fig.44-5)、あるいは吉野川南岸に通有な倒卵形の体部をもつタイプ(fig.44-6)などが認められる。体部内面はヘラケズリが通例で、ハケ目調整はやはり例外的である。溝8出土の甕形土器は底部に形態変化があるが、兵庫県長越遺跡1号住居跡出土資料に類例がある。

鉢形土器にはバリエーションがあり、第V様式以来の鉢A・Bに加えて、口縁部が外反する丸底タイプのもの(fig.11-7・8)、尖り気味の平底で口縁部が内傾するもの(fig.11-4)が認められる。7は奈良県纏向遺跡鉢D2、8は鉢D1に対応する。

小型丸底鉢は「弥生式土器集成」で香川県原遺跡例が提示されてより⁽³¹⁾、阿讃地域を中心に分布がみられ、纏向遺跡、長越遺跡、大阪府美園遺跡などに散見する。本タイプはこの時期には確実に出現している。後時期のものに若干の形態変化があるようであるが、出土量の比較的多いことや徳島県では本遺跡以外に、清成遺跡、名東遺跡、矢野遺跡、樋口遺跡などに類例があり、脚台のつくものに萩原墳墓群出土資料が認められることから、徳島県に特徴的な器種の一つと考えておきたい。本タイプは纏向遺跡で小型丸底壺の祖形と考えられた鉢Dと確実に共伴している。

高杯形土器は口縁部が屈曲して外反するタイプであり、凶化していないが例えば馬場川遺跡井戸Ⅱ類資料にみられる二重口縁壺と同形態の杯部をもつ加飾されたタイプのものが1号住居跡から出土している。

土坑10もこの時期のものであろう。

黒谷川Ⅲ式

庄内式新相に対応するが、徳島県では庄内甕の搬入はこれまで認められていない。4・5号住居跡、土坑9、13資料のほか、供献土器という性格の違いはあるが、個々の資料が日常の器種構成を示しているため、方形周溝墓資料もこれに充てる。

広口壺形土器は前段階に比べ、口縁部の外反が強くなり水平に近づく(fig.15-1・2)。これとは別に外方に立ち上がる頸部をもち、口縁端部を上方に強くつまみ上げるタイプが加わる(fig.22-1・31-1)。これは瀬戸内系の例えば上東式にみられる長頸壺と類縁関係をもち、その延長上に位置するものと思われる。徳島県では足代東原遺跡、徳島市鮎喰遺跡⁽³⁴⁾1号住居跡にも類例があり、広範な分布を示すものと考えられる。

二重口縁壺形土器は球形の体部に外反する口縁部をもつもので、吉野川南岸の矢野遺跡など鮎喰川流域の遺跡に特徴的にみられる、口縁部が内傾する二重口縁壺の後続時期のものであろう。また fig.22-2 のタイプの広口壺形土器は、兵庫県川島遺跡⁽³⁵⁾で明らかにされた壺Bの系統に属すものと思われる。時期的な差はあるが突帯のあるものとして山口県吹越遺跡⁽³⁶⁾、類似したプロポーションをもつものとして萩原墳墓群、香川県布勢遺跡⁽³⁷⁾に出土例がある。瀬戸内系の壺形土器であろう。この段階ではまた fig.15-3 のような球形の体部をもつ纏向遺跡壺Bに対応するタイプも認められる。

甕形土器は平底を保つものもあるが、倒卵形の体部からより球形にちかい体部に変化し、丸底に近づくものがやや顕著になる。口縁端部も大きくつまみ上げるタイプが増加しており、この時期には川島遺跡、長越遺跡、纏向遺跡などに庄内式段階に散見される讃岐系甕が搬入されている。

鉢形土器は第V様式以来の鉢Aも僅かに残るが、丸底のタイプが主流を占め、椀状と浅い皿状のタイプがみられる。小型丸底鉢は前時期のタイプに比べ、体部の屈曲が弱まり大きくなると共に、口縁部の外反が進み、器高の低いものへと、形態的には小型丸底壺⁽³⁸⁾に近似するかたちとなる。ただし徳島県での小型丸底壺の定着は布留Ⅱ式以降のようであり、本器種はこの時期以降消滅するのがあるいは形態変化を示し発展するのかわからない。相互の関係については小型丸底壺出現の系譜、あるいは祖形を含め再検討しうる課題といえるのではないかと考える。

高杯形土器は直線状に杯部が外反するタイプのものである。

土坑6出土資料の甕形土器はさらに体部が球形に発達したもので、布留式のタイプにちかい形状を示しており、今後の調査によっては新たな段階の設定が可能である。

みてきた各段階の遺構を切り合い関係を含め、継続時期の新旧を整理しておくと、Ⅰ式土坑1⇒溝1⇒3号住居跡、Ⅱ式 1・2号住居跡・溝8⇒土坑8・溝3、Ⅲ式 4・5号住居跡⇒方形周溝墓・土坑9・13⇒土坑6の基本的な前後関係が想定される。以上各段階について述べてきたが、Ⅰ式とⅡ式にはまだ断絶がある。以後の調査でこの空白を埋め

うる資料が得られることを期待するが、現時点ではこの間を埋める資料として徳島市矢野遺跡（変電所）溝一括資料³⁹が指摘される。本資料は岡山県黒宮大塚古墳にみられた器台形土器を伴っており、鬼川市Ⅲ式に併行する年代観が考えられているようである。また本資料内には萩原墳墓群墳頂部で出土した脚台付小型丸底鉢と同形態のものを共伴しており、小型丸底鉢の徳島県での初現、あるいは萩原墳墓群のより厳密な年代を検討する際にも注意されるべき資料といえよう。

土器の胎土

今回の調査で得られた土器には結晶片岩が比較的多く含まれている。本地域は白亜系和泉層群分布地域に属す。結晶片岩の採集される三波川帯は吉野川下流域では南岸地帯⁴⁰にあり、本地域周辺に形成された同時期の萩原墳墓群の土器には認められなかった現象である。時代は遡るが中期末の光勝院寺内遺跡においても、胎土への結晶片岩の混入は指摘できない。

例えば溝1資料はほぼ完形に復元しうる個体を大部分図示したが、72個体のうち、結晶片岩を胎土中に混入するものは41個体、約60%である。器種毎の比率をみると、壺20個体に対し結晶片岩を含むもの12個体60%、甕25個体のうち13個体52%、鉢18個体のうち11個体61%、高杯・脚部9個体のうち6個体66%である（Tab. 1）。図示した全個体数154のうちでも71個体46%となり、段階に拘らず結晶片岩を含む個体が目立っている。

結晶片岩の混入の仕方は吉野川南岸下流域鮎喰川流域の土器と同様に粗粒を含む程度のものであるが、明らかに同様の焼成・色調をもつものがある。以前徳島県での前半期古墳埋葬施設に吉野川南・北岸の差に拘らず、結晶片岩を用いる約束事が存在することを述べたが、その意味では南北を問わずすでに一つの大きな地域集落圏が形成されていたことも当然考慮に入れる必要がある。しかしながら具体的に南岸鮎喰川流域での当該時期の遺跡群相互の土器相が明瞭ではない現状では今ひとつ明確にすることはできない。この現象が胎土自体の変化であるか土器自体の移動であるか、あるいは南岸集落の出村的な性格を物語るものかは、いわば小地域内での事象であるという意味ではさほど大きな問題ではないかも知れないが、一方では半数弱は地場の胎土を保っている。本遺跡が旧吉野川（本来の吉野川本流）に面した徳島県ではかなり様相を異にする集落立地をしており、大局的にみれば同時代の萩原墳墓群などに隣接していることもと相まって、遺跡の性格を更に多角的に検討する必要が生じている。今後の調査にまちたい。

最後に土器の胎土との関連でいえば、阿波型土器として最近提示された所謂「矢野式土器」の抽出は畿内・播磨周辺で散見される「讃岐型甕に比較的類似する搬入土器」としての甕形土器の確認と共に、これに伴う土器群からその系譜を阿波地域に求め、庄内式併行の各器種について論じられている⁽⁴²⁾。徳島の当該時期の土器相が今ひとつ明瞭ではないことを断わったうえで若干のコメントをしておく、まず甕形土器では平行タタキで成形され、タタキ目の方向は左上がりもしくは水平であり、左上がりの細かいタテハケで消されること。体部は倒卵形で、古相を呈すものでは肩部の張るものがある。口縁部は水平にのび、端部は上方につまみ上げられる。古相と考えられるものほど鋭角に屈折し、端部をシャープにおさめる。内面のヘラケズリは頸部直下まで行うものから、体部最大径付近までのものへと移行することが揚げられている。吉野川南岸の土器と認識しうる本遺跡資料を中心にみておくと、タタキの方向、体部の形態、ヘラケズリの時期的変化については基本的に同様の様相を示している。しかし最も特徴的とされた口縁部の形態変化については、端部のつまみ上げは庄内式併行でも新相に至って盛行する現象ではないかと考える。これは広口壺の口縁部形態と相関性をもつものであろう。本遺跡資料ではⅠ式には認めがたく、Ⅲ式に多く出現しており、本時期に併行すると思われる庄遺跡（徳島大学蔵本団地地区）、鮎喰遺跡にも同様に指摘される⁽⁴³⁾。体部では古相のものに讃岐系甕形土器と酷似するプロポーションをもつものが認められるが、このことは徳島の甕形土器の一群に類縁関係をもつものが存在することを示している。

次に壺形土器をみると、各壺形土器の基本形と考えられた壺A類は本遺跡ではⅡ式以降展開を示し、Ⅲ式にやはり多く出現している。口縁部のつまみ上げと共に頸部内面のヨコハケに特徴をもち、徳島では本遺跡資料をはじめ、鳴門市萩原墳墓群、徳島市矢野遺跡、鮎喰遺跡、樋口遺跡、名西郡清成遺跡、三好郡加茂の宮遺跡、足代東原遺跡など広範に認められる形態である。壺B類は壺A類に粘土紐を継ぎ足して成形された「矢野式土器」を特徴付ける二重口縁壺形土器といえるが、二重口縁壺成形にあたって粘土紐を貼り付けることは当然の事象であり、確かに現状では矢野遺跡に最も多く認められるタイプではあるが、基本形とされた壺A類自体矢野遺跡に限らず、県下普遍的に認められる。反対に壺B類が壺A類の分布と一致しないことは、壺B類があくまで矢野遺跡を中心とする鮎喰川流域の遺跡群に限定される小地域性を示すものである可能性もあり、必ずしも阿波型土器を代表させる形式名を支える標式器形にはなりえないと考える。なによりもまず、「現状で最も資料が豊富な遺跡名を冠」せられた矢野遺跡の土器相が個々の時期区分、組成関係を含

め今ひとつ明らかになっていない現在、限定された地域性を示す一定量の土器をもって、より普遍的な地域色を包括することは慎重にされるべきであろう。

小型丸底鉢(柑)については形態的にバリエーションがあり、より細部での形態変化で年代差を抽出させることが可能であるか否か、最も直面する課題の一つといえるが、現在まで器台とセットをなす資料は認められてはおらず、より古相の形態をとどめると考えられるタイプには脚台を有している。脚台の消滅はその背後に器台の存在を当然予想させるが、現状では小型丸底壺の定着以前の本タイプには器台は伴わない可能性が強い。

再度本資料をみておくと、全体としてこれまで述べてきたようにⅡ式以降器形的には広口壺形土器を中心に中部瀬戸内の様相を示していることが明らかであるが、Ⅰ式では前代からのヘラケズリ技法を駆使しながらも壺形土器、鉢形土器などに畿内、特に河内地方の土器群に類似する器形が認められた。これが本遺跡のみの在り方であるか否かは検討していく必要性を残しているが、胎土中に結晶片岩を含んでいることからすれば、吉野川南岸下流域の土器群にも共通する様相であるといえよう。

註)

- (1) 森浩一「徳島県板野郡愛宕山古墳」『日本考古学年報』15 1967
- (2) 笠井新也「石塚の研究」『人類学雑誌』32-1 1917
- (3) 宮内庁書陵部『古鏡目録』1976
- (4) 小林勝美「板野町出土の皮袋形提瓶の一考察」『徳島県立板野高等学校研究紀要』1971
- (5) 小林勝美「原始」『板野町史』1971
- (6) 野口年長「粟の落穂」『新編阿波叢書』上巻所収 1976
- (7) 徳島県博物館『阿波の古代寺院』1974
- (8) 松下勝編『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978
- (9) 菅原康夫編『萩原墳墓群』徳島県教育委員会 1983
- (10) 石野博信・関川尚功『纏向』奈良県立橿原考古学研究所 1976
- (11) 徳島県教育委員会『埋蔵文化財調査概報(名西郡石井町農業試験場敷地内)』1970
- (12) 徳島県教育委員会「池田町東州津遺跡発掘調査現地説明会資料」1975 未報告資料
- (13) 菅原康夫「徳島県における積石塚についての一・二の問題」『日本考古学協会昭和58年度大会発表要旨』1983 掲載資料
- (14) 酒井龍一ほか『豊中・古池遺跡』Ⅲ 1970
- (15) 1984年度徳島市教育委員会調査資料。滝山雄一氏の好意で実見。

- (16) 岡本健児「入門講座・弥生土器一四国」5 『考古学ジャーナル』93 1974 但し当該時期の資料はその系譜をも含めて実態把握に乏しく、大幅な改組の段階にきているといえよう。
- (17) 徳島市矢野遺跡、名東遺跡、庄遺跡、南庄遺跡、鮎喰遺跡、樋口遺跡、三好郡大柿遺跡、東州津遺跡、荒神前遺跡、足代東原遺跡など。ほかに発掘調査資料ではないが、三好郡三加茂町出土資料（三加茂町立歴史民俗資料館蔵）に比較的良好な資料がある。
- (18) 福井英治「土器」『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市教育委員会 1982
- (19) 下村晴文・福永信雄・芋本隆裕『馬場川遺跡発掘調査報告』V 東大阪市教育委員会 1977
- (20) 芋本隆裕・稲山数士「鬼塚遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』I 東大阪市遺跡保護調査会 1975
- (21) 寺沢薫「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」『六条山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1981
- (22) 亀田博ほか『大福遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1982
- (23) 菅原康夫「徳島における発生期積石塚の一樣相」『考古学ジャーナル』225 1983
- (24) 菅原康夫・高橋正則『光勝院寺内遺跡』徳島県教育委員会 1984
- (25) 福永信雄・勝田邦夫「上六万寺遺跡」『東大阪市遺跡保護調査会年報』I 東大阪市遺跡保護調査会 1975
- (26) 玉井功・井藤暎子・小野久隆ほか「巨摩・瓜生堂」『近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪府教育委員会 1981
- (27) 高島徹・広瀬雅信・畑暢子編『亀井』大阪府教育委員会 大阪文化財センター 1983
- (28) 尾上実・大谷治孝・高橋雅子ほか『若江北』大阪府教育委員会 大阪文化財センター 1983
- (29) 正岡睦夫・高畑知功ほか『百間川原尾島遺跡2』岡山県教育委員会 1984
- (30) 高橋護・葛原克人・正岡睦夫「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県文化財保護協会 1972
- (31) 六車恵一「香川県木田郡牟礼村原遺跡の土器」『弥生式土器集成』1 1958
- (32) 小野久隆「〔木棺状木製品〕について」『大阪文化誌』17 大阪文化財センター 1984
掲載資料
- (33) 一山典『徳島市の原始・古代―埋蔵文化財資料展』徳島市教育委員会 1980 矢野遺跡掲載資料
- (34) 滝山雄一・大下直樹「鮎喰遺跡出土の土器」『しぶき』112 徳島考古学研究グループ 1984
- (35) 石野博信「川島・20溝の土器群」『川島・立岡』太子町教育委員会 1971
- (36) 乗安和二三・山本一郎・中司照世『吹越遺跡』山口県教育委員会 1972

- (37) 渡部明夫・藤井雄三『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会 1983 掲載資料
- (38) 例えば福家清司・久保脇美朗・野々村拓也「庄遺跡蔵本団地地区昭和58年度調査現地説明会資料」、松永住美・河野雄次・吉成克則『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会 1985 などにによる。
- (39) 1984年徳島市教育委員会発掘調査資料。滝山雄一氏の好意で実見。なお土器の年代観は滝山氏の見解によるところが大きい。具体相は正式報告の刊行に期待したい。
- (40) 中川衷三編『徳島県の地質』徳島県 1972
- (41) 註9に同じ
- (42) 岩崎直也「四国系土器群の搬出」『大阪文化誌』17 大阪文化財センター 1984
- (43) 一山典『弥生時代の徳島市一埋蔵文化財資料展』徳島市教育委員会 1983 掲載資料
- (44) 註43掲載資料
- (45) 壺B類の出土遺跡としては、現在まで判明している例では徳島市矢野遺跡、同鮎喰遺跡などが僅かに指摘されるにすぎない。

VI 黒谷川郡頭遺跡の溝 I 出土の土器の 文様について

宇佐晋一 斎藤和夫

I. はじめに

黒谷川郡頭遺跡の溝 I から出土した壺形土器に描かれた文様は、近年各地に類例の増しつつある弥生時代から古墳出現期にかけての直弧文関連文様の一つとして注目されるが、それらの文様のなかでも本遺跡のものは古い様相をもち、この種の文様の初現と形成にかかわる重要な問題を提起している。

II. 資料

いずれも壺形土器に描かれた線刻文様で、つぎの 5 点である。

資料 1. 外反した口縁部の上面に描かれ、2本の帯が逆時計回転の方向に、たがいに他の帯のしたに入組んでいる⁽¹⁾。一方の帯は口縁から頸部に向ってやや左斜めに延びており、中心線をもつ 3 線帯であるが、他方は中心線のない 2 線帯である。この入組み文の中央に両方の帯の側縁でできた凸レンズ形の空間部分が見られる。この文様の右に接続して、約 1.5 倍の巾をもった 2 本の帯が直交するように描かれ、口縁に平行するほうは右端で口縁のほうに曲がるかに見えるが、他の帯と入組み文を形成していたかどうかは不明である。

(図 1-1)

資料 2. 2 本の帯の入組み文で、資料 1 と同趣の構図であるが、帯に中心線がない。(図 1-2)

資料 3. 胴部の上部に、頸部の下端に接して描かれたもので、上方の横位の直線と、その両端から下方に半円形にちかく弓なりに引かれた弧線で囲まれた空間を、下方の曲線に沿う 2 本の曲線で分割し、上半の空間は斜めの 3 本の曲線で分割した単独図形。(図 1-3)

資料 4. 胴部が頸部に接する部分から 3 本のゆるやかに曲がる線が左斜め下方へ、それぞれ平行することなく描かれたものの部分図。(図 1-4)

資料 5. 胴部の上部に描かれた左下りの逆台形に似た図形で、上縁の左端は斜め下方にのび、下縁をなす線の左端が最初上縁に達しなかったためか、再度かきなおしを試みて上

縁の線につないでいる。他の資料にくらべて線がやや太目で、線と線の接合部がずれており、文様としてのまとまりも十分でない。(図1-5)

Ⅲ. 考 察

1. 文様の性質

資料1と2は2線ないし3線よりなる2本の帯の入組み文で、1はそれにやや太い別の2本の帯を組合わせている。このような一定の巾をもった帯による文様構成は、近年弥生時代後期から古墳出現期にかけてその類例が増してきているが、本例のように入組み文を形成するものは少く、吉備地方の特殊器台形土器の第1段階のものに3例(図3-9,10,図4-1)を見るのみである。しかも吉備のそれらの文様がいずれも8~15本の線で帯を形成するのに対して、本例は2~3本で表現するという単純なものであり、入組み文は1か所にどどまって連続展開することがない。また施文部位についても壺形土器の口縁の上面という、線刻文様としては類例のまれな場所がえらばれており、同類は愛媛・姫塚遺跡の壺形土器(図3-2)の1例が知られるのみである。

資料3. まったく類例のない図形で、変形木葉状の輪廓のなかを、あたかも葉脈のような5本の曲線で分割しているが、とくに帯的表現は見られない。まったく外界の対象をうつしたものでなければ、またのちに現れる直弧文の原単位図形との関連も認められない。ともかく左端を尖鋭に整えた多線構成の不可解な抽象図形である。

資料4. 部分図で、まとまりを欠くために全体の構図を察することは困難である。

資料5. なにを表現しようとしたものか不明で、描線も不確かであり、記号文的な性格のものかと察せられる。

2. 古い時期の直弧文関連文様として取扱う対象の範囲

弥生時代の文様のなかでも直弧文関連文様とみなすべきものはどのような基準によって選ばれているかを明確にしておこう。もと熊本県下の装飾古墳の文様の研究に端を発し、⁽²⁾1917年に浜田耕作博士の命名による直弧文は、鹿角製刀剣装具の彫刻文様との関連から一種の組帯文とみられていた。その後1947年大阪・紫金山古墳から直弧文の彫刻のある2個の貝輪が見出され、その α 面の文様の分析によって、われわれは直弧文の原単位図形を抽出することができた。⁽³⁾この原単位図形は底辺を共有する末拵がりの二者一対の図形で、上部は相寄る帯がX状になり、下方に拵った部分で一方には刺状の突起を2か所にもち、他方にはそれがない、という特徴的なものである。1970年に奈良・纏向の石塚古墳の周濠から弧文円板が検出されると、そこにも直弧文の原単位図形が構成単位として用いられてお

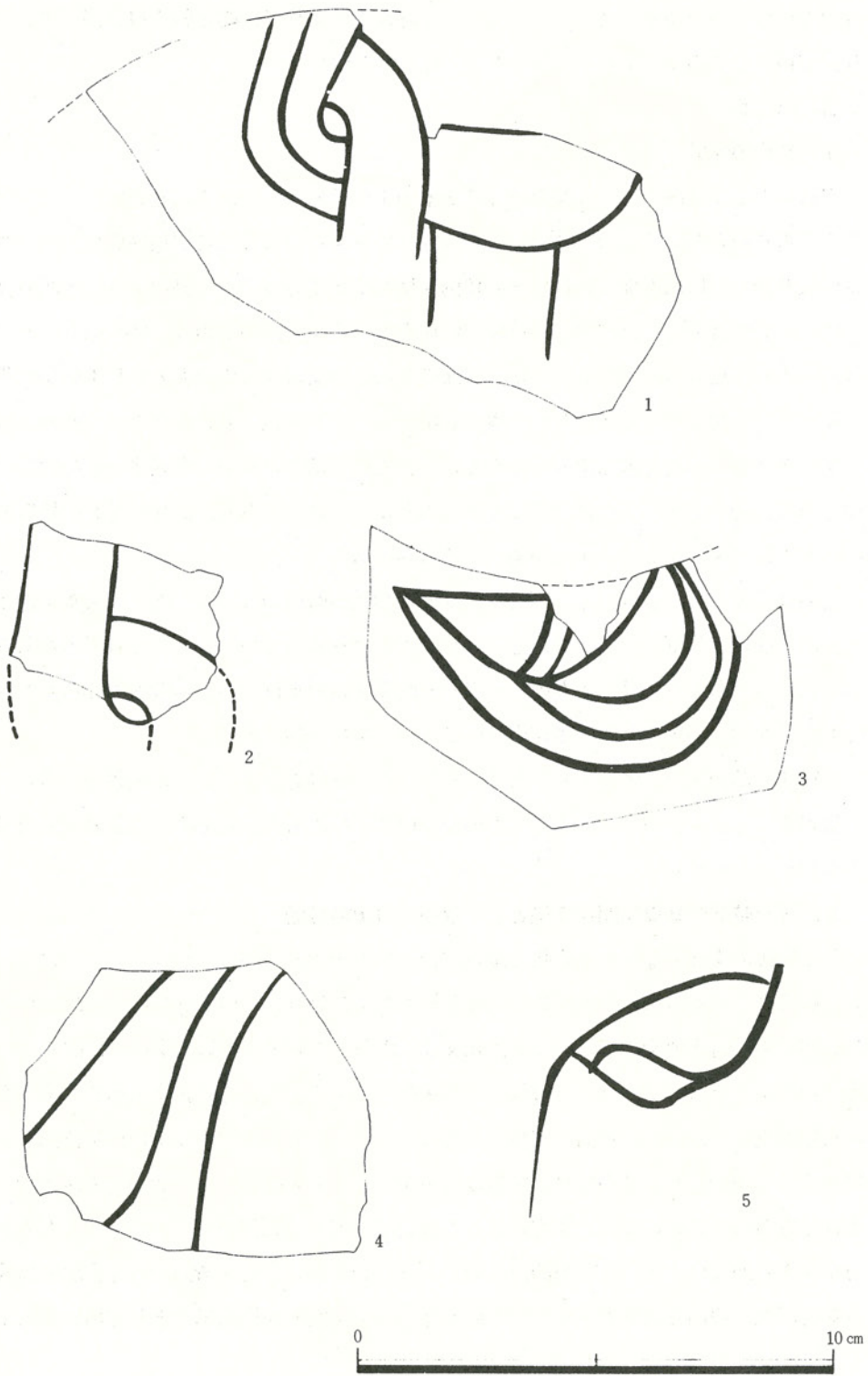


図-1 黒谷川郡頭遺跡の溝1出土の土器の文様

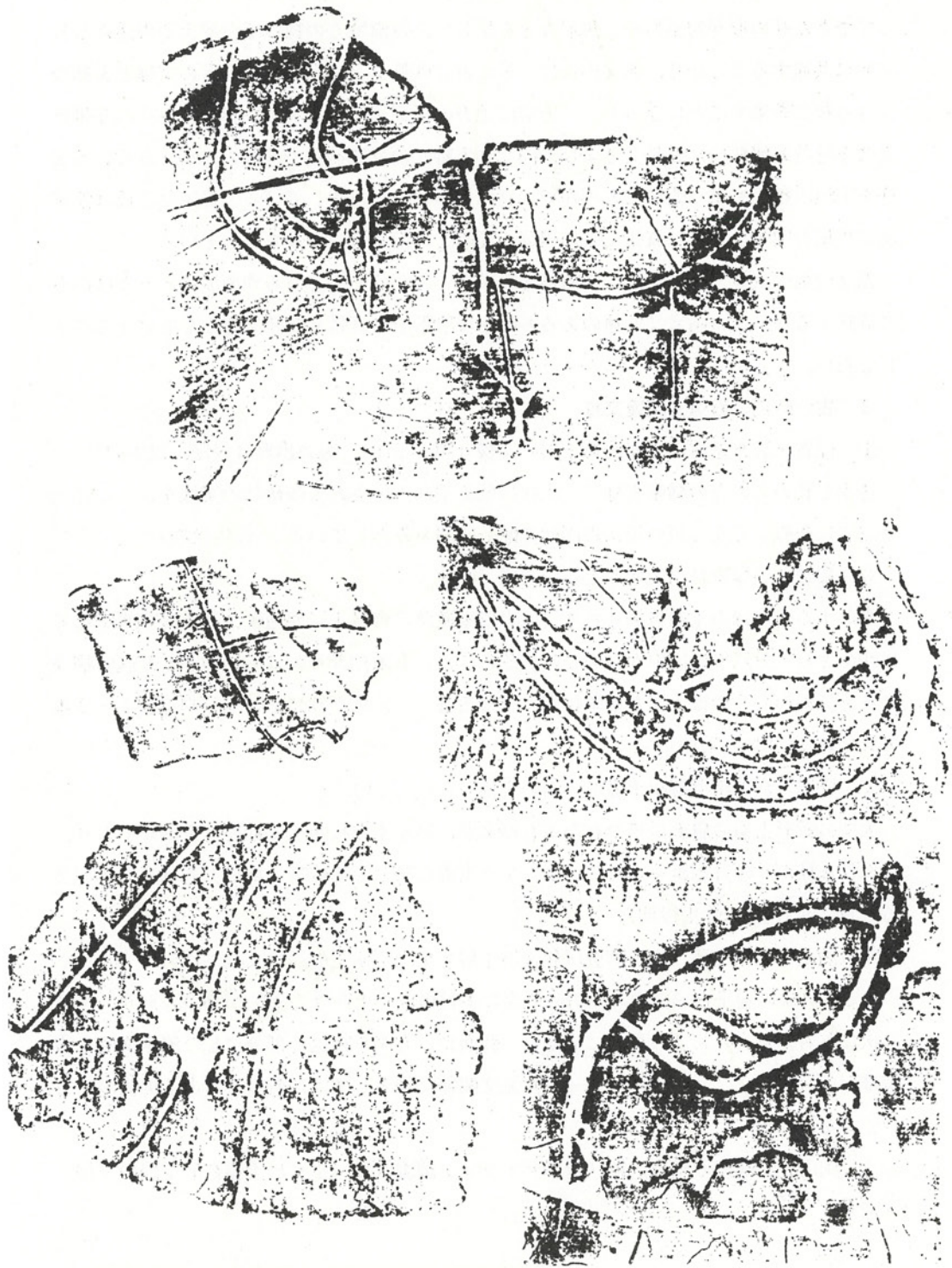


图-2 土器文様拓影

り、より古い形態のぼち形であることが認められたばかりでなく、原単位図形の構成によってできた孔の形が勾玉形や三角形などを呈して、吉備地方の特殊器台形土器の透かし孔の形に共通することから、弧文円板は一挙に古い直弧文と吉備の特殊器台の文様とを結びつける接点を果すことになった。⁽⁴⁾一方吉備地方の楯築遺跡の石製品の彫刻にみられる帯状文様を近藤義郎教授は弧帯文とよび、⁽⁵⁾同じ弥生時代の特殊器台や各種の土器にみられる文様を宇垣⁽⁶⁾氏もまた弧帯文と呼んで、直弧文の源流とみなしている。豊岡卓之氏は弧帯文の性格を明らかに、⁽⁷⁾直弧文への飛躍の要因と吉備からの波及を論じている。

弧文円板の直弧文と、吉備のいわゆる弧帯文との関係や、どちらが源流であるかはのちに詳述するが、この両者に関連のあるものを現段階での直弧文関連文様として考えることにしたい。

3. 古い時期の直弧文関連文様

① 佐賀・惣座遺跡出土器台形土器の文様（図3-1）〔図の出典は後記、以下同じ〕

透かし孔のあいだの横帯文様で、上縁は低く垂れ、中央の太鼓橋状の文様をはさんで上下左右に複線からなる短い帯状の図形を配し空間をみたしている。（弥生後期）

② 愛媛・姫塚遺跡出土壺形土器の文様（図3-2）

壺形土器の口縁の上面に描かれている点で本遺跡の資料1に共通する。まず中央でたてに切半された分銅形の図形が目をひく。そのほかにも末拡がりのぼち形文がくり返し描かれる。分銅形のもは上下とも末拡がりになる部分に、拡がりに応じた分割線を1～2本入れている。（弥生末期）

③ 愛媛・宮前川遺跡出土壺形土器の文様（図3-3）

大型の壺形土器の肩部に描かれたぼち形文で、斜左下方に向って拡がりをみせており、数本の末拡がりの分割線をいれている。すぐ上方に接して4線帯の屈曲したようにも見える三角文がある。（弥生後期）

④ 岡山・上東遺跡（亀川調査区包含層下層）出土不明土製品の文様（図3-4）

高さ4.3cmの扁平台形土器の一方の側面に多線構成の上向きの末拡がりの図形が、持送り状に左右から交互に3段重ねに描かれ、背面には右側を折返し部分にした流水文的な多線帯がみられる。（弥生後期初頭——直弧文関連文様としては、もっとも古く位置づけられている）

⑤ 岡山・百間川原尾島遺跡（新田サイフォン調査区H-1）出土器台形土器の文様（図3-5）

6～8線帯の組み編み文と、周縁に向う多線帯の端が末広がりになって作ったばち形文からなる。二つのばち形文を接続する際に、隣りあう両者の側縁をつないで円形に近い文様を形成し、そのために一方の多線帯を屈曲させるという注目すべき技法を生み出している。(弥生後期後葉)

⑥ 岡山・百間川原尾島遺跡(左岸用水調査区1-H-5)出土器台形土器の文様(図3-6)

多線帯がループ状をなし、そのループの接線に直角の方向にも多線帯が接している。出土地点はことなるが⑤と同一個体の一部とみられている。(弥生後期後葉)

⑦ 岡山・百間川兼基遺跡(第3微高地)出土器台形土器の文様(図3-7)

短冊形の透かし孔に関係なくループ状の9～10線帯を接続させている。(弥生後期後葉)

⑧ 岡山・楯築神社旋帯石(神体石、通称亀石)の文様(図3-8)

11～14線帯が9個の渦状部を形成し、それらをつなぐ多線帯が顔面部を除く全面をおおっている。渦状部はほぼ正円にちかく、2～3本の帯の弯曲部分を合わせて形成されるが、そのために帯に極端な屈曲をしいている。また帯の両側縁はとくに溝を斜めに深く片切り彫りにして整えている。多線帯の一部に中心線を表現したのものもある。(弥生後期後葉)

⑨ 岡山・楯築遺跡出土弧帯石の文様(図3-9)

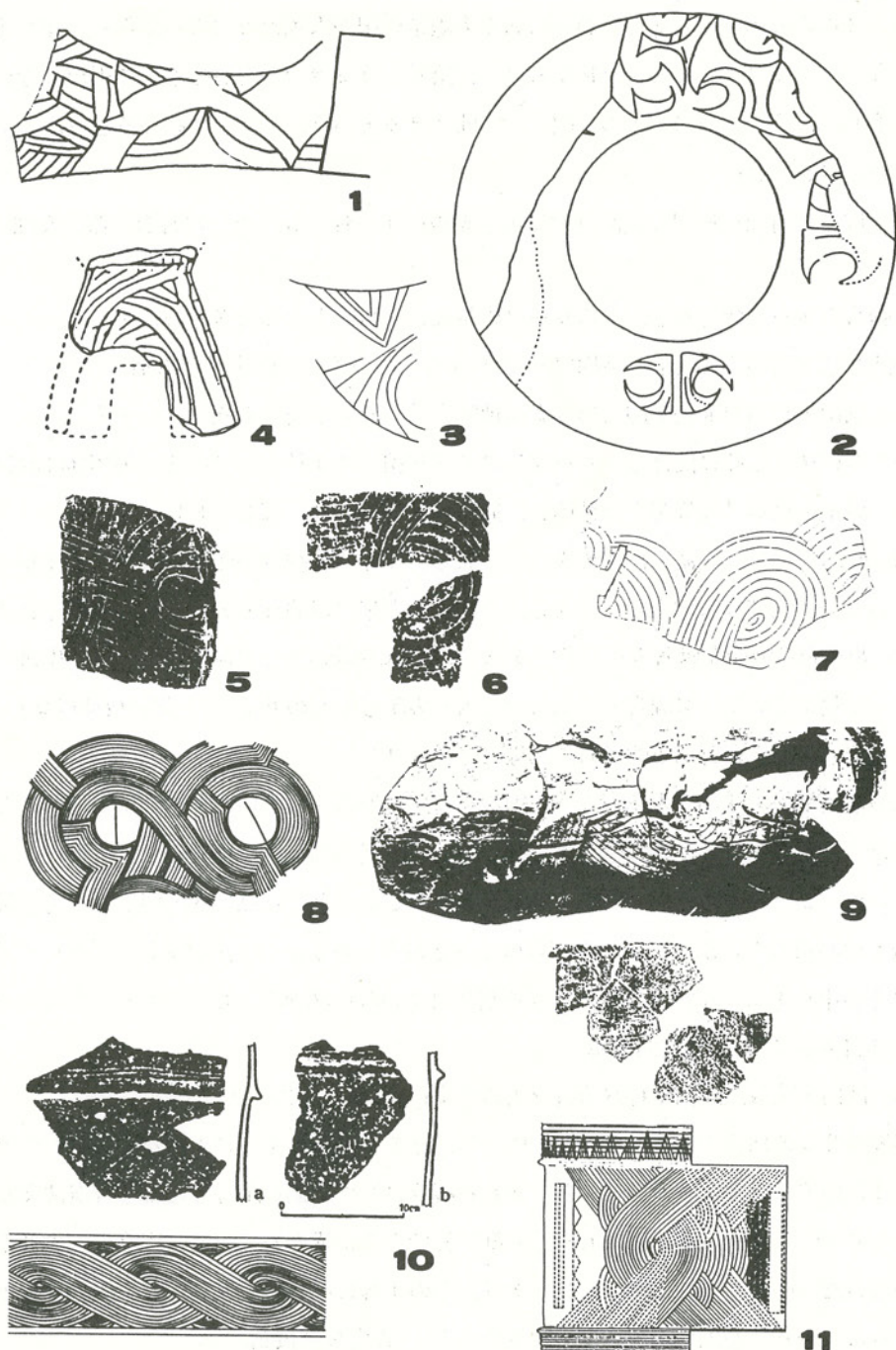
楯築墳丘墓の主体部の木槨のうゑに細片となって埋められていたもの。渦状部とばち形文が目立ち、全面に5～10線帯をめぐるしている。渦状部は⑧の旋帯石ほど正円にちかくはないが、2～3本の帯の弯曲部で渦状部を形成しようとする点は⑧と同じである。帯は側縁も中心線もないが、2か所のばち形文(そのうちのひとつは図示されていない)はともにその中央部に、左右を分けるような割れ目状の深い溝がことさらに彫りこまれているのが注目される。(弥生後期後葉)

⑩ 岡山・立坂遺跡出土特殊器台形土器の文様(図3-10)

15線帯2本の横位入組み連続文を主体とし、その交叉部の上下に小さな5線帯を青海波のようにのぞかせているもの(a)と、それを縦位にして両側に平行した帯と青海波文を加えたもの(b)とがある。いずれも練達の細い線で入念に描かれている。横位のもは帯と帯のあいだに凸レンズ形の透かし孔があり、その下縁にはさらに切れこみが縁の半分まで加えられており、勾玉形の孔の変形とみられる。(弥生後期後葉)

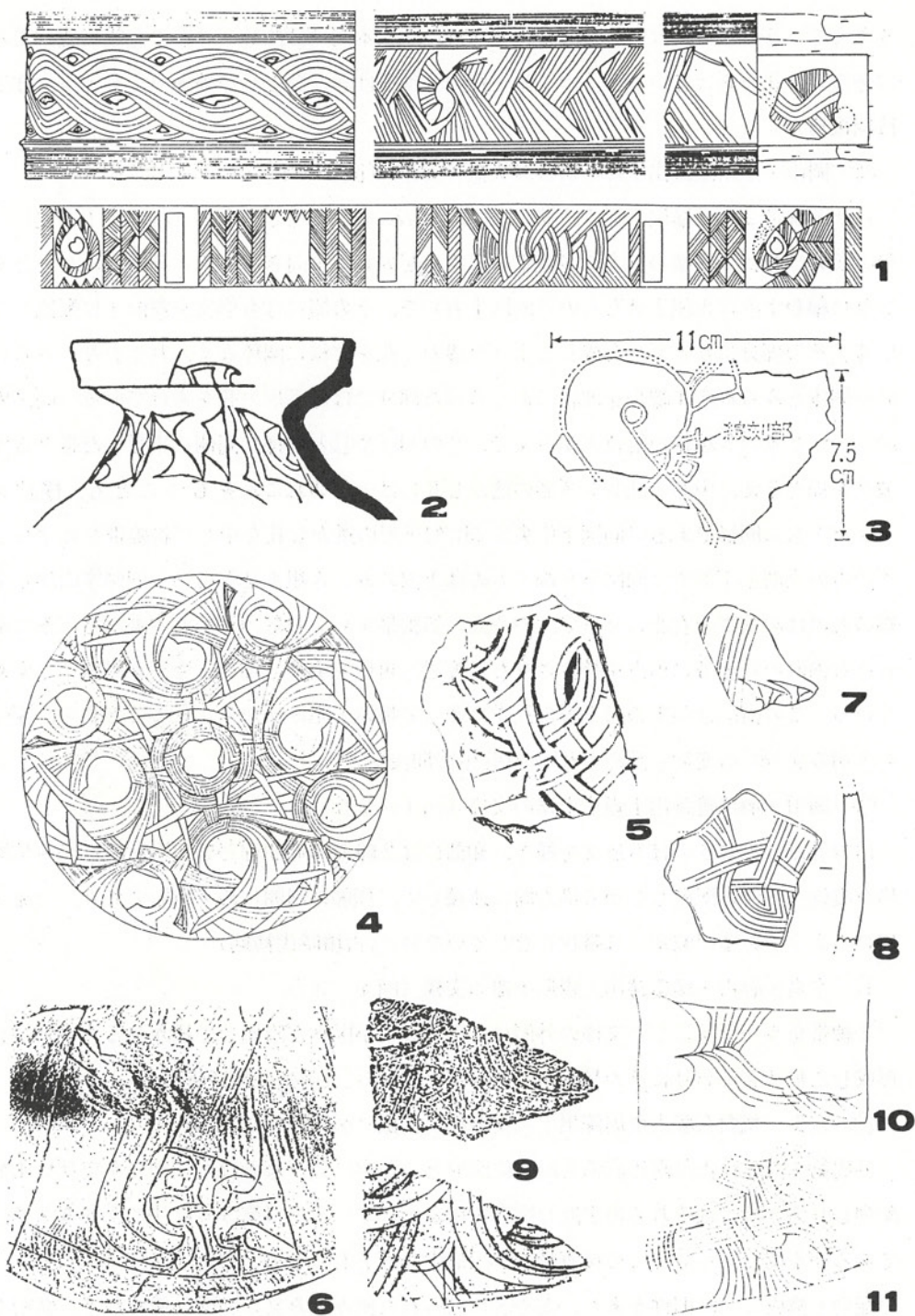
⑪ 岡山・黒宮大塚特殊器台形土器の文様(図3-11)

2本の15線帯の縦位の入組み文で、⑩の(b)と同様に両側に平行した帯と青海波文を描



図一三 古い時期の直弧文関係の文様① 一九州・四国・中国地方検出のもの(縮尺不同)

1. 佐賀・惣座遺跡出土器台形土器文様
2. 愛媛・姫塚遺跡出土壺形土器文様
3. 愛媛・宮前川遺跡出土壺形土器文様
4. 岡山・上東遺跡(亀川調査区包含層下層)出土不明土製品文様
5. 岡山・百間川原尾島遺跡(新田サイフォン調査区H-1)出土高杯形土器文様
6. 岡山・百間川原尾島遺跡(左岸用水調査区1-H-5)出土器台形土器文様
7. 岡山・百間川兼基遺跡(第3微高地)出土器台形土器文様
8. 岡山・楯築神社旋帯石(神体石・亀石)文様
9. 岡山・楯築遺跡出土弧帯石文様
10. 岡山・立坂遺跡出土特殊器台形土器文様
11. 岡山・黒宮大塚出土特殊器台形土器文様



図一 4 古い時期の直弧文関係の文様② — 中国・近畿・東海地方検出のもの(縮尺不同)

1. 岡山・中山遺跡出土特殊器台形土器文様
2. 岡山・酒津遺跡出土壺形土器文様
3. 奈良・唐古鍵遺跡出土壺形土器文様
4. 奈良・纏向遺跡(石塚古墳周濠)出土弧文門板文様(復原図)
5. 奈良・纏向遺跡(東田大塚南方溝)出土弧文石文様
6. 三重・納所遺跡出土手焙形土器文様
7. 愛知・旧紫川遺跡出土土器文様
8. 愛知・見晴台遺跡出土土器文様
9. 愛知・三ツ山古墳群2号墳盛土出土土器文様
10. 愛知・朝日遺跡出土線刻画土器文様
11. 静岡・三和町遺跡出土壺形土器文様

きそえている。⑩のbは中心に透かし孔はないが、本例には凸レンズ形の左側に切れこみ部分のある孔をあけている。その精緻な線刻表現には⑩にひとしい趣がみられる。(弥生後期後葉)

⑫ 岡山・中山遺跡出土特殊器台形土器の文様 (図4-1)

(a) 8線帯2本の横位入組み連続文で、⑩の(a)を簡略化したもの(図4-1上左)。(b) 魚のひれ状に先端の拡がる多線帯を斜めに配列し、上向きのもので下向きのもので交互に編むように入組ませたもの(同図上右)で、その間にばち形文を左向きに配置している。その部分に6と9を合成したような透かし孔を文様に関係なく入れており、さらに同一個体とみられる4線帯を波状にあしらった部分には勾玉形の孔をあけている(同図右端)。(c) 2本の6線帯の縦位入組み文で、⑩の(b)や⑪と同様に両側に平行した帯と青海波文を描きそえ、中心の凸レンズ形の透かし孔には一部切れこみをもつことも、横位の(a)とともに同様である(同図下中央)。(d) 勾玉形の透かし孔を中心に斜線帯をめぐらし、その帯の上部と下部で(同図下左端のものは上部のみ)入組ませたもの(同図下両端)、右端のものは斜線帯の右側にそって、やや太い斜線帯をめぐらし、その右中央部と下部にそれぞれ内側の斜線帯に頂点を接合させた二等辺三角形を重ねて描き、なかを斜線でうずめている。この構図は中央の勾玉形の孔をめぐって帯の入組み文がみられることから、縦位の入組み文(c)の変形と認められる。(弥生後期後葉)

⑬ 岡山・酒津遺跡出土壺形土器の文様 (図4-2)

口縁外側に上向きのばち形文を描き、頸部には2峰の山形曲線と底辺とからなる単位図形を縦位と斜位に配列しながら横方向に接続して、頸部の周囲にめぐらしており、一見文様帯のようであるが厳密には帯状をなしていない。(古墳時代初期)

⑭ 奈良・唐古・鍵遺跡出土壺形土器の文様 (図4-3)

2線帯をループ状にした文様の外側に、帯でない小区画が附属して描かれる。ループを形成した帯は右まわりにその帯の下に入りこんでいる。(弥生後期後葉初め)

⑮ 奈良・纏向石塚古墳周濠出土孤文円板の文様 (図4-4)

外周第1段に最古段階の直弧文原単位図形と、左右に分かれたばち形図形を交互に4組配列し、第2段にはそれらの裏返し図形を組み上げている。(第3段は中心部をなす構図であるが不明であって、この復原図では円形中心部をもつものと想定して描いてある)。その配列と構成には法則性があり、⑤や⑧に見られた組み編み文が随所に使われて、緊密な構図を形成している。その結果として8か所に勾玉形の孔が原単位図形の突起によって必

然的に生じ、他の三角形の孔とともに吉備地方の特列器台形土器の透かし孔の形や文様との密接な関係を示している。(古墳出現期)

⑯ 奈良・纏向遺跡(東田大塚南方溝)出土弧文石の文様(図4-5)

弧文円板に似た組み編み文をもつ側縁付きの帯で構成されるが、法則性は見られず、文様凝縮の度がいちじるしい。(古墳時代初期)

⑰ 三重・納所遺跡出土手焙形土器の文様(図4-6)

4個の直弧文原単位図形の上部を中心にあつめて下部を上下左右に配したものであるが、下のはかなり正確に右型原単位を描き、右のはやや簡略化し、上は原単位特有の突起を失ってばち形文となり、左のはばち形の両端が錨状に巻上っている。これらの原単位合成文様の左下から左斜上方に3線帯が逆S状に立上っており、その先端の上部は山形を形成して、その右にくびれ部をつくっている。(古墳時代初期)

⑱ 愛知・旧紫川遺跡出土土器の文様(図4-7)

巾13mmの底辺をもつ小さな2個の原単位図形を近接して描き、左のは右型原単位をかなり正確に、他方は突起を省略して表現している。前者の先端に接して巾8mmの5線帯があり、また下方にも接する帯の一部が認められる。現在知られている最小の原単位資料である。(弥生時代後期山中式期～欠山式期～古墳時代元屋敷式期)

⑲ 愛知・見晴台遺跡出土土器の文様(図4-8)

6cmほどの小片に3～8線帯が縦横に、弯曲したり屈曲したりしながら重なり接続している。そこに法則性は見出せないが、一部に上方に拡がる図形があり、そのなかに分割線を入れているので原単位図形ないしはばち形文であった可能性がある。(弥生時代後期の遺跡より検出)

⑳ 愛知・三ツ山古墳群2号墳盛土出土土器の文様(図4-9)

多線構成の文様のなかに右型原単位図形の一部を思わせる2線表現の曲線と直線が認められる。(古墳時代初期)

㉑ 愛知・朝日遺跡出土線刻画土器の文様(図4-10)

小型壺形土器の四角形の台座の長方形のスペースに、右型原単位図形の輪廓を描き、その上部に接して上向きの末拡がり文様を描いて、どちらにも輪廓にそった数本の線を内側に加えている。(古墳時代初期)

㉒ 静岡・三和町遺跡出土壺形土器の文様(図4-11)

右形原単位図形を多線表現で描き、その上部に多線帯を水平に配して第1段とする。そ

の多線帯を原単位図形の右側の突起のあるもの（甲図形と呼ぶ）のうしろから左側の末拵がり図形（乙図形と呼ぶ）のまえを通すとともに、甲図形の上部の帯をさらに水平多線帯に沿ったもう1本の多線帯にくぐらせて、不完全ながら組み編み文を形成している。その部の右に接して乙図形を伴わない甲図形のみ原単位図形を描き、うしろに多線帯をやや右上りに配して第2段としている。弧文円板の第1段と第2段の関係に、裏返しではあるが酷似している。直弧文原単位図形の分布の東限である。（古墳時代初期）

IV 本遺跡の文様との関係

このようにして古い時期における直弧文関連文様を通観して、黒谷川郡頭遺跡の壺形土器の文様とのあいだにどのような関係が見出されるであろうか。まず資料1と2については、2～3線帯という単純な表現と、彎曲ないしループ形成などの点で、奈良・唐古・鍵遺跡の壺形土器の文様（図4-3）に類似した要素が見出される。つぎに縦入組み文帯という点では岡山・立坂遺跡（図3-10）、岡山・黒宮大塚（図3-11）ならびに岡山・中山遺跡（図4-1下中央）の特殊器台形土器の文様とのあいだに構成上の一致を認めうるが、岡山の特殊器台文様のグループは多線帯表現がいちじるしいという特色をもつ。

一般に単純な2～3線帯が多線帯に先行することは発達史的にみて容易に考えられるが、文様の変容においては逆に簡略化される場合もあるため、その先後関係を明確に検討しておかなければならない。しかし、帯は線の構成の多少にかかわらず、それ自体が簡単な構造であるため、手掛りとなる指標や不可逆性が見出せず、型式編年は困難であり、やむをえず土器様式による編年によらなければならない。まず畿内的な様相を示す本遺跡の土器が、弥生後期後半の古相期とされているのに対して、唐古・鍵の土器文様（図4-3）は畿内第V様式後葉初めとされ⁽⁸⁾、きわめて相近い時期と見られ、豊岡氏は立坂a・bとの近似を述べている。本遺跡の土器文様と吉備のグループ、すなわち特殊器台の第1段階の一群（立坂型、図3-10, 11, 図4-1）や楯築遺跡の弧帯石（図3-9）ならびに旋帯石（図3-8）さらに百間川の土器（図3-5, 6）などに見られる多線構成の文様との先後関係は、かなりの程度に明瞭にとらえるようになってきている。それは吉備における弥生後期後葉の墳墓遺跡や集落遺跡の土器が、エピ上東＝黒宮Ⅱ＝立坂・楯築・中山＝鬼川市Ⅲと考えられ、大和の弥生後期直後の「纏向Ⅰ式と鬼川市Ⅲ式が併行する可能性」⁽⁹⁾や「黒宮Ⅱの時点が纏向Ⅰ式ときわめて近い時期」⁽¹⁰⁾などの見方が行われるようになったからである。これからして、纏向Ⅰ式以前の段階である弥生後期後半初めの唐古・鍵のものや、畿内的様相を示す弥生後期後半古相期の本遺跡の土器の文様は、吉備の多線帯グループに先行す

るものであることが認められ、直弧文関連文様の帯的表現のものなかではもっとも古いものと見ることができるのである。

つぎに帯的表現でない資料3については、比較しうる対象となるものは認められない。しかし帯的表現でない点からすれば愛媛・姫塚遺跡の壺形土器の文様(図3-2)は注目に値するもので、単独ぼち形文が分銅形を呈しながら、たてに切半されており、その末拡がりの形状に応じて多線帯のような分割線を左右それぞれに1~2本づつ入れている。これらの要素は吉備の多線帯グループの末端処理のしかたに類似するが、なかでも楯築遺跡出土の弧帯石(図3-9)のぼち形文の中央部が、たてに深く溝状に彫りこまれていることに関係がありそうである。おそらくその源流は、纏向の弧文円板(図4-4)の周縁を形成する直弧文原単位図形の甲乙と、その突起を省略した丙丁の両図形が、それぞれ「ぼち」形文の二者一対の組合わせであるため、真中で切半されていることに由来するものであろう。この流れがその逆ではないことは吉備のどの文様にも原単位図形が見出せず、文様構成上の法則性が弧文円板ほど厳密ではないことから明らかである。さらに吉備の特殊器台の第1段階である立坂型において、すでにその透かし孔の形状が、文様のあり方に関係なく“切れこみのある凸レンズ形”であり、立坂型に属する中山遺跡の特殊器台(図4-1)では、その形の孔のほかに同一文様帯のなかに勾玉形の透かし孔をも伴うという事実は、弧文円板における原単位図形の、つよい法則性にもとづく構成の結果、甲図形の突起によって必然的に生じた勾玉形の孔からの影響が及んだものと見られるので、大和の弧文円板の、吉備の文様に対する先行性は不可逆性をもって定まるのである。特殊器台の“切れこみのある凸レンズ形”や勾玉形の透かし孔は、すべて形式学的痕跡の好例であって、吉備の特殊器台の文様の、弧文円板に対する後出性を示す資料にほかならない。現在のところ、楯築の弧帯石をも含めて、吉備の弥生後期の文様から弧文円板が生まれなければならない必然的な理由は、到底見出しがたいのである。その意味からも本遺跡の資料1と2における2本の帯の入組み文の中央に生じた凸レンズ形の部分に切れこみのない事実は、弧文円板以前の古態を示すものと見られよう。

佐賀・惣座遺跡の器台形土器の文様(図3-1)は、弥生後期の九州における孤独な1例であって、ただちには他の文様との関連は見出しえないが、中心的構図とみられる太鼓橋状に曲った帯に、周囲から多線帯が空白を充填して寄りそうのは、吉備の多線帯グループに似た印象をうける。同時にこれが酒津式までは降らないことからも、多線帯文様の盛行

を見た弥生後期後葉の吉備との関係は無視できないであろう。

岡山・酒津遺跡の壺形土器の文様(図4-2)は、今回はじめて口縁の文様が上向きの「ばち」形文であることが知られたのは、愛媛・姫塚遺跡の壺形土器の分銅形ばち形文(図3-2)との類似からである。さらに切半された分銅形「ばち」形文の一半は、酒津の壺形土器の頸部の文様の1単位をなす2峰の曲線にも通ずるものがあり、にわかに関近性をもつに至った。しかし酒津式は纏向2式に併行すると見られており、同じ吉備でも弧文円板(纏向1式)併行期の多線帯グループのようなはなやかさが見られないばかりでなく、酒津併行期とみられる向木見型、宮山型などの特殊器台のゆたかな装飾性とも無縁であるのは、系譜を異にするためかと見られる。

一方大和においては弥生後期にループ状の帯文様として唐古・鍵遺跡の壺に現れて以来、後期直後の弧文円板に至るまで、類例の稀薄であることは否めないが、質的にはすでに唐古・鍵のものにおいて描線の熟達さが目立ち、それに続く弧文円板が作域の高さではまさに空前絶後の優品と称しても過言ではないことを思えば、両者の中間のどの時期かにこの大和において直弧文原単位図形が創作され、帯のループ状表現と組合わされて複雑な文様へと発展し、ついに弧文円板が誕生するに至ったことは想像に難くなく、同時期の吉備の多線帯文様の、はなやかではあるが原単位図形のない、きびしい法則性を欠いた表現とは同日に論ずることは困難であろう。纏向遺跡(東田大塚南方溝)の弧文石の文様(図4-5)は、大和においてもやがて弧文円板の法則性が忘れられ、神秘的な文様へと凝縮していく過程を示すものと考えられ、纏向4式以前とされてはいるものの弧文円板よりは形式上後出のものである。

伊勢湾から東海地方にかけては特異な共通点をもつ遺例にめぐまれている。三重・納所遺跡の手焙形土器(図4-6)、愛知・朝日遺跡の小型壺形土器(図4-10)、静岡・三和町遺跡の壺形土器(図4-11)など欠山式のもの、愛知・旧紫川遺跡の土器(図4-7)の山中式～元屋敷式期のもの、愛知・見晴台遺跡の土器(図4-8)の弥生後期のもの、ならびに愛知・三ツ山古墳群2号墳盛土出土の元屋敷式の土器片であるが、いずれも右型の直弧文原単位図形、もしくはそれに近い図形を描く点で共通している。納所の手焙形土器(図4-6)では4個の右型原単位図形を、いずれも底辺を外側にして、上下左右に配列し、それぞれの上部を中央でまとめているが、各原単位図形がたがいに重なり合うことがなく、多線表現も見られず、それぞれの大きさや形状が異っているため、文様としてのまとまりは十分でなく、纏向の弧文円板を通らない原単位系文様の流れのあったことを推測させるも

のがある。これに対して三和町の壺形土器の文様(図4-9)は多線表現の原単位図形と多線帯からなることや、原単位図形が上下2段構成であること、また下の原単位図形の上部和横方向の多線帯とで形成する組み編み部で、多線帯が原単位の甲図形(突起のあるもの)のうしろから乙図形のまへへと通ることなど、弧文円板の特色をよく備えており、弧文円板を通った文様であることが理解される。

これら欠山式～元屋敷式の土器のうち欠山式は、従来尾張地方の弥生後期の土器とされていたが、纏向2・3式＝庄内式と併行することが知られてから古式土師器の範疇で考えねばならなくなった。¹⁵⁾とすれば弧文円板の成立以後、古墳時代初頭のうちに、これらの原単位系文様のもつ強力な象徴性につながる地域が、伊勢湾から遠江まで、急速に東へと拡大したことが注目されよう。

さて最後に、直弧文関連文様としては、もっとも古く位置づけられ、弥生後期初頭(百間川後期1＝鬼川市1)とされる岡山・上東遺跡(亀川調査区包含層下層)¹⁶⁾の小さな不明土製品の文様(図3-3)について検討しなければならない。側面の綾杉文とあきらかに区別して、それまでに例をみない持ち送り状の文様を左右から交互に3段に描き、下方のものを上方のもの裏側に組みこむかのような構成や、多線表現で上端が広がる要素をもっていることなど、のちにあらわれる吉備の弥生後期後葉の多線帯グループへの要素的なつながりの否定できない注目すべき性質のものである。しかしその裏面はまったく異なる流水文に似た横位文様を配することや、両面とも空間充填的で、“図”と“地”の区分が不明瞭なことなどから、おそらくまだ文様のパターン化が不十分で、表現のルールが定まらなかった段階を示すものと見られよう。

それがひとたび本遺跡の帯の入組み文や、唐古鍵のループ状の帯の文様のような、パターン化した文様の刺激を受けると、多線帯文様に発展していくことはごく自然な成行きであろう。特殊器台の第1段階である立坂型に限って最初に多線帯文様が用いられる理由が、第2段階の向木見型の文様へのつながりのない点とあわせて、従来はなはだ不可解であったけれども、今回本遺跡の資料によって帯的文様の先行性が知られたことからよく理解できるようになった。

その立坂型における、先にのべた切れこみのある凸レンズ形や勾玉形の透かし孔の存在は、その時期に弧文円板か、それに類する原単位系の文様が成立していることを示唆しているが、一方弧文円板には多線帯が用いられ、原単位図形までも多線の表現であるという事実を見逃すことはできない。こうして吉備の多線帯文様と大和の原単位系文様が、相互

乗入的に用いられているという具体相に、吉備・鬼川市Ⅲ式期＝大和・纏向Ⅰ式期におけるそれぞれの地域間の連帯性、すなわち等しい象徴を共有する相互肯定的な集団同一性の成立を認めないわけにはいかないのである。

それに関連して、楯築遺跡における弧帯石(図3-8)や百間川原尾島遺跡の器台形土器の文様(図3-4)も、その構成において、あるいはばち形文の形成において、濃厚な弧文円板からの要素的影響を受けて成立していることを指摘しておきたい。

おわりに

黒谷川郡頭遺跡の壺形土器に描かれた文様を通じて知られたことはつぎのとおりである。

(1) 弥生時代後期に、のちにあらわれる直弧文を先導するような文様が、まず土器に出現する。それは抽象的な多線図形や帯的文様であるが、はじめから装飾的ではなく、むしろ精神性のつよい象徴的文様である。その源流を、銅鐸や土器にみられる具象性をもった絵画や、抽象的な装飾文様、あるいは記号文などのなかに求めることはできない。本遺跡の土器文様は、こうした弥生後期の直弧文関連文様の一つとして、そのパターン成立の時期が弥生後期後半古相期であることを明確に示した点に重要な意義がある。

(2) 直弧文関連文様の初現の様相は、弥生後期初頭の吉備に、まず多線表現の上拡がり入組み文が十分にパターン化しない姿で出現し、ついで阿波の本遺跡に明瞭な2線帯入組み文としてあらわれる。同じ2線帯であり、しかも旋回して入組むという共通性をもつものが大和にも畿内第Ⅴ様式後葉初めに登場する。これは、いわば直弧文形成の準備段階であり、それらの範囲こそが、のちの直弧文を生み出す要素図形を最初に創作しえた地域である。

(3) 吉備の多線表現の要素が本遺跡の土器の2線帯入組み文の構図の影響のもとに、弥生後期後葉(鬼川市Ⅲ式期)に多線帯入組み文へと発展して、第1段階の立坂型特殊器台に描かれるころ、すでにして大和では古墳出現期(纏向Ⅰ式期)に入っており、弥生後期の2線帯旋回入組み文のうへに吉備の多線表現を受入れながら、あらたに直弧文原単位図形を創作し、つよい法則性のもとにそれと帯とで構成された弧文円板の誕生を見ていたのである。その独特の勾玉形の透かし文様が、吉備の特殊器台や楯築の弧帯石などに強力な影響を与えたことは、大和の優位を示唆するものである。

(4) 阿波・大和・吉備が相互に影響し合いながら弧文円板に結実した直弧文の流れは、他地域がまだ弥生後期とみなされる時期に、早くも吉備をこえて西へは伊予、肥前にまで達し、他方東へはやや遅れて纏向Ⅱ式期＝欠山式期＝元屋敷式期に伊勢、尾張から遠江に

まで及んだのである。

注

- (1) 豊岡卓之「弧帯文の性格とその分布」(同志社大学考古学シリーズⅡ『考古学と移住・移動』1985年)における分類に従えば弧帯文A類の典型である。
- (2) 浜田耕作・梅原末治「肥後に於ける装飾ある古墳及横穴」(『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』1, 1917年)
- (3) 斎藤和夫・宇佐晋一「直弧文の研究」1, 2, 3(『古代学研究』6, 7, 11, 1953・1955年)
- (4) 宇佐晋一・斎藤和夫「縦向石塚古墳南側周濠から出土した弧文円板の文様について」(『縦向』奈良県桜井市教育委員会, 1976)
- (5) 近藤義郎『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ3, 山陽新聞社, 1980年。
- (6) 宇垣匡雅「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」(『考古学研究』第27巻4号, 1981年)

(7) 豊岡卓之, 前掲書(1985)において, 弧帯文の始源をその出自が吉備地域にあると考えるよりも, 近年の調査から最古の弧帯文が弥生時代中期末から後期初頭の大和・河内地域にあることを明らかにし, 唐古・鍵遺跡例(畿内第IV様式後葉, 図5-1)と亀井遺跡例(畿内第V様式初頭, 図5-2)をあげているのは重要な指摘である。弧帯文発生の素地として注目すべきものと思われるが, 文様の要素的な面から弧帯としての成熟が十分でないため今回はとりあげなかった。



図-5 弧帯文の始源(豊岡卓之氏による)

1. 唐古・鍵例 2. 同上模式図 3・4. 「亀井」例

石野博信氏もこの2例をとり上げ, 弧文円板に至る文様の特殊化は, 吉備でなく大和で行われたであろう, という見解を示された。(「弥生から古墳へ」帝塚山考古学談話会第300回記念講演において, 1985年12月7日)

- (8) 藤田三郎『唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』1983年。
- (9) 石野博信「古墳出現期の具体相」(『古墳文化出現期の研究』1985年)
- (10) 間壁忠壁・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」(『倉敷考古館研究集報』第13号 1977年)

- (11) 発掘調査を担当された佐賀県教育庁文化課の高島忠平氏のご教示による。
- (12) 石野博信・関川尚功『纏向』(奈良県桜井市教育委員会 1976年)
- (13) 発掘調査を担当された奈良県桜井市教育委員会の萩原儀征氏のご教示による
- (14) 名古屋大学の前川要氏のご教示による。
- (15) 石野博信 前掲書, 1985年
- (16) 「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第2集 岡山県文化財保護協会 1974年)
- (17) 詳細は「古代学研究」に発表の予定。

[図-3の出典] 1:「西日本新聞」昭和58年8月19日号から作成。2:正岡陸夫・十亀幸雄『日本の古代遺跡22・愛媛』保育社, 1985年。3:大滝雅嗣・野口光比古・谷若倫郎「宮前川遺跡とその時代」(『文化愛媛』第10号, 1985年) 4:「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集, 岡山県文化財保護協会, 1974年。5:「旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査1」百間川原尾島遺跡1, 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39, 岡山県文化財保護協会, 1980年。6:同上。7:「山陽新聞」昭和54年9月6日号から作成。8:藤田憲司・間壁葎子「楯築神社の立石と神体の石」(『倉敷考古館研究集報』第10号, 1974年)等から作成。9:近藤義郎『楯築遺跡』山陽カラーシリーズ3, 山陽新聞社, 1980年。10:近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』第13巻第3号, 1967年) 11:間壁忠彦・間壁葎子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」(『倉敷考古館研究集報』第13号, 1977年)

[図-4の出典] 1:『中山遺跡』岡山県落合町教育委員会, 1978年。2:間壁忠彦「倉敷市酒津及び新屋敷出土の土器」(『瀬戸内考古学』12, 1958年) 3:「奈良新聞」1983年6月28日号。4:石野博信・関川尚功『纏向』奈良県立橿原考古学研究所編, 奈良県桜井市教育委員会, 1976年。5:「毎日新聞」1984年1月24日号から作成。6:三重県教育委員会「納所遺跡」同会, 1979年。7:「旧紫川遺跡」(『旧名古屋城下町遺構発掘調査概要』Ⅱ, 旧紫川遺跡調査会, 1984年) 8:立松彰「岡本君から示された一片の土器」(『岡本俊朗遺稿追悼集・見晴台のおっちゃん奮闘記』1985年) 9:愛知県土木部・小牧市教育委員会『三ツ山古墳群発掘調査報告書』同部・同会, 1980年。9:榊原芳久「愛知県朝日遺跡出土の線刻画土器」(『考古学雑誌』第67巻第1号, 1981年) 10:佐藤由紀男「浜松市三和町遺跡出土の線刻土器について」(『考古学雑誌』第67巻第1号, 1981年)

Tab. 1 出土土器観察表

器種	番号/挿図	法量(cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
広口壺	1/9	口径 30.5	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外反 口縁下端部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける 3条の凹線を施したのち、直径1.4cmの円形浮文を貼り付ける 外面タテハケののち粗いタテハラミガキ 内面細いタテハラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> 中位の張る球形 外面8条/cmのタテハケ 内面上位から左方向のヘラケズリ 	淡褐色	結晶片岩 石英、金雲母片を含む	1号住居跡	内面に黒斑
甕	2/9	口径 15.2	<ul style="list-style-type: none"> 外反して端部をつまみ上げる 2条のごく弱い擬凹線をとどめる 	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外方に立ち上がる 端部を丸くおさめる ナデ 	淡褐色	結晶片岩の 大粒を含む 石英	1号住居跡	
甕	3/9	口径 12.1	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外方に立ち上がる 端部を丸くおさめる ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部の張らない縦長か？ 4条/cmのタタキののち細かいハケ 内面4~5条/cmの粗いヨコハケ 部分的に粘土紐痕跡をとどめる 	淡灰褐色	砂岩 黒色鉱物を 含む、金雲母片微量	1号住居跡	
甕	4/9	器高 22.9 口径 15.4 体部最大径 21.0 底径 3.5	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部僅かに上下に拡張 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中位上部に最大径 突出しない平底 体部外面口縁部との境ナデ、中位下半8条/cmのタテハケ 内面中位上半ナメヘラケズリ 下半タテハラケズリ 外底面ナデ 	淡赤褐色	砂岩 石英、黒色 鉱物、金雲母片	1号住居跡	体部外面煤の付着
甕	5/9	口径 16.3	<ul style="list-style-type: none"> 外反、口縁端部に2条の弱い擬凹線 ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 中位に最大径 4条/cmのタタキののち8条/cmのタタキを消すハケ 	淡灰褐色	砂岩 微量の金雲母片を含む	1号住居跡	体部中位に黒斑

品種	番号/挿図	法	量 (cm)	口	類	部	体	底	部	色	調	胎	土	出土	遺構	備	考
鉢	6/9	口 径	8.5				<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 口縁端部ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 丸底と考えられる 内面 ヨコヘラケズリの痕跡 外面 1mm幅をもつタテヘラミガキ 内面 ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 上位ハケのちナデ 内面上位から右方向の入念なヘラケズリ 	灰褐色		細かな黒色の金雲母、金雲母片を含む精選されている	1号住居跡				
鉢	7/9	口 径	13.0			<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 	<ul style="list-style-type: none"> タタキのちヘラケズリ 内面 6mm幅のタテヘラケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> タタキのちヘラケズリ 内面 6mm幅のタテヘラケズリ 	灰褐色		石英、微量の金雲母、黒色鉱物片を含む	1号住居跡		乾燥段階での収縮によると思われる器壁の亀裂			
鉢	8/9	口 径	21.8			<ul style="list-style-type: none"> やや内傾して立ち上がる 口縁外端面に1条の沈線 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面上半にヘラ状工具による掻痕 体部外面下半左方向のヘラケズリ 内面 幅 1mmの粗い右下がりのハケののち幅 4mmのタテヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面上半にヘラ状工具による掻痕 体部外面下半左方向のヘラケズリ 内面 幅 1mmの粗い右下がりのハケののち幅 4mmのタテヘラミガキ 	褐色		微量の結晶片岩、石英、金雲母片	1号住居跡		体部外面上半に素地自体の塑性によると思われる器壁の亀裂			
高 杯	9/9	口 径	22.5			<ul style="list-style-type: none"> 屈曲して外反 端部を丸くおさめる 		<ul style="list-style-type: none"> 赤褐色 			石英小粒、微量の金雲母片	1号住居跡					
壺	1/11	口 径	18.2			<ul style="list-style-type: none"> 頸部やや内傾して立ち上がる 口縁部丸みをおびて内彎気味に立ち上がる 端部を丸くおさめる 口縁部内外面ナデ 頸部外面 5条/cmのタテハケ 内面ナデ、下位に粘土紐貼り付け痕をとどめる 	<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部か？ 	赤褐色		結晶片岩、石英、赤色斑粒、微量の金雲母片	2号住居跡						

広口壺	2/11	口径	21.7	<ul style="list-style-type: none"> ・頸部は僅かに外方に立ち上がる ・口縁部外反、端部を上下に拡張 ・端部に3条の擬凹線 ・口縁部内外面ナデ ・頸部外面タタキのちハハケの痕跡 	赤褐色	大粒の結晶片岩 石英、赤色斑粒	2号住居跡	
甕	3/11	口径	16.0	<ul style="list-style-type: none"> ・外反して端部を上下に拡張する ・2条の擬凹線 ・内外面ナデ 	淡灰褐色	結晶片岩 微量の石英 金雲母片を含む。精選されている	2号住居跡	
鉢	4/11	器口径底	6.7 9.1 0.6	<ul style="list-style-type: none"> ・折り曲がって内傾する ・端部は尖り気味におさめる ・外面ナデ ・内面ヨコヘラミガキ 	淡灰褐色	多量の石英 チャート、 黒色鉱物を含む	2号住居跡	体部外面中位に 黒斑
鉢	5/11	口径	10.3	<ul style="list-style-type: none"> ・内彎気味に立ち上がる ・端部は尖り気味におさめる ・端部内外面ナデ 	淡赤褐色	石英 微量の金雲 母片、黒色 鉱物を含む	2号住居跡	体部外面に黒斑 内面煤の付着
鉢	6/11	口径 底部最大径	10.7 7.2	<ul style="list-style-type: none"> ・内彎気味に立ち上がる ・端部は僅かに屈曲して外反気味におさめる ・端部内外面ヘラヘラミガキを消すナデ 	淡赤褐色	石英・長石 チャート、 黒色鉱物、 微量の金雲 母片を含む	2号住居跡	

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口 額 部	体 底 部	色 調	胎 土	出土遺構	備 考
鉢	7/11	口径 10.7	<ul style="list-style-type: none"> 外反し端部は尖り気味におさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面ユビオサエの粗いヨコヘラケズリ 底部との境は緩やかである 底部内面ヨコヘラケズリ 体部は丸みをおびる 丸底の底部か? 体部内面・口縁部との境に稜を形成する 体部外面丁寧なタテヘラケズリ 内面15条/cmの細かいヨコハケ 	赤褐色	結晶片岩 石英, 微量 の黒色鉱物, 金雲母片 精選されて いる	2号住居跡	
鉢	8/11	口径 9.5	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反し端部は丸くおさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 上半がやや張った体部をもち平底か? 口縁部体部内面境に稜を形成する 外面 幅 2mmのタテヘラミガキ 内面 8mm幅を単位とする左方向へのヘラケズリ 	明灰褐色	石英, 長石 黒色鉱物, 微量の金雲 母片 精選されて いる	2号住居跡 炉2	
鉢	9/11	器高 5.4 口径 11.5 底径 3.1	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 僅かに突出した平底 外面 4条/cmの右下がりタタキのちタテヘラケズリあるいは板ナデ 内面 9mm幅を単位とするタテヘラケズリ 外底面ナデ 	暗赤褐色	石英, 金雲 母片, 黒色 鉱物	2号住居跡	体部上位に黒斑
鉢	10/11	器高 7.6 口径 17.4	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 端部は尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 尖り気味の底部 外面上から下への粗いヘラケズリ 内面 5条/cmのナナメハケのち下半に3mm幅を単位とするタテヘラミガキ 	明灰褐色	石英, 長石 チャートを含む 多量に含む	2号住居跡 検出面	

鉢	11/11	口径	21.4	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに外反気味に立ち上がる • 端部は尖り気味におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面上位まで1.2cm幅単位の下から上あるいはヨコへのヘラケズリ • 内面ナデののち下半細かいヘラミガキ 	淡灰褐色	石英, 赤色斑粒, 黒色鉍物, 金雲母片	2号住居跡	体部に黒斑, 体部外面上半ナデ部分に亀裂
鉢	12/11	口径	27.1	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに屈曲して外反 • 端部は方形状の断面を呈し, 1条の縦凹線をとどめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は外方に広がる • 体部外面 8条/cmの粗いヨコハケののち3mm幅のタテヘラミガキ • 内面 入念なヨコヘラケズリか? 	赤褐色	結晶片岩 石英, 赤色斑粒, 金雲母, 黒色鉍物を微量含む	2号住居跡	
長頸壺	13/11				<ul style="list-style-type: none"> • 肩が張る • 外面 1mm幅の入念なタテヘラミガキ • 内面 頸部との境に絞り目, 左方向へのヘラミガキ 	暗茶褐色	石英, 黒色鉍物, 黒雲母を多量に含み, 微量の金雲母片を含む 緻密で硬質	2号住居跡	讃岐系礫と同様の色調・胎土
長頸壺	14/11		体部最大径	21.4		茶褐色	石英, 黒色鉍物, 黒雲母を多量に含む 緻密で硬質	2号住居跡	讃岐系礫と同様の色調・胎土
広口壺	1/13	器口径	8.7 4.0	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部は短かく内傾する • 口縁部は内彎気味に立ち上がる • 頸部外面 11条/cmの細かいタテハケ • 口縁部外面ナデ • 内面ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位よりやや上部が強く張り出す • 張り出す部位で上半と下半を接合 • 底部は突出しないあいげ底 • 体部外面上半幅4mm単位の内ナメヘラミガキ, 中位ヨコヘラミ 	赤褐色	結晶片岩 石英, 金雲母片を微量含む 精選されている	3号住居跡	ミニチュア土器 外底面及び体部下半に黒斑

器種	番号/挿図	法	量 (cm)	口	頸部	体	底部	色調	胎土	出土遺構	備考
直口壺	2/13	口径	6.7		<ul style="list-style-type: none"> 頸部は短かく外反 口縁端部尖り気味におさめる 頸部外面2mm幅単位の入念なタテハラミガキ 内面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部内面に粘土紐痕 体部外面2mm幅単位の入念なタテハラミガキ 内面ナデ 		淡赤褐色	石英, 黒色 鉱物, 金雲母片を微量含む。精選されている	3号住居跡	頸部・体部上位に黒斑
広口壺	3/13	口径	17.9		<ul style="list-style-type: none"> 外反し口縁下端部をつまみ出す 1条の擬凹線をとどめる 外面8条/cmのタテハケののち上位にナデ 内面4~5条/cmのヨコ方向の連続ハケ, ハケ原体幅1.8cm 			明褐色	砂岩 石英, 赤色 斑粒及び微量の金雲母	3号住居跡 炉	
高杯	4/13	口径	18.5		<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 口縁端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 浅い皿形状 外面上位粗いヨコハケ 下半入念なタテハラミガキ 内面タテハラミガキ 脚部挿入付加法 		暗灰褐色	結晶片岩微粒を多量に含む	3号住居跡 床	体部外面上位に煤の付着
鉢	5/13	器高 口径 底径	6.6 14.2 3.0		<ul style="list-style-type: none"> 外上方に立ち上がる 口縁端部を尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面4条/cmの水平タタキ のちナデあるいはタテハラミガキ 上半に粘土紐痕をとどめる 内面5条/cmのヨコハケののちハラミガキ 僅かに突出した平底 外面ナデ 		暗褐色	砂岩 石英, 黒色 鉱物, 赤色 斑粒, 金雲母片 精選されている	3号住居跡 床	体部外面, 外底面黒斑
鉢	6/13	器高 口径 底径	7.4 11.0 3.4		<ul style="list-style-type: none"> 外上方に立ち上がる 口縁端部ユビオサエ尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面4mm幅単位の粗いナデメハラミガキ 僅かに突出気味の平底 外面ナデ 		赤褐色	結晶片岩 石英, 長石 赤色斑粒	3号住居跡	体部外面, 外底面黒斑

有孔鉢	7/13	器高 10.6 (復元) 口径 14.2 (復元) 底径 3.7	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部やや角ばるか? 	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方にのび、中位よりやや屈折して内彎気味に立ち上がる • 下半2条/cmのヨコあるいは右上がりのタタキ、上半右下がりのタタキののち粗いナデヘラミガキ • 内面1.4cm幅単位の粗いタテヘラケズリ • 平底 外底面ヘラケズリ • 2孔施すが貫通する1孔は外底面、貫通しない1孔は内底面から穿つ 	淡赤褐色	砂岩 石英、赤色 斑粒、微量 の金雲母片	3号住居跡 床	体部外面下半黒斑
鉢	8/13	口径 18.6	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外反する • 口縁端部はやや角張っておさめる • 口縁部タタキ出し • 口縁部内面12条/cmの細かいヨコ方向の連続ハケ • ハケ原単位幅1.1cm 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は緩やかに立ち上がる • 3条/cmの水平タタキののちナデ • 内面3mm幅単位の入念なタテヘラミガキ • 平底と推定される 	暗赤褐色	砂岩 石英、赤色 斑粒、微量 の金雲母片	3号住居跡	乾燥段階での収縮によると思われる器壁の亀裂
鉢	9/13	器高 11.8 (復元) 口径 20.2	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部は僅かに外傾し、下部を若干つまみ出す • 断面方形 • 幅3.2cmの片口を形成 • 口縁部内外面にナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は緩やかに内彎気味に立ち上がる • 体部外面右上がりのタタキのうち11条/cmのタテハケ、さらにその上4mm幅原単位の粗いナデメハケ • 下半3mm幅単位の粗いタテヘラミガキ • 内面14条/cmの細かいヨコ、ナメハケ • 下半入念なタテヘラミガキ 	淡灰褐色	砂岩 石英大粒を 多量、微量 の金雲母片	3号住居跡	体部外面黒斑

器種	番号/挿図	法	重量 (cm)	口	頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
広口壺	1/15	口径 16.0		口	<ul style="list-style-type: none"> 頸部は垂直に立ち上がる 口縁部は外上方にのび、端部を上下に拡張 2条の擬凹線 頸部外面6条/cmのタテハケ 頸部内面7~8条/cmのヨコハケ 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 頸部との境にナデによる弱い段 	淡褐色	結晶片岩 石英、赤色 斑粒、微量 の金雲母片	4号住居跡	
広口壺	2/15	口径 22.2		口	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外上方にのびる 端部は内傾して拡張 2条の弱い擬凹線 内外面ナデ 		灰褐色	砂岩 石英、黒色 鉱物	4号住居跡	
短頸壺	3/15	口径 16.0		口	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁端部を丸くおさめる 外面タテヘラミガキ 内面ヨコヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部か? 外面8mm幅単位のタテヘラミガキ 内面左方向へのヘラケズリ痕 粘土紐痕 	明灰褐色	砂岩大粒 石英、微量 の金雲母片	4号住居跡	
甕	4/15	口径 13.9		口	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁端部を丸くおさめ、内面に1条の沈線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部か? 外面7mm幅単位のタテヘラケズリのうち8条/cmのタテハケ 内面タテヘラケズリ 上位口縁部との境ナデ 粘土紐痕 	淡明褐色	結晶片岩 石英、微量 の赤色斑粒 金雲母片	4号住居跡	口縁部内面黒斑
甕	5/15	口径 15.0 体部最大径 18.0		口	<ul style="list-style-type: none"> 短かく外反 端部を尖り気味におさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 丸みをもった体部 中位上半に最大径 上半3条/cmの右上がりのタタキ 中位水平のタタキ 下半8mm原体幅のタテハケ 内面体部上位より1.3cm幅単位 	赤褐色	砂岩 石英、微量 の赤色斑粒 金雲母片	4号住居跡 炉	

甕	6/15	器高 22.3 (復元) 口径 14.2 体部最大径 20.8 底径 3.9	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁下端は丸みをもつ 口縁上端をつまみ上げる 1条の擬凹線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> のタテヘラケズリ 粘土紐痕 体部中位上半に最大径 外面上半4条/cmの粗いタテハケ 中位ヨコ、ナナメハケ 下半5条/cmの粗いタテハケ 内面上位よりタテヘラケズリ 外底面ハケ 	暗灰褐色	砂岩、黒色石英、黒色鉱物の微量の金雲母片	4号住居跡	体部外面中位下半煤の付着
鉢	7/15	体部最大径 5.5	<ul style="list-style-type: none"> 外上方に立ち上がる 外面10条/cmのタテハケのうち2mm幅単位のタテヘラミガキ 体部との境にタテハケをとどめる 	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに屈曲 丸底と考えられる 体部外面下半タテヘラケズリ 	淡灰褐色	石英、黒雲母、黒色鉱物	4号住居跡	体部口縁部外面黒斑
鉢	8/15	器高 3.2 口径 9.7	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に緩やかに立ち上がる 端部丸くおさめる 端部ユビオサエ 	<ul style="list-style-type: none"> 丸みをおびた平底 体部外面ユビオサエ 内面ユビオサエのうちナデ 内底面8mm幅単位の粗いヘラケズリ 	赤褐色	砂岩、黒色石英、黒色鉱物の微量の金雲母片	4号住居跡 炉	
鉢	9/15	器高 7.3 口径 22.1 底径 2.3	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部は尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 体部は外上方にのびる 小さな平底 体部外面外底面から3条/cmの右上がりのタタキ 外面上半タタキを消すナデ 内面6条/cmの右下がりのハケ 内底面クモの巣状ハケ 	赤褐色	砂岩、黒色鉱物、微量の金雲母片	4号住居跡	
鉢	10/15	器高 6.1 口径 18.6	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内傾 端部内面に1条の弱い沈線 角張った端部 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 丸底 体部外面右上がりのタタキのちへラ状工具による掻痕 粗いヘラミガキ 	淡灰褐色	砂岩大粒、赤色斑粒、微量の金雲母片	4号住居跡	

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
鉢	1/25	口径 8.8 体部最大径 4.6	<ul style="list-style-type: none"> 丸みをおびて内彎気味に立ち上がる 端部は僅かに外反して尖り気味におさめる 端部内外面ナデ 外面 2mm 幅単位のタテヘラミミガキ 内面 ユビオサエののちナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内面 7条/cm のヨココハケ 下半に 4mm 幅単位のタテヘラミガキ 屈曲して張り出す 口縁部との境内外面に稜を形成 外面口縁部との境ナデ 内面ヨココハケズリ 	淡灰褐色	砂岩、石英、黒色鉱物、微量の金雲母片精選されている	5号住居跡	体部外面黒斑
鉢	2/25	器高 8.3 口径 9.7 体部最大径 10.4	<ul style="list-style-type: none"> 僅かに外反 端部は尖り気味におさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部 最大径は中位よりやや上部 丸底にちかい平底 外面 3条/cm の右上がりの幅の細いタタキのち 5条/cm のタタキを消す粗いタテハケ 内面 6条/cm のヨココハケのち 9mm 幅単位のハケを消すタテヘラケズリ 内面上位粘土紐痕 	淡灰褐色 (外) 灰黒色 (内)	砂岩、石英、微量の黒色鉱物、金雲母片	5号住居跡	
鉢	3/25	器高 6.3 口径 13.3	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部丸くおさめる 内面に 1条の弱い沈線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 丸底 内外面ヘラケズリ 	灰褐色	砂岩、石英小粒、黒色鉱物、微量の金雲母片	5号住居跡 P 7	体部外面黒斑
鉢	4/25	器高 6.2 口径 11.8 底径 3.3	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部尖り気味におさめる ユビオサエナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 平底 体部外面右上がりのタタキのち 	明褐色	結晶片岩、石英、赤色斑粒、金雲	7号住居跡 床	体部外面上半黒斑

広口壺	1/22	口径 26.2	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部は外上方に立ち上がる • 口縁部外反 • 端部を上方に鋭くつまみ上げる • 2条の擬凹線 • 5条/cmの幅の細いタタキ • 口縁部外面4条/cmのタテハケ内面右下がりのハケののちハケを消すナデ • 頸部外面タテハケ • 内面6条/cmの右下がりあるいはヨココハケ 	<p>ヨココハケ</p> <ul style="list-style-type: none"> • ハケを消す入念なタテヘラミミガキ, ナデ • 内面7条/cmの右下がりあるいはヨココハケののち1.1cm幅単位の上から下へのヘラケズリ • 外底面ナデ <ul style="list-style-type: none"> • 球形にちかい体部か? 	明褐色(外) 淡灰褐色(内)	結晶片岩 石英細粒を多く含む	方形周溝墓 周溝	口縁部内面黒斑 口縁部内面赤色 顔料塗布痕跡
広口壺	2/22	口径 11.8 体部最大径 15.4	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部僅かに内傾して立ち上がる • 口縁部緩やかに外反 • 端部丸くおさめる • 頸部外面7条/cmの右下がりタテハケ • 頸部内面7条/cmのヨココハケ • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位に最大径 • 平底と考えられる • 下半4条/cmの幅の細い右上がりのタタキ • 中位水平タタキ • 7条/cmのタタキを消すタテハケ, 上半タテハケののち左下がりのハケ • 内面上位にユビオサエ • 中位下半タテヘラケズリ • 粘土紐痕 	明赤褐色(外) 淡褐色(内)	砂岩 石英, 黒色 鉱物, 金雲母	方形周溝墓 周溝	体部外面下半黒斑
鉢	3/22	口径 10.8	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外反 • 端部丸くおさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部上位が僅かに張る • 丸底か? 	淡灰褐色	砂岩 赤色斑粒,	方形周溝墓 周溝	

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
			<ul style="list-style-type: none"> • 外面ナデ • 内面10条/cmのヨコハケをとどめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面2条/cmの粗い水平タタキのちタテハケ • 内面10条/cmの細かい右下がりのハケ 		石英, 微量の金雲母片		
鉢	4/22	口径 10.4 体部最大径 5.8	<ul style="list-style-type: none"> • 丸みをおび内彎気味に立ち上がる • 口縁端部はやや外反気味に尖る • 外面2mm幅単位のタテヘラミミガキ • 内面ユビオサエのちナデ • 端部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部緩やかに屈曲して張るが, 稜を形成しない • 内面ヨコヘラケズリ • 丸底と考えられる 	淡褐色	結晶片岩 石英, 赤色 斑粒, 金雲 母片微量 精選されて いる	方形周溝蓋 周溝	
鉢	5/22	体部最大径 8.4		<ul style="list-style-type: none"> • 体部緩やかに屈曲, 稜を形成しない • 丸底 • 体部外面3条/cmの右下がりのタタキ • タタキを消す10条/cmの右下がりの粗いハケ • 内面ヘラケズリ • 外底面ナデのち入念なヘラミガキ 	灰褐色 (外) 黒 (内)	砂岩 黒色鉱物細 粒, 微量の 金雲母片	方形周溝蓋 周溝	
鉢	6/22	器高 6.3 口径 12.2 底径 2.0	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部僅かに内傾 • 尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 僅かに突出した小さな平底 • 体部外面口縁部まで4条/cmの水平タタキ • 上半タタキを消すナデ • 体部内面5~6条/cmの右下がりのハケ, 下半クモの巣状ハケ • 外底面ナデ 	淡赤褐色	砂岩 石英, 長石, 赤色斑粒	方形周溝蓋 周溝	外底面体部下 半 黒斑

鉢	7/22	口径 6.9 22.0 底径 4.7	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁部下端が外方に傾く方形断面 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に緩やかに立ち上がる • 僅かに突出した平底 • 体部外面口縁部まで3条/cmの水平タタキ • タタキを消すナデ • 体部内面10条/cmのタテにちかいい右下がりのハケ • 外底面ナデ 	淡赤褐色	砂岩 石英、長石、 赤色斑粒、 黒色鉱物、 微量の金雲 母片	方形周溝墓 周溝	体部外面黒斑
鉢	8/22	口径 10.8 体部最大径 6.9	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 口縁端部を尖り気味におさめる • 外面2mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面ユビオサエののちナデ • 端部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は大きく屈曲するが、丸みをもち稜を形成しない • やや深い体部 • 丸底と考えられる • 体部外面2mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面ヘラケズリ 	淡褐色	砂岩 石英、黒色 鉱物、赤色 斑粒、微量 の金雲母片	方形周溝墓 1号墓壇域	体部口縁部外面 黒斑
鉢	9/22	口径 5.3 9.6	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部尖り気味におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 深い碗形 • 丸底 • 3条/cmの右下がりのタタキのちタテヘラケズリ • 外底面細かいヘラケズリ • 内面タテハケ 	暗灰褐色	砂岩 石英、長石、 黒色鉱物	方形周溝墓 2号墓壇域	外底面黒斑
鉢	10/22	口径 6.2 11.2	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部丸くおさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 深い碗形 • 丸底 • 3条/cmの右下がりのタタキのちヘラケズリによって消す • 外底面幅長さ1cm程度の細かいヘラケズリで底部成形 • 内面8mm幅単位のタテヘラケズリ 	淡灰褐色	砂岩 石英、黒色 鉱物、長石、 微量の赤色 斑粒	方形周溝墓 2号墓壇域 内墓壇17	

器種	番号/棟図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
二口縁壺	11/22	口径 18.7 器高 28.3 (復元) 体部最大径	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部直立 • 口縁部屈曲して緩やかに外反 • 口縁部内外面ナデ • 頸部外面タテハケ • 内面ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部 • 中位よりやや上部に最大径 • 5条/cmの右下がりの細いタタキのち11条/cmのタタキを消す細かいタテハケ • 体部上半3mm幅の左下がりの放射線状ヘラミガキ • 内面ユビオサエのち左から右方向へのナナメヘラケズリ 	明褐色	結晶片岩 石英大粒微量の金雲母片, 赤色斑粒	方形周溝墓 2号墓址域 内墓址17	体部外面中位から上半, 頸部にかけて煤の付着
鉢	12/22	器高 4.8 (復元) 口径 15.8	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部肥厚して左右に拡張 • 上部に平坦面を形成 • 口縁端内面に1条の沈線 • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 丸底 • 外底面より上から下へのヘラケズリ • 内面ヘラミガキの痕跡 	明褐色	結晶片岩 石英, 赤色斑文, 微量の金雲母片	方形周溝墓 2号墓址域	体部外面上位に器壁の亀裂
甃	13/22	器高 23.9 口径 14.4 体部最大径 22.3	<ul style="list-style-type: none"> • 外反し端部は内傾してつまみ上げる • 1条の擬凹線 • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部, 中位に最大径 • 丸底 • 5条/cmの右下がりの細いタタキのち12条/cmのタテにちかいい右下がりの細かいナナメハケ • 外底面ハケ • 内面上半ユビオサエ, 下半タテヘラケズリ 	淡褐色	結晶片岩 石英, 赤色斑粒, 微量の金雲母片	方形周溝墓 2号墓址域	体部外面中位下半煤の付着 内面下半焦げ付き痕
鉢	5/25	器高 8.2 口径 11.0 底径 3.3	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部は尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しないあげ底の平底 • 体部外面2mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面ヘラケズリ • 外底面ナデ 	明褐色	微量の結晶片岩 石英, 長石, 赤色斑粒, 金雲母片	土坑1	体部外面中位黒斑
壺	6/25	体部最大径 11.8		<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位に最大径をもつ算盤玉 	淡茶褐色	結晶片岩	土坑1	

甕	12/25	口径 14.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外反し端部は内傾してつまみ上げる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに平底を残す • 外面上半右下がりのタタキのちナデ • 下半粗いヘラケズリ • 内面ナデ, 上位にユビオサエ • 粘土紐痕 	淡灰褐色 (内)	長石, 石英, 赤色斑粒, 金雲母片	土坑 6	
甕	13/25	口径 12.2 体部最大径 18.1	<ul style="list-style-type: none"> • 外反し端部形状におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部, 中位に最大径 • 外面 8条/cmの右下がりのハケ • 内面ユビオサエのちナデ 	茶褐色	砂岩 石英大粒, 黒色鉱物, 金雲母	土坑 6	体部外面煤の付着
鉢	8/25	器高 5.2 口径 11.8 底径 1.7	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに内傾して尖り気味におさめる • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は内彎気味に立ち上がる • 突出しない小さな平底 • 体部外面 4mm幅単位のヨコハラミガキ • 内面 13条/cmのタテハケ • 下半クモの巣状ハケ • 外底面ナデ 	明灰褐色	多量の黒色 鉱物, 石英, 長石, 金雲 母片	土坑 8	
鉢	9/25	器高 4.4 口径 12.3 底径 3.2	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに内傾し肥厚 • 端部は尖り気味におさめるが体部との境に段を形成 • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部は内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底, ややあげ底気味 • 体部外面 4条/cmの右上がりのタタキのち 3mm幅単位のタタキを消す入念なヨコハラミガキ • 内面 13条/cmの右下がりのハケのち下半ハケを消すヘラミガキ • 外底面ヘラミガキ 	明灰褐色	多量の黒色 鉱物, 石英, 長石, 金雲 母, 赤色斑 粒	土坑 8	

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕	14/25	器高 20.8 口径 15.5 体部最大径 19.8 底径 1.8	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部はやや内彎して方形状におさめる 外面ナデ 内面10条/cmのヨコハケ 内面体部との境に鋭い稜 	<ul style="list-style-type: none"> やや球形の体部 中位上半に最大径 尖がり気味の小さな平底 外面4条/cmの右上がりのタタキのうち、上位8条/cmのヨコハケ、中位下半10条/cmのタテハケ 内面上半10~11条/cmのヨコハケ、下半タテハケ 外底面ハケ 	明赤褐色	多量の黒色鉱物、石英、チャート、長石	土坑8内ピット	外底面体部下半黒斑
広口壺	1/28	口径 20.4	<ul style="list-style-type: none"> 頸部直立 口縁部外反し、端部は内傾して上下に拡張 2条の擬凹線 頸部外面タテハケ、内面ヨコハケの痕跡 口縁部外面タタキの痕跡 		淡赤褐色	砂岩、赤色石英、黒色斑粒、金雲母	土坑9	
甕	2/28	口径 15.5 体部最大径 21.8	<ul style="list-style-type: none"> 外反し端部は僅かに上方に尖る 口縁部内面ナデによる凹部2条の形成 口縁端部1条の擬凹線 	<ul style="list-style-type: none"> 体部肩の張る長胴形 中位より上部に最大径 丸底にちかい平底と考えられる 体部外面上半ナデ 下半3mm幅単位の入念なタテヘラミガキ 内面上半ユビオサエ 大半タテヘラケズリ 	暗茶褐色	多量の黒色鉱物、黒雲母、金雲母、石英、長石、緻密で硬質	土坑9	体部外面下半黒斑、讃岐系甕
鉢	3/28	器高 7.9 口径 17.7	<ul style="list-style-type: none"> 端部は僅かに肥厚し、上部に平坦面を形成、凹線状に窪む 方形状断面 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 丸底 体部外面3条/cmの右下がりのタタキのち下半6条/cmのタテハケ 	淡赤褐色	砂岩、石英、長石、金雲母	土坑9	体部外面下半黒斑

脚台付鉢	10/25	器高 8.9 口径 13.3 脚台径 6.2	<ul style="list-style-type: none"> • 端部やや尖り気味におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 上半板ナデ • 内面7条/cmのヨコハケののち2mm幅単位のタテヘラミガキ • 内彎気味に立ち上がる • 外下方に拡がる脚台を付す • 脚台との接合部円板充填法か? • 体部外面8mm幅単位の下から上への粗いヘラケズリ • 内面ナデ • 脚台部外面ユビオサエ • 内面ナデ 	淡褐色	結晶片岩 石英, 長石, 微量の金雲 母片	土坑10	器壁に乾燥段階 での亀裂
広口壺	1/31	口径 19.9	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部外上方に立ち上がる • 口縁部緩やかに大きく外反 • 端部を上方につまみ上げる • 2条の擬凹線 • 頸部外面5条/cmの粗いタテハケ • 口縁部内面6条/cmのヨコハケ • 頸部内面下半ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部か? 	淡赤褐色	結晶片岩 石英, 長石	土坑13	
甕	2/31	口径 15.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外反 • 口縁下端は丸みをもち上端は大きくつまみ上げる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 外面10条/cmの細いタテハケ • 内面ユビオサエののちナデ 	淡赤褐色	微量の結晶 片岩 石英, 金雲 母片	土坑13	
甕	3/31	口径 14.7 体部最大径 21.3	<ul style="list-style-type: none"> • 外反 • 端部をやや上方につまみ上げる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形にちかい体部 • 中位より上部に最大径 • 外面右下がりのタタキののち10条/cmのタタキを消す細かいタテハケ • 内面上半ユビオサエののちナデ • 下半下から上へのヘラケズリ 	明褐色	結晶片岩大 粒 赤色斑粒, 石英, 微量 の金雲母片	土坑13	体部外面下半煤 の付着

器種	番号/挿図	法	量 (cm)	口	頸部	体	底部	色調	胎土	出土遺構	備考
高杯	4/31	口径	20.1		<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに屈曲して大きく外反 • 口縁端部尖り気味におさめる • 外面上半5条/cmのタテハケのうち2mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面5条/cmの右下がりのハケ • 外面下半タテハケ、内面下半ヨコヘラミガキ 			淡赤褐色	結晶片岩 微量の石英 金雲母片	土坑13	
広長頸壺	1/36	口径	26.4		<ul style="list-style-type: none"> • 頸部直立 • 口縁部大きく外反 • 端部上下が窪み、やや角ばる • 竹管文を配す • 頸部外面3mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面右下がりのハケ • 口縁部外面鋸歯文状のヘラミガキ • 内面ヨコヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部か? 	淡灰褐色	砂岩 石英、長石、 微量の黒色 鉱物、金雲 母片	溝1 4 A 6 グリ ッド		
広長頸壺	2/36	口径	17.5		<ul style="list-style-type: none"> • 頸部直立 • 口縁部緩やかに外反 • 端部はやや角ばっておさめ1条の擬凹線を施す • 頸部口縁部外面2mm幅単位のタテヘラミガキ 			赤褐色	砂岩 石英、微量 の赤色斑粒 金雲母片	溝1 4 A 6 グリ ッド	頸部外面黒斑
広長頸壺	3/36	口径	15.0		<ul style="list-style-type: none"> • 頸部直立 • 口縁部ゆるやかに外反 • 頸部僅かに上下に拡張 • 1条の凹線を施す • 頸部外面4mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面粗いナナメヘラケズリ 			灰褐色	砂岩 石英、長石、 赤色斑粒、 金雲母片	溝1 4 B 6 グリ ッド	

広 長 口 頸 壺	4 / 36	口 徑 16.0	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面ナデ 頸部直立 口縁部緩やかに外反 端部を角張っておさめる 頸部外面12条/cmのタテハケ 頸部内面ユビオサエのち粗いヨコハケ 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部外面ヨコハケののち2mm幅単位の入念なタテハラミガキ 内面ユビオサエののちヨコハケズリ 	淡褐色 (外) 黒灰色 (内)	砂岩 石英、長石、 赤色斑粒、 微量の金雲 母片	溝1 4B6グリ ッド	口縁部内面黒斑
広 長 口 頸 壺	5 / 36	器 高 25.7 口 徑 15.6 体部 最大 徑 20.0 底 徑 5.6	<ul style="list-style-type: none"> 頸部から口縁部にかけて緩やかに外反 口縁部僅かにつまみ上げて尖り気味におさめる 頸部外面水平タタキののち8条/cmのタタキを消すタテハケ、タテハケの上3mm幅単位のタテハラミガキ 口縁部との境にタテハケを残す 頸部内面タテハラミガキ、粘土紐痕 口縁部外面右上がりのタタキのちタテハラミガキ 内面左下がりのハラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部 体部中に最大徑 突出しない平底 体部外面3条/cmの水平タタキのちタテハケ タテハケののち中位に向って上からのタテハラミガキ 頸部体部境2mm幅単位の入念なヨコハラミガキ 体部内面上半ユビオサエののち粗いタテハラケズリ、下半下から上へのタテハラケズリ 粘土紐痕 外面ナデ 	明褐色	結晶片岩 石英、長石、 金雲母、赤 色斑粒 精選されて いる	溝1 4B6グリ ッド	体部上半記号文 体部外面下半黒 斑
広 長 口 頸 壺	6 / 36	体部 最大 徑 22.4 底 徑 5.2	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部 体部中位よりやや上部に最大徑 体部外面上半2mm幅単位の入念なタテハラミガキ 中位12条/cmの右下がりのヨコハケ痕 下半タテハラミガキ痕 体部内面上半ユビオサエ、粘土紐痕 	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部 体部中位よりやや上部に最大徑 体部外面上半2mm幅単位の入念なタテハラミガキ 中位12条/cmの右下がりのヨコハケ痕 下半タテハラミガキ痕 体部内面上半ユビオサエ、粘土紐痕 	淡褐色 (外) 淡灰黒色 (内)	結晶片岩 石英大粒、 赤色斑粒、 長石、金雲 母	溝1 4A6グリ ッド	体部外面上半絵 画文 体部外面下半黒 斑 体部外面中位に 煤の付着

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
広長頸壺	7/36	口径 17.9 体部最大径 20.1	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部僅かに外方に立ち上がる • 口縁部緩やかに外反 • 端部僅かに拡張して角張っておりさめる • 頸部外面8条/cmのタテハケのうち3mm幅単位のハケを消すタテヘラミミガキ • 内面10条/cmのヨコハケ痕 • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部 • 体部中位に最大径 • 外面上半2mm幅単位の右下がりのヘラミミガキ, 中位下半タテヘラミミガキ • 頸部との境ナデ • 内面上半ナデ, 粘土紐痕 • 下半タテヘラケズリ 	淡褐色	結晶片岩 石英, 金雲母	溝1 4I8グリ ッド	口縁部内面絵文 体部頸部外面煤の付着
広長頸壺	8/36	器高 33.3 口径 19.5 体部最大径 25.5 底径 4.6	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部外上方に立ち上がる筒状 • 口縁部緩やかに外反する • 端部は僅かに外下方につまみ出し, 方形状断面を呈す • 竹管文を巡らせる • 頸部体部境に幅8mmの刻み目突帯の貼り付け • 頸部内外面2mm幅単位の入念なタテヘラミミガキ • 内面粘土紐痕 • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 扁平な球形の体部 • 中位に最大径 • 突出しない平底 • 体部外面2条/cmの右上がりのタタキののち5条/cmのタテハケ • タテハケののち, 体部中位方向への上・下の粗いタテヘラミミガキ, 下半底部境ヨコハケ, 内面頸部境ヨコヘラミミガキ • 上半左方向へのヨコヘラケズリ • 下半タテヘラケズリ • 内底面ナナメヘラミミガキ • 外底面ナデ 	明茶褐色	微量の結晶片岩 石英, 金雲母片 精選されている	溝1 4F7グリ ッド	外底面体部下 黒斑
広長頸壺	9/37			<ul style="list-style-type: none"> • 外面3mm幅単位のタテヘラミミガキ • 内面ユビオサエ, 粘土紐痕 	淡赤褐色	石英	溝1 4J9グリ ッド	肩部推定部分に 記号文

広口壺	10/37	15.1	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部短かく直立 • 口縁部ほぼ水平に外反 • 端部上下に拡張し2条の擬凹線をとどめる • 頸部外面8条/cmのタテハケのうち1mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面2mm幅単位の入念なタテヘラミガキ • 口縁部外面ナデ • 内面6条/cmのヨコハケののち線状のタテヘラミガキを配す 	<ul style="list-style-type: none"> • 球形の体部か? • 外面7条/cmの右下がりのヨコハケのうち4mm幅単位のハケを消す入念なタテヘラミガキ • 内面ユビオサエ 	淡褐色	砂岩 石英,長石, 金雲母片, 精選されて いる	溝1 4H8グリ ッド	ヘラミガキによる 器壁の光沢
広口壺	11/37	16.7	<ul style="list-style-type: none"> • 大きく外反 • 端部に断面三角形の粘土紐を貼り付ける垂下口縁 • ヘラ描洗線による鋸歯文を配す • 口縁部頸部境7条/cmのタテハケ • 口縁部内外面ナデ • 頸部内面7条/cmのヨコハケ 		淡灰褐色	結晶片岩 石英,微量 の赤色斑粒 金雲母片	溝1 4J9グリ ッド	口縁部内面黒斑
長頸壺	12/37	高 6.5 口径 2.9 体部最大径 3.4 底径 1.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に立ち上がる • 端部尖り気味におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 中位がやや張り出した体部 • 突出した底部,あげ底 • 外面タテハケ • 内面ユビオサエ • 底部ユビオサエ 	淡灰褐色	結晶片岩 石英,長石, 黒色鉱物, 微量の金雲 母片	溝1 4H8グリ ッド	ミニチュア土器
細頸壺	13/37	口径 5.7 頸部径 3.0	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に拡がる • 端部を丸くおさめる • 外面2mm幅のタテヘラミガキ • 内面ナデ,上部粗いタテヘラケズリ 		淡褐色	結晶片岩 微量の金雲 母,石英, 赤色斑粒	溝1 4A6グリ ッド	

器種	番号/権図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
細頸壺	14/37	口径 7.7 頸部高 14.7 頸部径 4.2	<ul style="list-style-type: none"> • 頸部直立 • 口縁部内彎気味に外反する • 端部尖り気味におさめる • 頸部外面 2mm 単位の入念なタテハラミガキ • 頸部内面上 半タテハラミガキ, 下半ナデ, 粘土紐痕 • 口縁部外面細かいタテハラミガキ 		明褐色	結晶片岩, 石英, 長石, 金雲母片	溝1 4J9グリ ッド	
細頸壺	15/37	口径 10.1 頸部高 14.8 頸部径 5.4	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに上方に拡がる • 端部尖り気味におさめる • 3条の凹線 • 頸部外面 1mm 幅単位の細かいタテハラミガキ • 内面ユビオサエのちナデ, 粘土紐痕 • 口縁部内面入念なヨコハラミガキ 		明褐色	微量の結晶片岩, 長石, 石英, 黒色鉱物, 金雲母片	溝1 4J9グリ ッド	
細頸壺	16/37	口径 9.5 頸部高 15.1 頸部径 4.7	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに拡がる • 端部尖り気味におさめる • 頸部外面タテハラミガキ • 内面ユビオサエのちナデ 		淡赤褐色	砂岩, 石英, 赤色斑粒, 黒色鉱物, 金雲母	溝1 4I8グリ ッド	
細頸壺	17/37	体部最大径 12.9 底径 3.8	<ul style="list-style-type: none"> • 直立する頸部か? • 外面 11条/cm のタテハケ • 内面ナデ, 粘土紐痕 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中に最大径 • 突出しない平底 • 体部外面右上がりのタタキのちタテハケ • 体部中にかけて上・下からの3mm幅のタテハラミガキ • 内面 中位 9条/cm のヨコハケのうち 3mm 原体幅のナナメハラケズリ • 下半 7mm 原体幅の入念なタテハラケズリ • 外底面ナデ 	明灰褐色 (外) 黒灰色 (内)	結晶片岩, 石英, 金雲母片, 黒色鉱物, 精選されている	溝1 4C6グリ ッド	

細頸壺	18/37	体部最大径 16.4 口径 5.9	<ul style="list-style-type: none"> ● 扁平な球形の体部 ● 突出しない平底 ● 体部外面 3mm 幅単位の入念なヨコハラミミガキ ● 内面ユビオサエのちヨコハラケズリ ● 下半に一部ヨコハラミミガキ痕 ● 外底面ヘラケズリ 	<p>灰茶褐色</p> <p>黒色鉱物、黒雲母、金雲母、石英、長石精選されている</p> <p>溝 1 4 J 10 グリッド</p> <p>体部外面中位黒斑</p>
無頸壺	19/37	器高 17.1 口径 9.3 体部最大径 13.8 口径 4.9	<ul style="list-style-type: none"> ● 口縁部を僅かにつまみ出して尖り気味におさめる ● 内外面ユビオサエ 	<p>淡褐色(外) 黒灰色(内)</p> <p>結晶片岩、石英、微量の金雲母片</p> <p>溝 1 4 B 6 グリッド</p> <p>外底面体部下半黒斑 体部外面下半煤の付着</p>
広長頸壺	20/37	体部最大径 30.4 口径 6.5		<p>明褐色(外) 明黒灰色(内)</p> <p>結晶片岩、石英、長石</p> <p>溝 1 4 C 6 グリッド</p> <p>体部外面下半黒斑</p>
甕 A ₂	21/37	器高 21.9 口径 12.1 体部最大径 13.9 口径 4.0	<ul style="list-style-type: none"> ● 緩やかに外反 ● 端部尖り気味におさめる ● 口縁部タタキ出し ● タタキのち 6 条/cm のタテハケ ● 端部内外面ユビオサエ ● 口縁部内面粗いヨコハラケ 	<p>淡褐色</p> <p>結晶片岩、石英、赤色斑粒、微量の金雲母片</p> <p>溝 1 4 B 6 グリッド</p> <p>体部外面口縁部境まで黒斑 体部外面中位まで煤の付着 内面中位下半焦げ付き痕</p>

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕 A ₁	22/37	器高 20.4 口径 14.9 体部最大径 17.0 底径 3.9	<ul style="list-style-type: none"> 大きく外反 端部やや内彎気味に丸くおさめる 端部貼り付け 外面ナデ 内面 7条/cmのヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中に最大径 突出しない平底、僅かにあげ底 体部外面上半 4条/cmの水平タタキ、下半右下がりのタタキ タタキのちタテ方向の板ナデ 内面上部左方向へのヨコハケズリ 中位下半下から上へのタテヘラケズリ 外底面 8mm原体幅のヘラケズリ 	灰褐色	結晶片岩 赤色斑粒、 微量の金雲 母、石英	溝1 4C6グリ ッド	体部外面口縁部 まで煤の付着 内面中位に魚け 付き痕
甕 A ₁	23/37	器高 15.5 口径 11.2 体部最大径 13.0 底径 2.9	<ul style="list-style-type: none"> 外反 端部を丸くおさめる 口縁部外面体部境ヨコハケズリ 口縁部内面左方向へのヨコハケケズリ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中位より上半に最大径 体部外面上半 4条/cmの右上がりのタタキ、下半右下がりのタタキ タタキのちタテ方向の板ナデ 内面下から上へのヘラケズリ 突出しない平底であげ底 	暗灰褐色	結晶片岩 赤色斑粒、 石英	溝1 4C6グリ ッド	体部外面下半煤 の付着
甕 A ₁	24/38	器高 24.8 口径 15.8 体部最大径 19.9 底径 4.3	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部を方形状におさめ上部に平坦面を形成 口縁部タタキ出し 外面ナデ、内面 7条/cmのヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中位より上半に最大径 体部外面上半 3条/cmのやや右下がりのタタキ 下半右下がりのタタキ 下半タタキのち 11条/cmのタテハケ 内面口縁部境からタテヘラケズリ 突出しない平底であげ底 外底面ナデ 	暗灰褐色	結晶片岩大 粒 石英、長石、 微量の赤色 斑粒、金雲 母片	溝1 4B6グリ ッド	体部外面黒斑
甕 A ₁	25/38	器高 22.2 口径 14.9 体部最大径 22.2	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部を方形状におさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中に最大径 体部外面上半 3条/cmの右上がりのタタキ 	淡茶褐色	微量の結晶 片岩 長石	溝1 4J9グリ ッド	体部外面下半煤 の付着

	底径 5.7			精選されている			
夔 A ₁	26/38 体部最大径 20.9 底径 6.5		<ul style="list-style-type: none"> • 下半水平タタキ • タタキのち上半と下半に6条/cmのタテハケ • 内面上半, 下半, ヨコ, ナナメハケ • 中位ナデ • 平底, 外底面へラケズリ 	淡赤褐色	砂岩 石英, 長石, 金雲母片	溝1 4 J 9 グリ ッド	体部外面下半黒斑
夔 A ₁	口径 16.5 体部最大径 19.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外反 • 端部は尖り気味に丸くおさめる • 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位に最大径 • 体部外面3条/cmの右上がりのタタキのち12条/cmの細いタテハケ • 内面ユビオサエのち上半ヨコへラケズリ, 下半タテへラケズリ • 外底面ナデ 	灰褐色	結晶片岩 石英, 長石, 赤色斑粒	溝1 4 J 9 グリ ッド	体部外面上半黒斑
夔 A ₂	口径 14.8 体部最大径 18.8	<ul style="list-style-type: none"> • 外反 • 口縁端部形状におさめる • 外面ナデ • 内面8条/cmのヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位に最大径をもつがあまり張り出さない • 体部外面右上がりのタタキのち8条/cmの右下がりタテハケ • 内面9mm原体幅の左上がりのへラケズリ 	淡茶褐色	微量の結晶 片岩 赤色斑粒, 金雲母片, 石英	溝1 4 B 6 グリ ッド	体部外面煤の付着

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕 A ₁	29/38	口径 14.2 体部最大径 20.2	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部やや丸みをもっておさめる 口縁部タタキ出し 外面ナデ、内面8条/cmのヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部上半に最大径 外面3条/cmのやや右下がりのタタキ 10条/cmの細いたテハケ 内面口縁部体部境細かいユビオサエ 上部ヨコハラケズリ、中位下半下から上へのタテハラケズリ 	赤褐色	結晶片岩 赤色斑粒、石英、長石	溝1 4 B 6 グリ ッド	体部外面煤の付着
甕 A ₂	30/38	体部最大径 15.3 口径 5.1		<ul style="list-style-type: none"> 体部上半に最大径 突出しない平底 体部外面11条/cmの細かいタテハケ 内面1.2cm原体幅のタテハラケズリ 外底面2mm幅単位のハラミガキ 	淡褐色	砂岩 赤色斑粒、石英、黒色鉱物、微量の金雲母片精選されている	溝1 4 I 8 グリ ッド	
甕 A ₂	31/39	器高 24.6 口径 13.1 体部最大径 17.4 口径 5.6	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部形状におさめる 口縁部内外面ヨコハケの痕跡 	<ul style="list-style-type: none"> 体部上半に最大径 突出しない平底 体部外面4条/cmの右上がりのタタキのち中位7条/cmの右下がり、左下がりの粗いたテハケ、部分的なタテハラミガキ、上半7条/cmのタテハケ 体部内面上半ナナメハラケズリ 下半タテハラケズリ 外底面ナデ 	明褐色	結晶片岩 石英、長石、赤色斑粒、金雲母片	溝1 4 F 7 グリ ッド	外底面体部外面 下半黒斑
甕 A ₂	32/39	器高 27.8 口径 15.5 体部最大径 19.2 口径 5.1	<ul style="list-style-type: none"> 大きく外反 口縁端部やや内彎気味におさめ 下端を僅かにつまみ出す 2条の擬凹線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部上半に最大径 突出しない平底 体部外面7条/cmのタテ・ナナメハケのち3mm幅単位のタテハラミガキ 	淡褐色	微量の結晶片岩 赤色斑粒、石英、黒色鉱物	溝1 4 B 6 グリ ッド	外底面、体部外面 下半黒斑

甕 A ₂	33/39	器高 24.9 口径 15.2 体部最大径 18.9 底径 4.9	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁端部を僅かにつまみ上げ方形状断面を呈す 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内面上半ナデ, 下半タテハラケズリ 外底面ナデ 体部上半に最大径 突出しない平底 体部外面5条/cmの右下がりの細いタキののち上半タテハラミガキ, 下半4~5条/cmのタテハケ 内面口縁部境ユビオサエ, 上半ナナメハラケズリ, 下半下から上へのタテハラケズリ 外底面ナデ 	淡灰褐色	結晶片岩 黒雲母, 石英, 赤色斑粒, 微量の金雲母	溝1 4B6グリ ッド	体部外面下半黒斑
甕 A ₂	34/39	器高 28.9 口径 17.9 体部最大径 24.6 底径 5.1	<ul style="list-style-type: none"> 鋭く外反 口縁端部形状におさめる 外面タテハラケ, 内面ヨコハラケの痕跡 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中に最大径をもち張り出す 僅かに突出した平底 体部外面上半3条/cmの右上がりのタキ, 下半右下がりのタキ 上半8条/cmのタテハラケ, 中位下半10条/cmのナナメ・タテハラケ 内面上半ヨコハラケズリ, 粘土紐痕 下半タテハラケズリ 外底面ナデ 	赤褐色 (外) 灰黒色 (内)	黒色鉱物, 黒金雲母, 黒雲母, 赤色斑粒, 長石, 石英	溝1 4B6グリ ッド	体部外面下半黒斑 体部外面中位煤の付着 内面焦げ付き痕
甕 A ₂	35/39	器高 28.3 口径 14.9 体部最大径 20.8 底径 5.1	<ul style="list-style-type: none"> 短かく外反 口縁端部形状におさめ, 下端を僅かにつまみ出す 口縁部内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中位上半に最大径 突出しない平底 体部外面上半3条/cmの右下がりのタキ, 下半右上がりのタキののち8条/cmのタテハラケ 	暗褐色	砂岩 石英, 黒色鉱物, 長石, 微量の金雲母	溝1 4B6グリ ッド	体部外面下半煤の付着

器種	番号/補図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕 A ₃	36/39	器高 19.5 口径 19.2 体部最大径 20.2 底径 5.1	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外反 • 口縁端部内彎気味につまみ上げ • 口縁部タタキ出し • 内面10条/cmのヨコハケ • 端部内面に1条の弱い沈線 	<ul style="list-style-type: none"> • 内面口縁部境ナナメハケ、粘土紐痕 • 上半ヨコ、ナナメハラケズリ、下半タテハラケズリ • 外底面ハケ • 体部上位に最大径 • 突出しない平底 • 体部外面上半2条/cmの水平タタキ、下半右下がりのタタキ • 体部外面下半9条/cmのタテハケ • 内面上半ナナメハラケズリ、下半タテハラケズリ • 口縁部境にナナメハケをとどめる • 外底面ナデか? 	暗灰褐色	結晶片岩 赤色斑粒, 石英, 黒色 鉱物, 微量 の金雲母	溝1 4B6グリ ッド	乾燥段階での収縮によると思われる器壁の亀裂 体部外面中に煤の付着
甕 A ₂	37/40	器高 32.0 口径 15.3 体部最大径 23.9 底径 4.7	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外反 • 口縁端部はやや内彎気味に僅かにつまみ上げる • 方形断面 • 2条の弱い擬凹線 • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中に最大径 • 突出しない平底 • 体部外面上半4条/cmの右下がりの細いタタキ、外面下半右上がりのタタキ • 8条/cmのタテハケ、中位上部タテハケのちヨコハケ • 内面ユビオサエのちタテハラケズリ • 外底面ハケ 	淡灰褐色	結晶片岩 石英, 長石, 微量の金雲 母片, 赤色 斑粒 精選されて いる	溝1 4B6グリ ッド	体部外面中位黒斑, 中位下半煤の付着 内面下半焦げ付き痕
甕 A ₂	38/40	器高 30.5 口径 18.0 体部最大径 25.6 底径 5.7	<ul style="list-style-type: none"> • 緩やかに外反 • 口縁端部僅かに屈曲してつまみ出す • 端部及び上端面に1条の擬凹線 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位上半に最大径をもち張り出す • 突出しない平底 • 体部外面3mm幅単位のタテハラ 	明褐色	砂岩 微量の石英 長石, 金雲 母, 赤色斑	溝1 4B6グリ ッド	体部外面下半煤の付着 内面下半焦げ付き痕

夔B	39/40	口径 14.7 体部最大径 19.6	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ナデ 外反 口縁端部外下方に拡張 1条の擬凹線 口縁部タタキ出し 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> ミガキ 内面上半ヨコヘラケズリ, 下半タテヘラケズリ 外底面ナデ 球形にちかい体部か? 外面3条/cmの右下がりのタタキ 上半板ナデ 内面上半左方向へのヨコヘラケズリ, 下半上から下へのタテヘラケズリ 	淡赤褐色	砂岩 赤色斑粒, 石英, 金雲母, 微量の 黒色鈹物	溝1 4 I 8 グリ ッド	体部外面中位煤 の付着
夔B	40/40	口径 12.8 体部最大径 20.4	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁端部僅かに上下に拡張 1条の擬凹線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形にちかい体部か? 体部外面2条/cmの右上がりのタタキ, 上半タタキを消すハケあるいは板ナデ 内面板ナデ状のタテ方向のケズリ, 粘土紐痕 	暗茶褐色	石英, 長石, 微量の黒色 鈹物, 金雲母	溝1 4 I 8 グリ ッド	
夔B	41/40	口径 15.6	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部外下方に拡張 1条の凹線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 外面3条/cmの右上がりのタタキのち10条/cmの細かいナナメハケ 内面ナメヘラケズリ 	明灰褐色	砂岩 石英, 長石, 金雲母, 黒 色鈹物	溝1 4 F 7 グリ ッド	
夔C	42/40	口径 14.8 体部最大径 22.7	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部上下に拡張 2条の擬凹線の痕跡 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 肩の張る体部 外面5条/cmのタテハケ 内面タテヘラケズリ 	明灰褐色	砂岩 長石, 石英, 微量の黒雲 母, 金雲母 赤色斑粒	溝1 4 J 10 グリ ッド	
夔B	43/40	口径 14.8	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部内傾して上下に拡張 3条の擬凹線 外面ナデ, 内面ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 外面水平タタキのち8条/cmのナメハケ 内面ユビオサエ 	淡褐色	石英, 長石, 金雲母	溝1 4 J 10 グリ ッド	

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕C	44/40	器高 30.8 口径 15.7 体部最大径 23.8 底径 5.8	<ul style="list-style-type: none"> • 屈曲して外反 • 口縁端部内傾して上下に拡張 • 2条の擬凹線 • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 肩の張る体部 • 突出しない平底 • 体部外面上半9条/cmのタテハケ, 下半3mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面上半ユビオサエ, 中位ヨコヘラケズリ, 下半タテヘラケズリ • 外底面2mm幅単位のヘラミガキ 	淡赤褐色	砂岩 石英, 長石, 黒色鉱物, 微量の金雲母, 赤色斑粒	溝1 4F7グリ ッド	外底面体部外面上半黒斑 体部外面上位下半株の付着 内面下半焦げ付き痕
甕C	45/41	口径 14.8 体部最大径 24.0	<ul style="list-style-type: none"> • 外反 • 口縁端部内傾して上下に拡張 • 口縁部内面ナデによる凹部の形成 	<ul style="list-style-type: none"> • 肩の張る体部 • 体部外面8条/cmのタテハケ, 下半2mm幅単位のタテヘラミガキ • 口縁部体部境ナデ • 口縁部内面体部境ナデ, 上半ユビオサエ, 下半タテヘラケズリ 	暗茶褐色	多量の黒色 鉱物, 黒雲母, 金雲母, 石英, 長石, 緻密で硬質	溝1 4J10グリ ッド	体部外面上位下半株の付着 讀枝系甕
鉢A ₂	46/41	器高 8.1 口径 12.3 底径 3.8	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 端部尖り気味におさめる • 外面ユビオサエ 	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに突出する平底 • 体部外面上位下半3mm幅単位のタテヘラミガキ • 内面上半ヘラケズリののち入念なナデ, 粘土紐痕 • 下半粗いヘラミガキ • 外底面ナデ 	淡赤褐色	微量の結晶 片岩 石英, 長石, 金雲母	溝1 4B6グリ ッド	体部外面黒斑
鉢A ₂	47/41	器高 6.3 口径 11.5 底径 3.7	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに突出する平底 • 体部外面タタキのち上半2mm幅単位のヨコヘラミガキ, 下半タテヘラミガキ • 内面上半ナデ, 下半ヘラケズリ • 外底面ナデ 	淡灰褐色	石英, 黒色 鉱物, 金雲母	溝1 4B6グリ ッド	外底面, 体部外面黒斑

鉢 A ₄	48/41	器高 口径 底径	4.8 15.2 3.9	<ul style="list-style-type: none"> • 端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に広がる • 突出しない平底 • 体部外面 5 条/cm のタテハケ • 内面 1 mm 幅単位のタテハラミガキ • 外底面ナデ 	淡赤褐色	黒色鉱物, 長石, 微量 の金雲母	溝 1 4 A 6 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 A ₃	49/41	器高 口径 底径	6.4 12.5 3.9	<ul style="list-style-type: none"> • 端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に広がる • 突出しない平底 • 体部外面右上がりタテハケのち 10 条/cm のタテハケ • 内面上半 9 条/cm のヨコハケ, 下半粗いタテハラミガキ • 外底面ナデ 	暗灰褐色 (外) 黒灰色 (内)	砂岩 金雲母, 長 石, 石英	溝 1 4 A 6 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 A ₁	50/41	器高 口径 底径	6.9 13.9 3.9	<ul style="list-style-type: none"> • 端部尖り気味におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底 • 体部外面 10 条/cm のタテハケのち下半 2 mm 幅単位の細かいタテハラミガキ • 内面ヨコハケのちタテハラケズリ • 外底面ナデ 	淡灰褐色	結晶片岩 石英, 長石, 金雲母	溝 1 4 J 9 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 A ₁	51/41	器高 口径 底径	7.9 16.5 4.8	<ul style="list-style-type: none"> • 端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 僅かに突出した平底 • 体部外面タテハケのち, タタキを消す 1 mm 幅単位のタテハラミガキ • 内面ヨコハケのちタテハラケズリ • 外底面ナデ 	淡灰褐色	砂岩 石英, 長石, 赤色斑粒, 微量の金雲 母, 黑色鉍 物	溝 1 4 F 7 グリ ッド	体部外面黒斑

器種	番号/挿図	法量 (cm)	口類部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
鉢 A ₁	52/41	器高 8.3 口径 17.2 底径 5.5	• 端部僅かに内傾して丸くおさめる • 口縁端内面に弱い凹部を形成 • 内外面ナデ	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 突出しない平底 体部内外面 3mm 幅単位のタテヘラミガキ 外底面ナデ 	明褐色	黒色鉱物、長石、石英、微量の金雲母	溝 1 4 J 10 グリ ッド	体部内面黒斑 内面全体に朱塗 布の痕跡
鉢 A ₁	53/41	器高 8.1 口径 17.6 底径 4.9	• 端部僅かに内傾して尖り気味におさめる	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 突出しない平底 体部外面上半 6 条/cm のタテハケ、下半 1.1 cm 原体幅のタテハケ、ラケズリ 内面上半ヨコハケのちヨコハケラケズリ、下半タテヘラケズリ 外底面ナデ 	灰褐色	黒色鉱物、長石、石英、微量の金雲母	溝 1 4 J 9 グリ ッド	
鉢 A ₁	54/41	口径 22.6	• 僅かに外反 • 端部を尖り気味におさめる	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 外面 2 条/cm の水平タタキのち中位下半 5 条/cm のタテハケ 内面ナデ 	淡灰褐色	石英、黒色鉱物、微量の金雲母片	溝 1 4 H 8 グリ ッド	
鉢 A ₁	55/41	口径 20.9	• 端部方形状におさめ、上部に平坦面を形成	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 体部外面 8 条/cm の粗いタテハケのち 9 mm 原体幅の粗いハケズリ 内面タテハケのち粗いヨコヘラミガキ 	淡灰褐色	結晶片岩、長石、石英、微量の金雲母	溝 1 4 I 8 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 A ₁	56/41	口径 21.9	• 僅かに外反して尖り気味におさめる	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 体部外面右下がりのタタキのち上位 6 条/cm のヨコハケ、下半 3 mm 幅単位のタテヘラミガキ 内面上位ヨコハケ、下半タテヘラミガキ 	淡褐色	結晶片岩、金雲母、石英、長石、微量の黒色鉱物	溝 1 4 J 9 グリ ッド	体部外面下半黒 斑、朱塗布の痕 跡

鉢 B ₁	57/41	器高 口径 底径	8.3 18.5 4.7	<ul style="list-style-type: none"> • 僅かに外反, 端部方形におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底 • 体部外面タタキのち中位ヨコヘラミガキ及びナデ, 下半タテヘラミガキ • 内面粗いタテヘラミガキ • 外底面ナデ 	淡褐色	結晶片岩大粒 石英, 微量の金雲母	溝1 4 A 6 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 B ₂	58/41	口径	19.9	<ul style="list-style-type: none"> • 外反, 端部方形におさめる • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 外面タテハケのち3mm幅單位の人念なタテヘラミガキ • 内面人念なタテヘラミガキ 	明褐色	結晶片岩 石英, 長石, 金雲母, 微量の黒色鈹物	溝1 4 E 7 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 B ₂	59/41	器高 口径 底径	9.3 25.1 5.4 (復元)	<ul style="list-style-type: none"> • 外反, 端部やや丸みをもっておさめる • 外面ナデ, 内面ナメハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底か? • 体部外面3条/cmのタテにちか右上がりのタタキのち下半タテヘラミガキ • 内面12条/cmの細かいヨコハケのち, 下半人念なヨコヘラケズリ及び一部タテヘラミガキ • 外底面ナデか? 	暗灰褐色	結晶片岩微粒 石英, 長石, 微量の金雲母片, 黒色鈹物 精選されている	溝1 4 I 8 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 B ₂	60/41	器高 口径 底径	9.5 26.7 4.3	<ul style="list-style-type: none"> • 強く外反, やや肥厚して端部丸くおさめる • 内面体部との境に明瞭な稜を形成 • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底 • 体部外面上位ヨコヘラミガキ, 中位下半タテヘラケズリののち粗いタテヘラミガキ • 内面タテハケのちタテヘラミガキ • 外底面ナデ 	明灰褐色	結晶片岩大粒 長石, 石英, 微量の金雲母片	溝1 4 I 8 グリ ッド	体部外面下半及び体部内面全体 黒斑 体部外面下半器壁の亀裂 口縁部内面朱の塗布痕

器種	番号/種図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
鉢 A ₅	61/42	器高 17.0 口径 27.1 底径 6.5	<ul style="list-style-type: none"> • 端部僅かに内傾し，方形状断面上部に平坦面を形成 • 3.2cm幅の片口をもつ • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底 • 体部外面 6条/cmのヨコ及びタテハケ，下半 4mm幅単位の粗いタテヘラミミガキ • 内面上位ヨコヘラケズリ，下半タテヘラケズリ • 外底面ナデ 	淡赤褐色	結晶片岩微粒 微量の長石 黒色鉱物， 金雲母	溝 1 4 F 7 グリ ッド	体部外面黒斑
鉢 B ₃	62/42	器高 17.1 口径 30.5 底径 6.0	<ul style="list-style-type: none"> • 外反，端部方形状におさめる • 口縁部タタキ出し • 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 突出しない平底 • 体部外面 4条/cmの右下がりの細いタタキのうち10条/cmの右下がりのハケ，下半 3mm幅単位のタテヘラミミガキ • 内面ヨコハケのち入念なタテヘラミミガキ • 外底面ナデ 	淡灰褐色	結晶片岩 石英，微量 の長石，金 雲母，赤色 斑粒	溝 1 4 B 6 グリ ッド	体部外面下半， 内面上半黒斑
鉢 C	63/42	器高 15.4 口径 17.1 底径 2.3	<ul style="list-style-type: none"> • 方形状断面，上部に平坦面を形成 • 内面 7条/cmのヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に立ち上がる • 体部外面上半 3条/cmの水平タタキ，下半右下がりのタタキのちタタキを消すナデ，あるいは板ナデ • 内面上半 4mm幅単位の左方向への粗いヘラケズリ，中位右上がりのハケ，下位ナデ • 外底面から 3か所穿孔 	淡灰褐色	結晶片岩 石英，長石， 黒色鉱物， 微量の金雲 母	溝 1 4 B 6 グリ ッド	体部外面黒斑
高杯 A	64/42	口径 15.1	<ul style="list-style-type: none"> • 口縁端部尖り気味におさめる • 外面に 1条の沈線 	<ul style="list-style-type: none"> • 内彎気味に立ち上がる • 外面 2mm幅単位の入念なタテヘラミミガキ • 内面タテハケのち入念なタテ 	淡褐色	石英，黒色 鉱物，微量 の金雲母 精選されて	溝 1 4 F 7 グリ ッド	

高杯 A	65/42	口径 16.4	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部尖り気味におさめる 外面に1条の沈線 	<p>ヘラミガキ</p> <ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 外面上半2mm幅単位, 下半4mm幅単位のタテヘラミガキ 内面4mm幅単位の入念なタテヘラミガキ 脚部挿入付加法 	淡灰褐色	結晶片岩 石英, 長石, 微量の黒色 鉱物, 金雲 母	溝1 4C6グリ ッド	体部外面上半黒 斑
高杯 A	66/42	器高 15.4 口径 19.4 脚径 16.9	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> やや内彎気味に立ち上がる 脚部は緩やかに外下方に拡がる 脚端部方形状 体部外面ヨコヘラケズリ, 内面ナデ一部ヨコハケの痕跡 脚部外面4mm幅単位のタテヘラミガキ 内面下半10条/cmの細かいヨコハケ 4孔施す 脚部挿入付加法 	淡赤褐色	石英, 長石, 黒色鉱物, 金雲母片, 精選されて いる	溝1 4J9グリ ッド	
器台脚部	67/42	脚径 10.5		<ul style="list-style-type: none"> 外下方に拡がる 端部やや丸くおさめる 外面タテハケ, 内面7条/cmのヨコ, ナナメハケ 脚部挿入付加法 	淡褐色	結晶片岩微 粒 金雲母, 石 英, 黒色鉱 物	溝1 4B6グリ ッド	
高杯脚部	68/42	脚径 17.1		<ul style="list-style-type: none"> 屈曲して外下方に拡がる 端部方形状におさめ, 1条の縦凹線を形成 脚柱に3孔を施す 脚柱外面1mm幅単位の入念なタテヘラミガキ, 内面左方向へのヘラケズリ 脚幅外面6条/cmのタテハケ 	淡茶褐色	砂岩 赤色斑粒, 石英, 黒色 鉱物, 金雲 母	溝1 4B6グリ ッド	脚幅外面黒斑

器高	番号/挿図	法量 (cm)	口類部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
高杯脚部	69/42	脚径 18.5		内面ヨコハケ • 脚部挿入付加法 • 緩やかに外下方に拡がる • 脚端部形状におさめ、僅かに上方つまみ出す • 4孔を施す • 外面3mm幅単位のタテヘラミガキ • 脚部挿入付加法か？	淡褐色	結晶片岩 石英, 長石, 赤色斑粒	溝1 4A6グリ ッド	
高杯B	70/42	口径 28.6	• 屈曲して外反 • 口縁端部形状におさめ、僅かに外下方につまみ出す • 1条の擬凹線 • 口縁部外面ナデ, 口縁部内面・体部内外面2mm幅単位の入念なタテヘラミガキ	• 脚部挿入付加法	淡茶褐色	結晶片岩大 粒 長石, 石英, 赤色斑粒 精選されている	溝1 4B6グリ ッド	
高杯B	71/42	器高 18.5 口径 30.7 脚径 18.8	• 屈曲して外反 • 口縁端部丸みをもっておさめる • 口縁部内外面1mm幅単位の入念なタテヘラミガキ	• 体部外面タテハケのちタテヘラミガキ • 体部内面口縁部境にヨコハラミガキ, 下半タテヘラミガキ • 脚部僅かに屈曲して外下方に拡がる • 脚端部形状におさめ、僅かにつまみ出す • 脚部外面3mm幅単位のタテヘラミガキ, 内面8条/cmのヨコハケのち7mm原体幅(6条)の粗いタテハケ • 4孔施す • 脚部挿入付加法	暗灰褐色	結晶片岩 黒色鉱物, 金雲母, 石英	溝1 4I8グリ ッド	
高杯B	72/42	器高 20.3	• 屈曲して外反	• 体部外面タテヘラミガキ, 内面	淡褐色	結晶片岩微	溝1	

				<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部やや外下方につまみ出し、丸みをもっておさめる 口縁部内外面1mm幅単位の波状文的暗文風ヘラミガキ 	<ul style="list-style-type: none"> 13条/cmの細かいヨコハケののち2mm幅単位の放射線状のタテヘラミガキ 脚部屈曲して外下方に広がる 脚端部形状におさめ外上方につまみ出す 外面タテヘラミガキ、内面上半タテヘラミガキ、下半ヨコハケ 4孔施す 脚部挿入付加法 	黒灰色	微量の石英 金雲母、黒色鉱物	4 I 8 グリッド	
鉢	7/25	器高 3.5 口径 3.9 底径 3.0	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部尖り気味におさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 突出した平底であげ底 ユビオサエのちナデ 外底面細かなヘラミガキ 	黒灰色	結晶片岩 石英、金雲母	溝2	ミニチュア土器	
広口壺	1/44	口径 14.7	<ul style="list-style-type: none"> 頸部直立 口縁部水平に外反、端部に1条の縦凹線 口縁部内外面ナデ 頸部外面5条/cmのタテハケ、内面上半ヨコヘラケズリ、下半ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部か? 体部外面タテハケののち3mm幅単位の粗いヘラミガキ、内面右下がりのハケ 	赤褐色	砂岩 黒色鉱物、金雲母、石英	溝3		
鉢	2/44	器高 4.8 口径 7.2	<ul style="list-style-type: none"> 口縁端部尖り気味におさめる 	<ul style="list-style-type: none"> 内彎気味に立ち上がる 丸底 体部外面右上がりのタタキのちナデ 内面ヘラケズリ 外底面ナデ 	淡灰褐色	石英、長石、微量の金雲母片	溝3		
鉢	3/44	口径 7.3 体部最大径 8.2	<ul style="list-style-type: none"> 緩やかに外反 口縁端部丸みをもっておさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部 体部中位に最大径 丸底か? 体部外面3条/cmの水平タタキののち部分的にタテハケ 	暗赤褐色	砂岩 黒色鉱物、石英、赤色斑粒、金雲母	溝3		

器種	番号/押図	法量 (cm)	口頸部	体底部	色調	胎土	出土遺構	備考
甕	4/44	器高 10.5 口径 8.9 体部最大径 11.8 底径 1.4	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部僅かに内彎気味につまみ上げる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 内面粗いヘラケズリ 球形の体部 体部中に最大径 僅かに突出した小さな平底 体部外面 3条/cmの水平タタキ 上半タタキを消すナデ, 下半入念なタテヘラミガキ 口縁部との境細かいタテハケの痕跡 内面上位ヨコヘラケズリ, 中位下半15条/cmの細かいナナメ・ヨコハケ 粘土紐痕 外底面ナデ 	淡赤褐色	多量の黒色鉱物, 石英, 長石, 金雲母片	溝3	
甕	5/44	器高 20.1 口径 14.9 体部最大径 18.6 底径 2.8	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部丸くおさめる 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 球形の体部 体部中に最大径 突出しない平底 体部外面 3条/cmの右上がりのタタキのち上半18条/cmのタテハケ, 下半5条/cmのタテハケ 内面口縁部境からタテヘラケズリ 外底面ナデ 	赤褐色	砂岩 黒色鉱物, 石英, 長石, 金雲母	溝3	体部外面下半煤の付着
甕	6/44	器高 24.7 口径 14.6 体部最大径 21.8 底径 2.1	<ul style="list-style-type: none"> 外反 口縁端部内傾して上下に拡張 2条の擬凹線 内外面ナデ 	<ul style="list-style-type: none"> 体部中位上部に最大径 丸底にちかい平底をとどめる 体部外面 9条/cmのタテハケ 内面右方向へのナナメヘラケズリ 外底面ハケ 	赤褐色	結晶片岩 石英, 長石, 微量の金雲母, 黒色鉱物	溝3	体部外面黒斑

11/25	器高 15.2 口径 12.7 体部最大径 14.5 底径 2.6	<ul style="list-style-type: none"> • 外上方に立ち上がる • 口縁端部丸くおさめる • 口縁端内外面ナデ • 外面9条/cmのタテハケ, 内面ヨコハケ 	<ul style="list-style-type: none"> • 体部中位上部に最大径 • 丸底にちかい平底 • 体部外面3条/cmの右下がりのタタキのちタテハケ • 内面タテハケ • 外底面ハケのちナデ 	淡灰褐色	多量の黒色 鉱物, 石英, 長石, 金雲 母片	溝8	体部外面煤の付 着 体部内面下半黒 斑
-------	--	---	---	------	----------------------------------	----	------------------------------

图 版



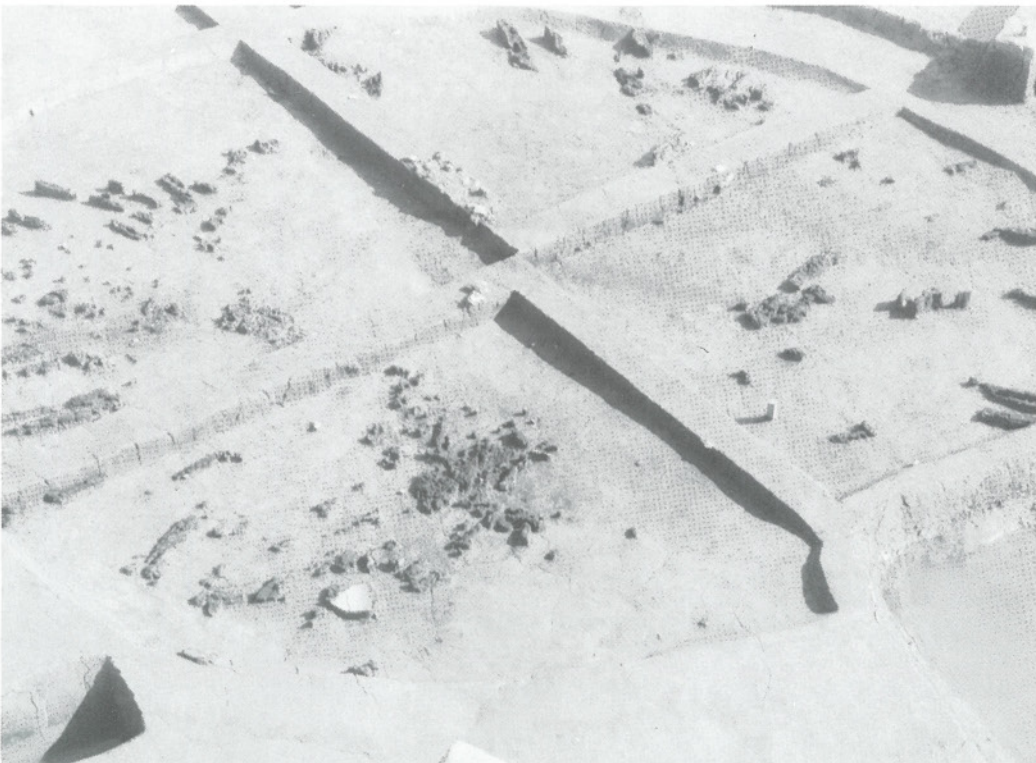
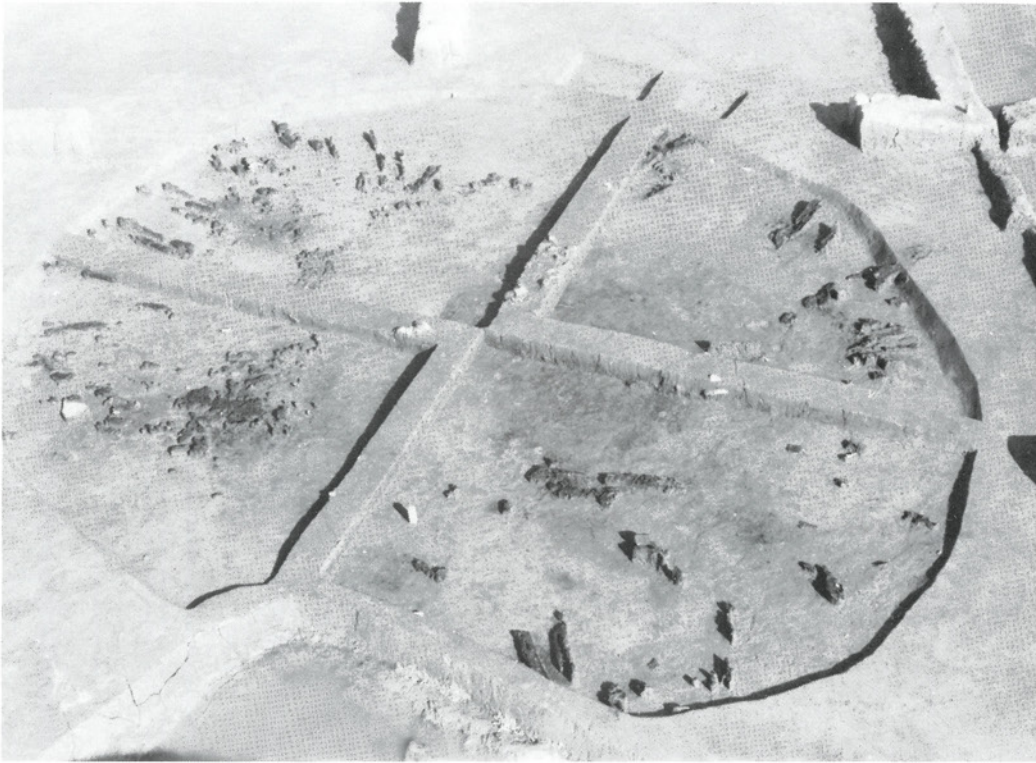
調 査 区 全 景



調査区全景（上・南より，下・北より）



1・7号住居跡全景（上・北より，下・西より）



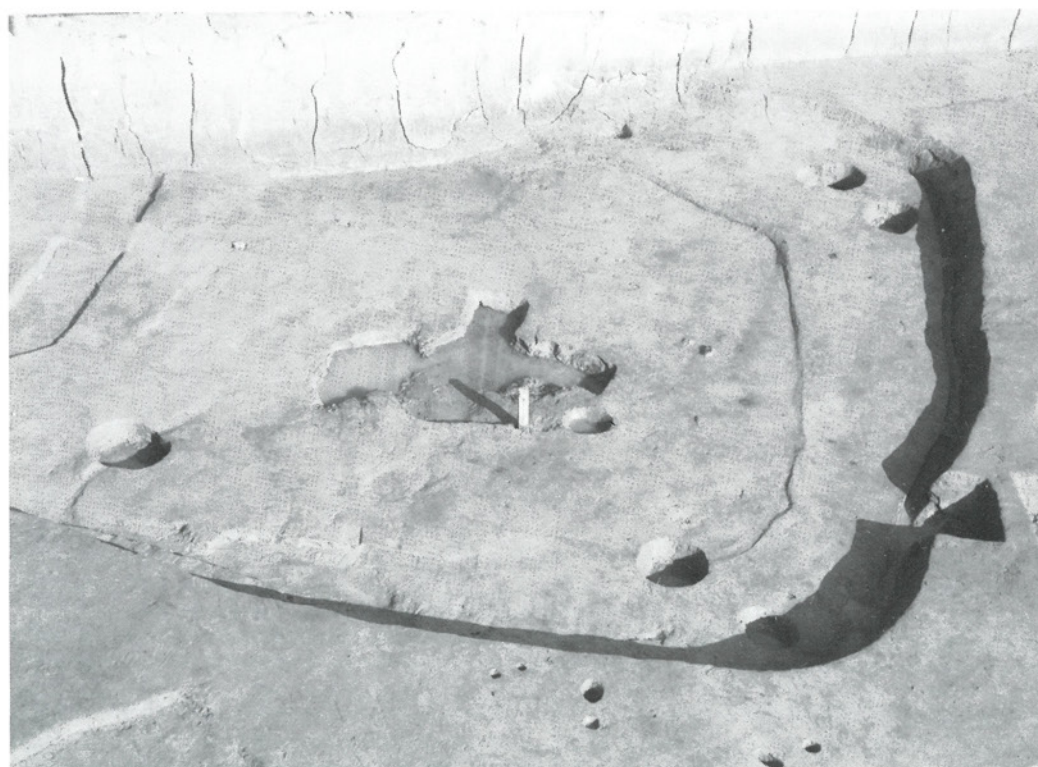
2号住居跡炭化材検出状況（西より）



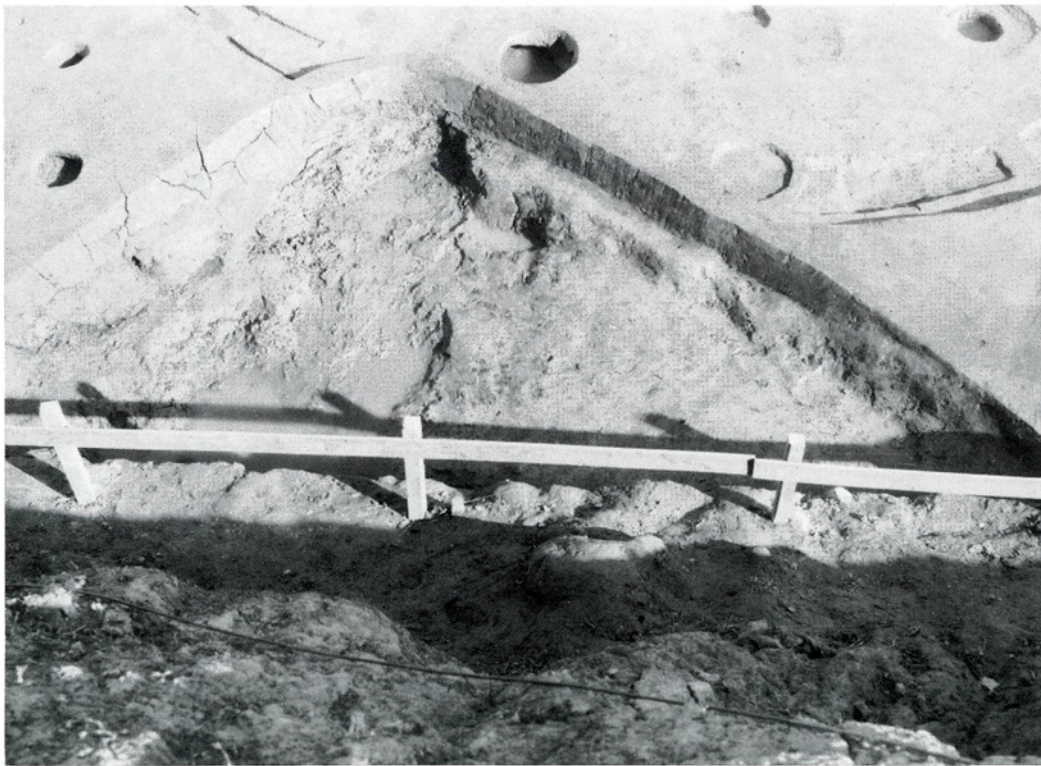
2号住居跡炭化材検出状況



2・6号住居跡全景（西より）



4号住居跡全景（上・西より，下・南より）



3号住居跡全景 (上・北より)
5号住居跡全景 (下・西より)



3号住居跡遺物出土状況



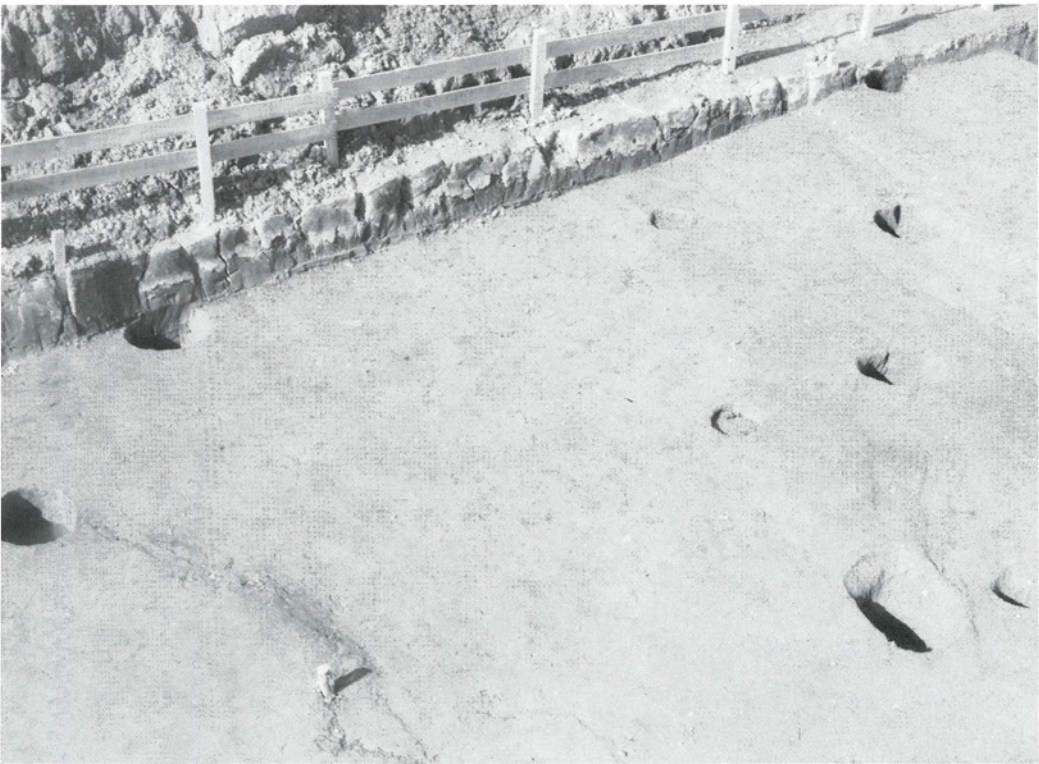
方形周溝墓全景（上・東より，下・西より）



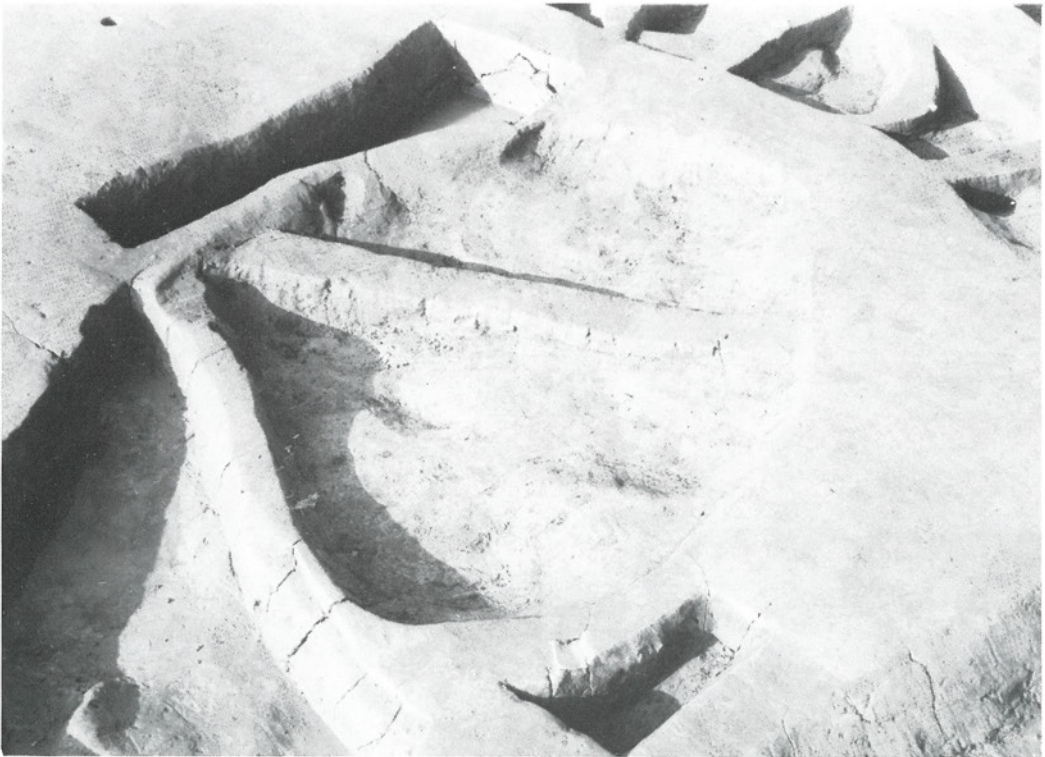
土 塚 17 全 景 (上・東より, 下・北より)



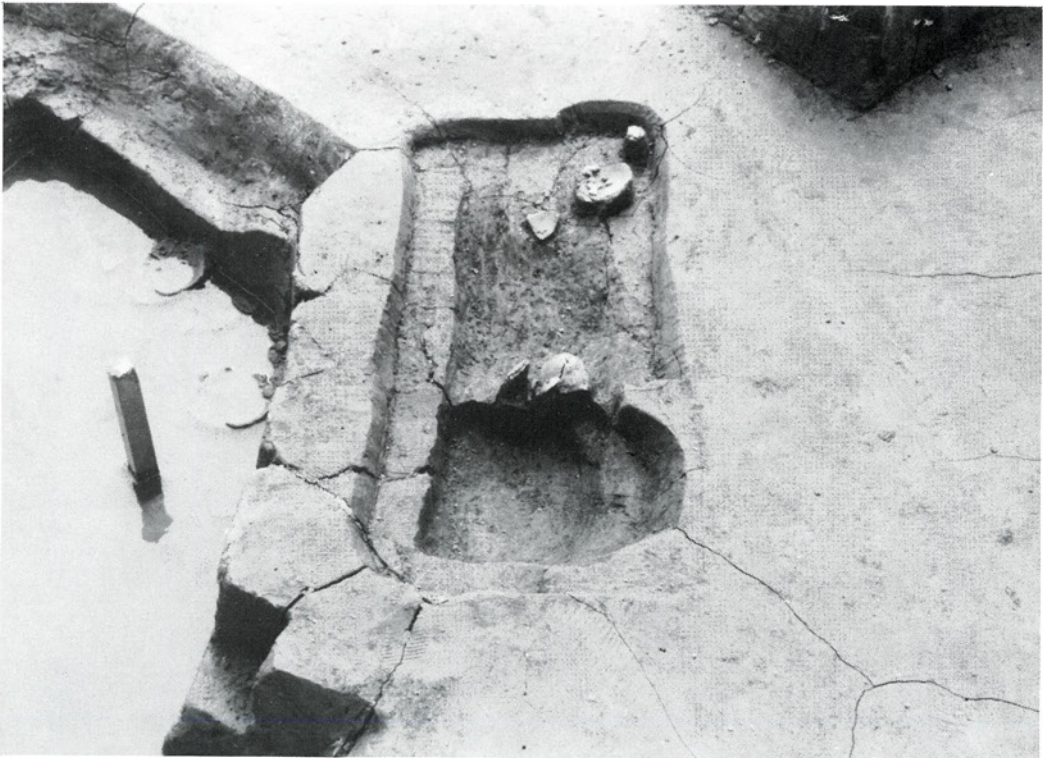
2号墓坑域全景（上・南より，下・北より）



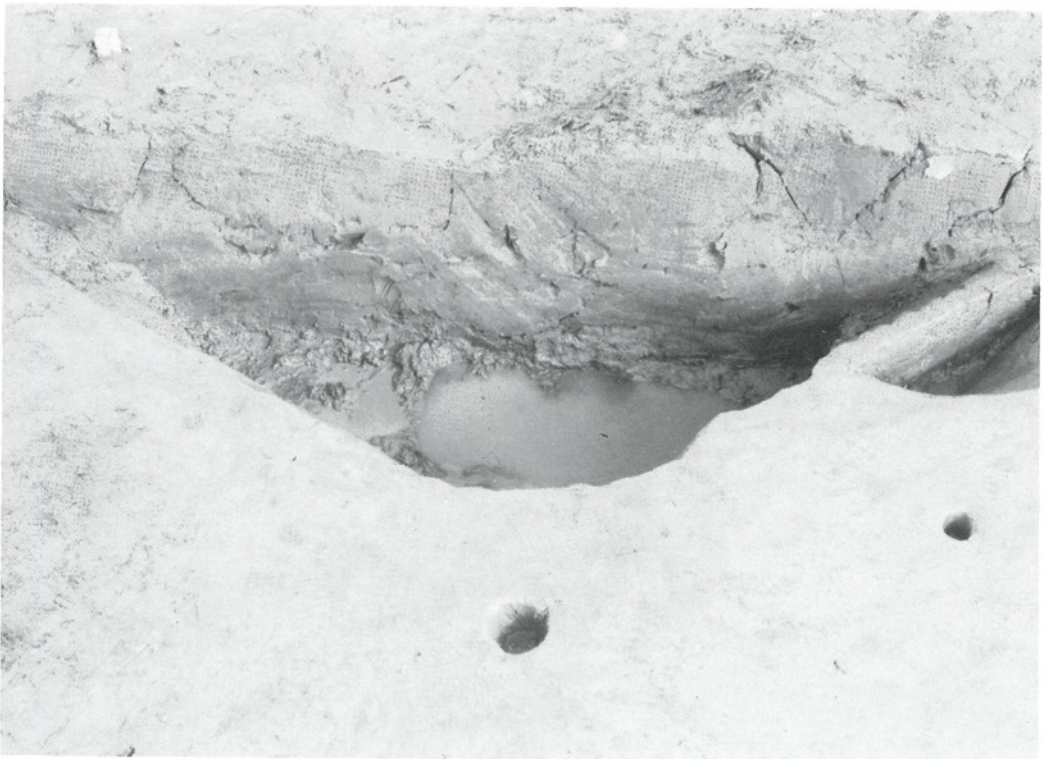
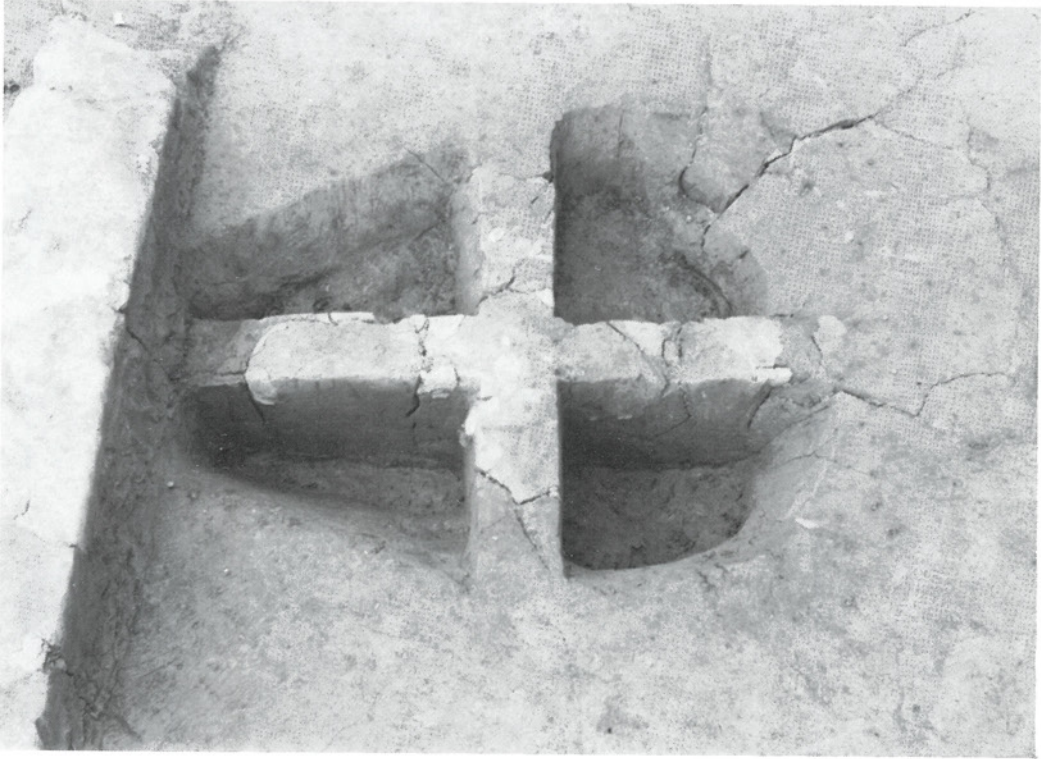
1号建物跡全景（上・東より）
2号建物跡全景（下・東より）



土坑 9 全景 (北より)



土坑 8 全景 (北より)



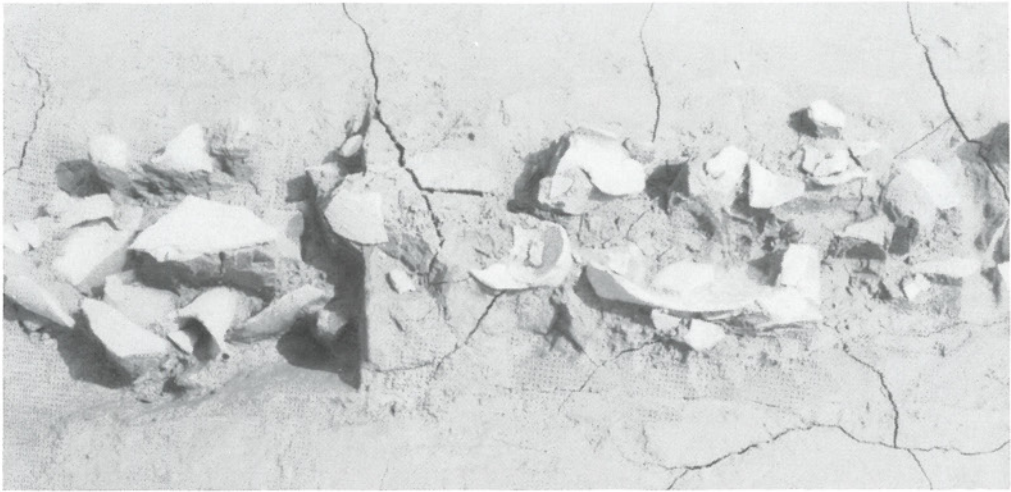
土坑 1 全景 (上・西より)
土坑 13 全景 (下・西より)



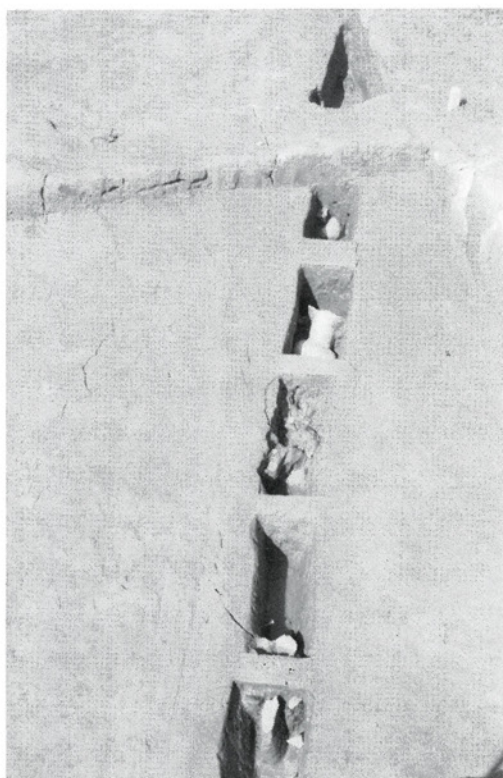
溝1(4H7〜4J10グリッド)全景(右・西より、左・北より)



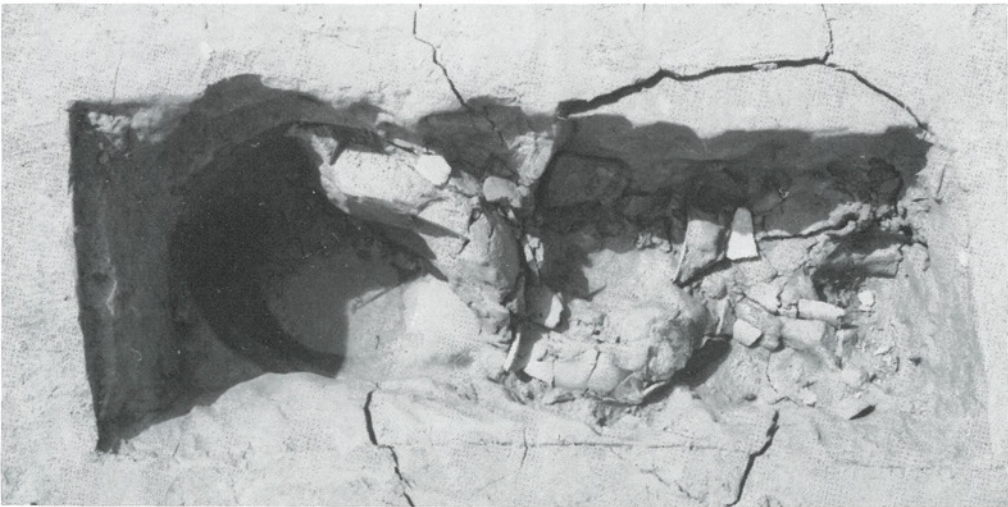
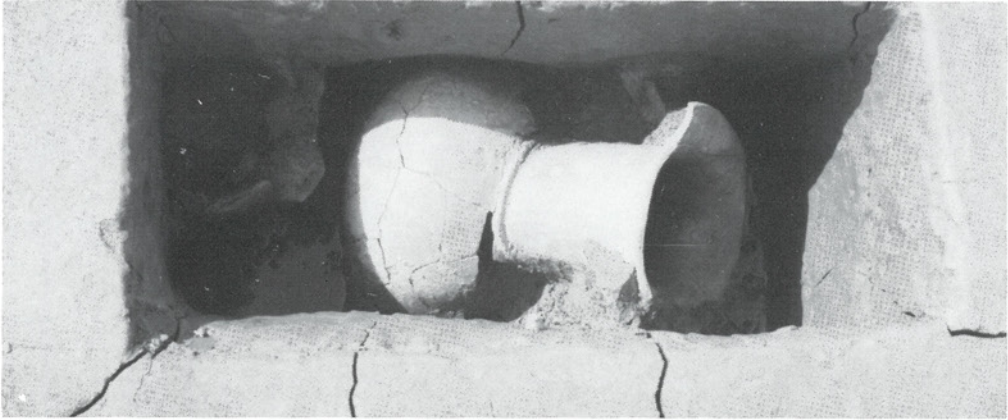
溝 1 土器出土状況



溝 1 土器出土状況



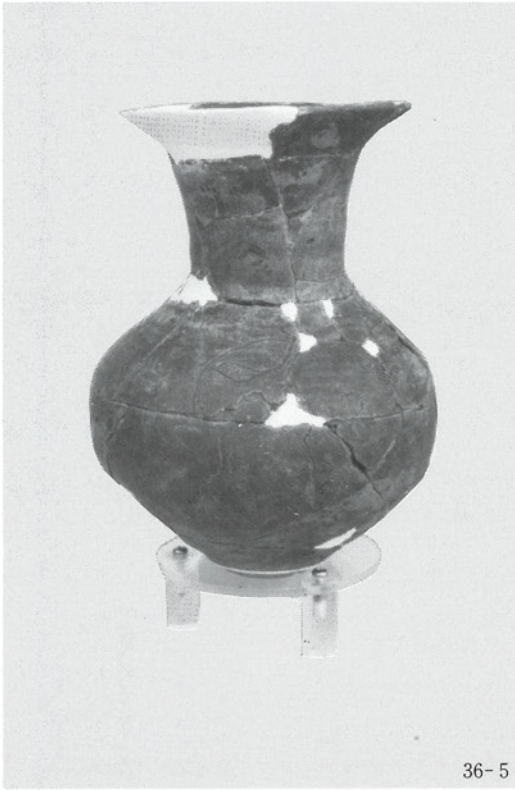
溝 1 土器出土状況



溝 1 土器出土状況



溝3 遺物出土状況 (南より)



36-5



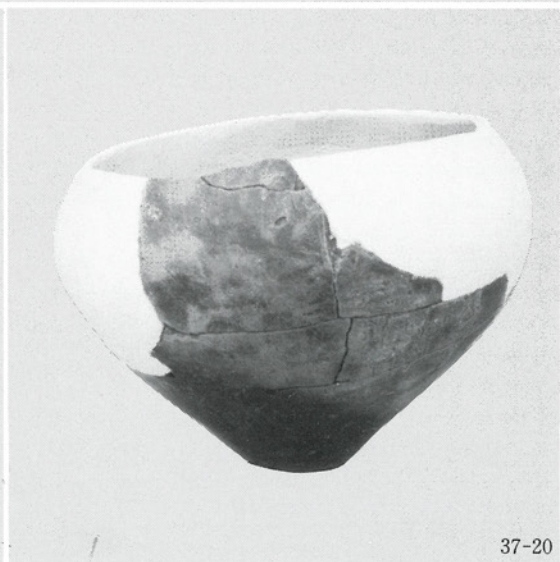
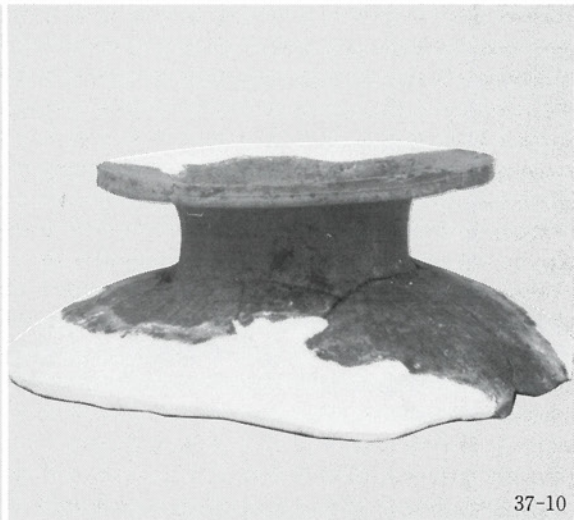
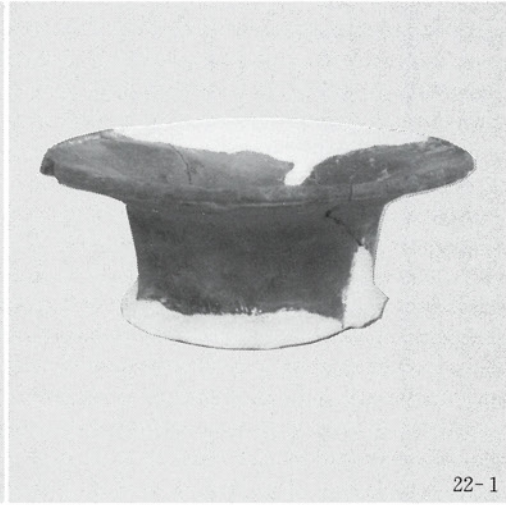
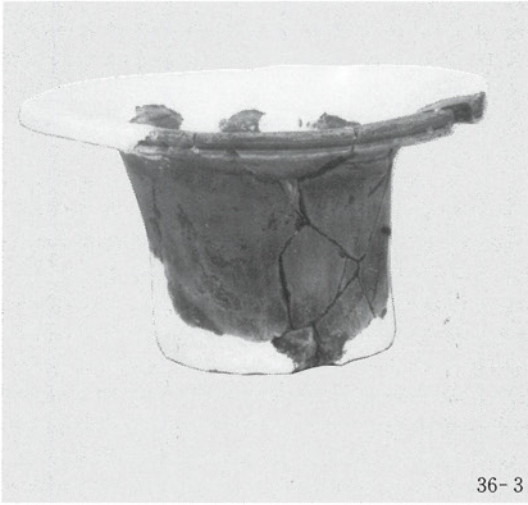
36-8



36-7

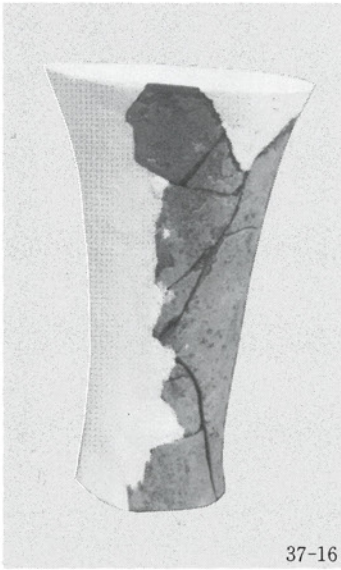


36-6

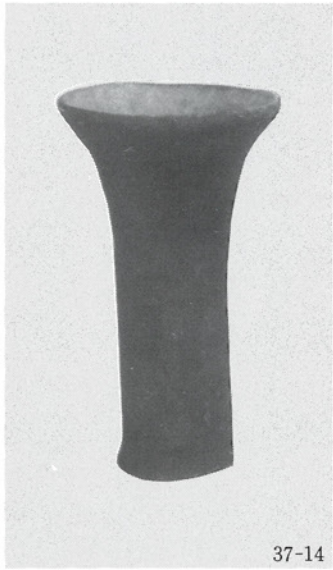




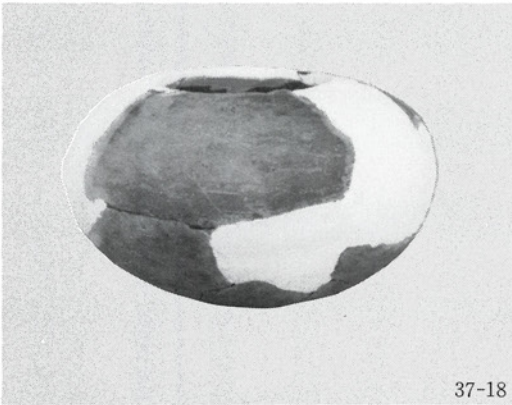
37-15



37-16



37-14



37-18



37-17



22-2

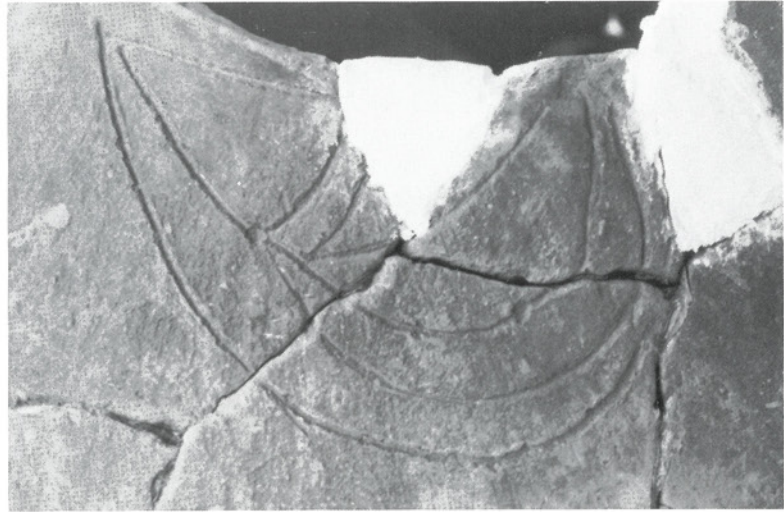


37-19

36-5



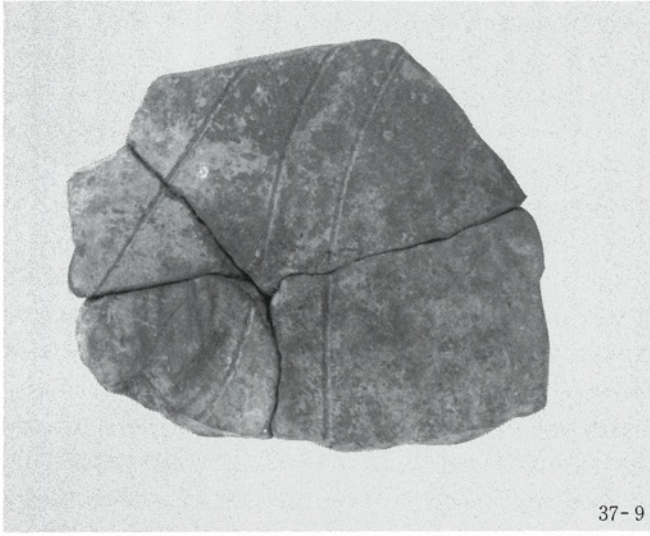
36-6



36-7



出土遺物(4)



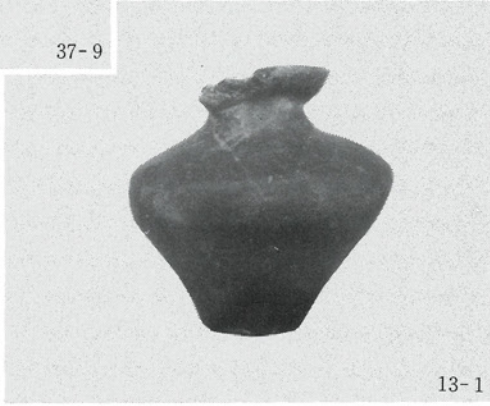
37-9



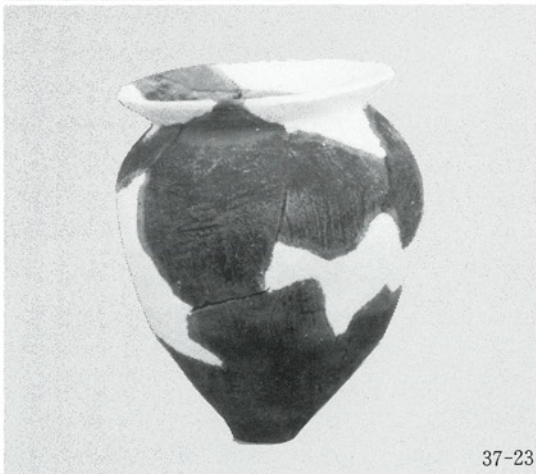
37-12



22-11



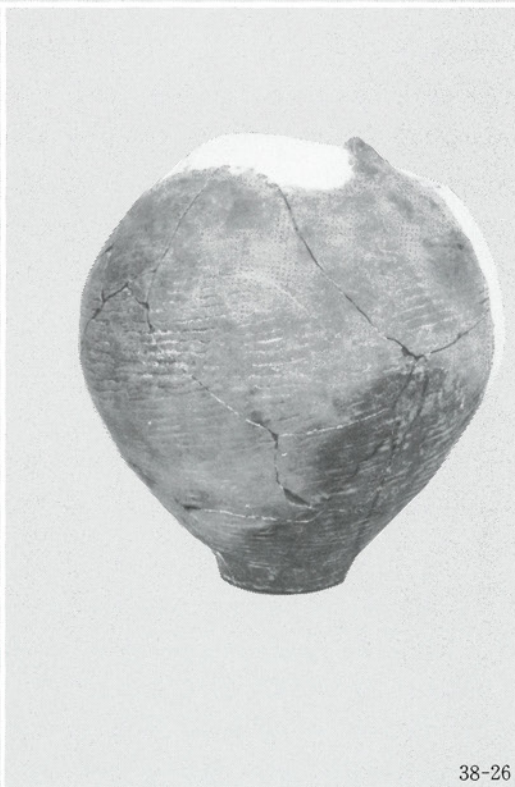
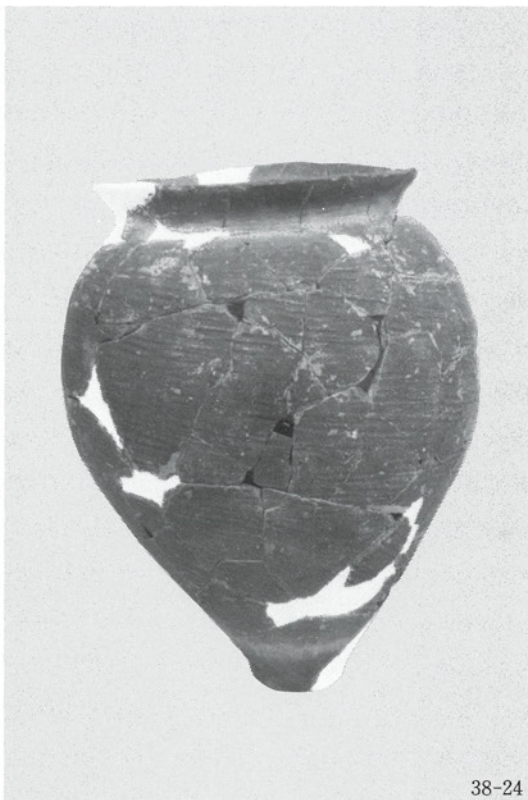
13-1

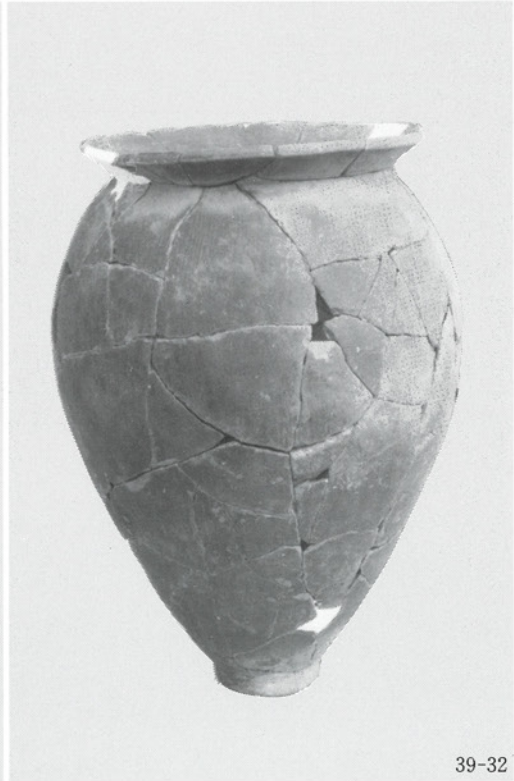


37-23



37-21







39-33



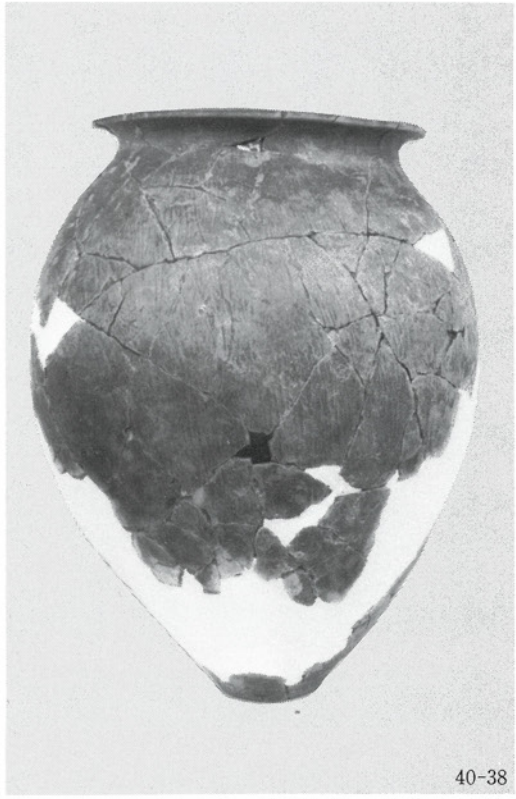
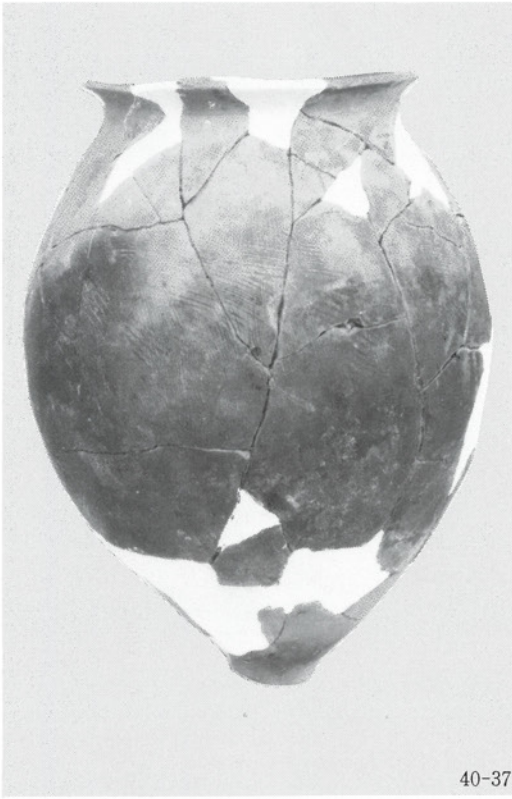
39-34



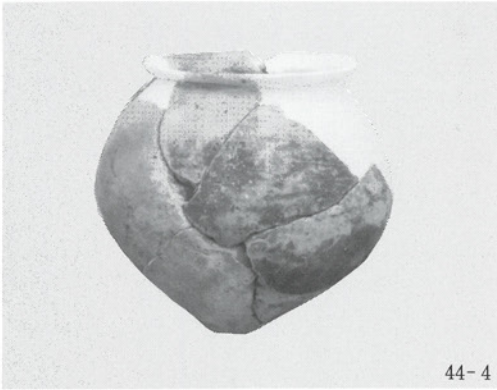
39-35



39-36







44-4



13-5



25-11



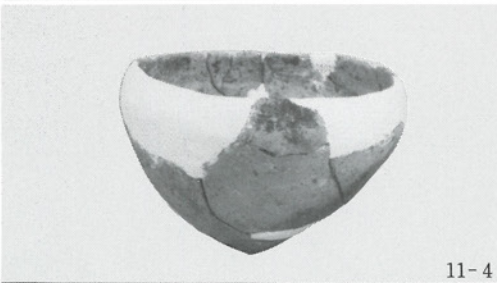
13-7



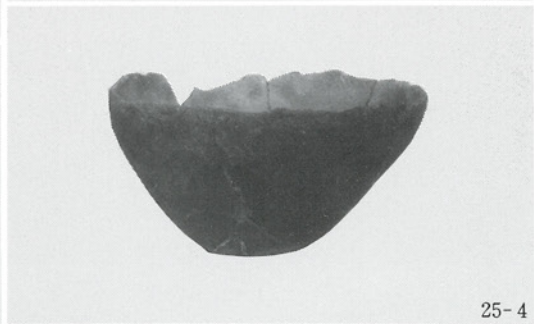
11-6



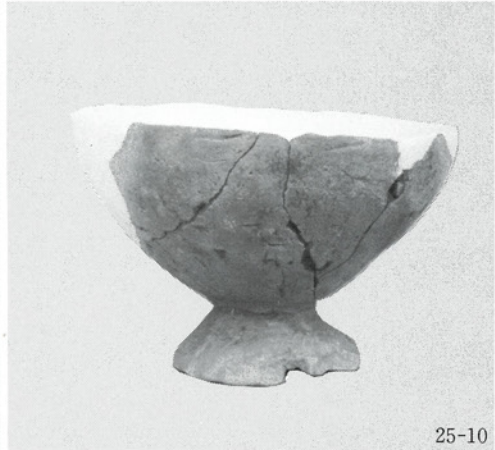
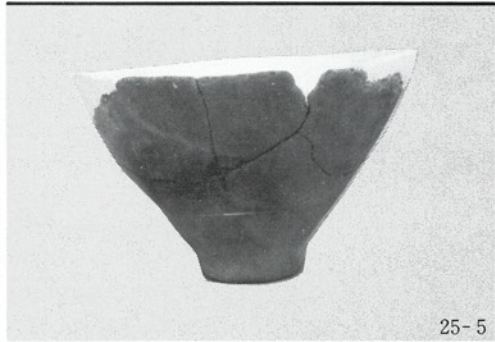
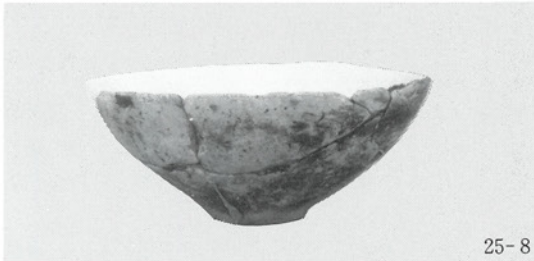
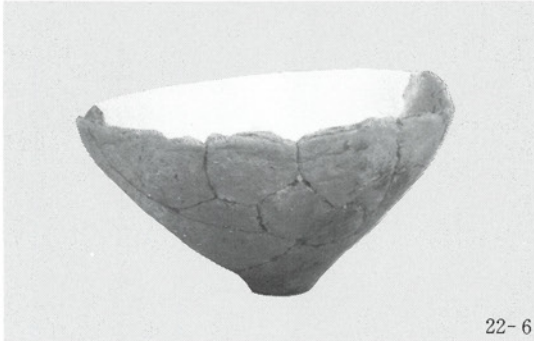
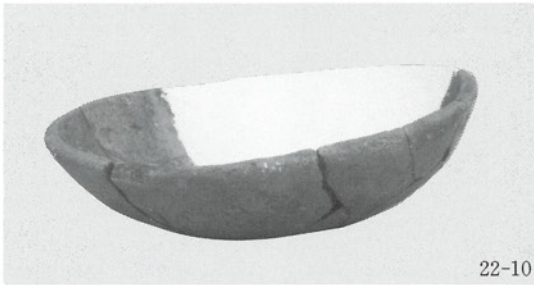
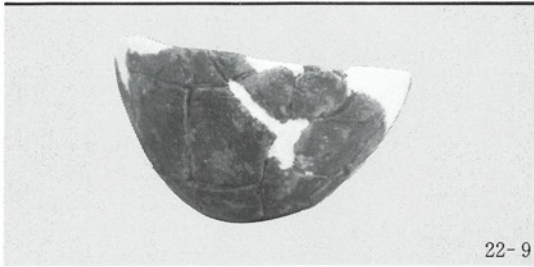
15-10

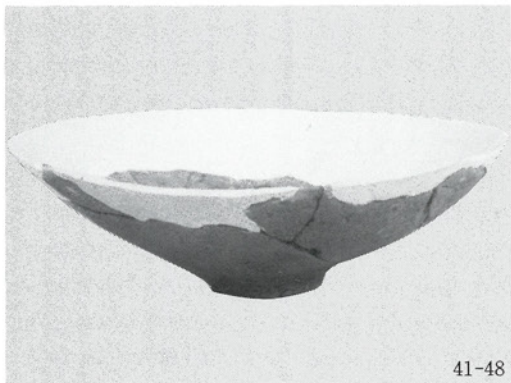


11-4

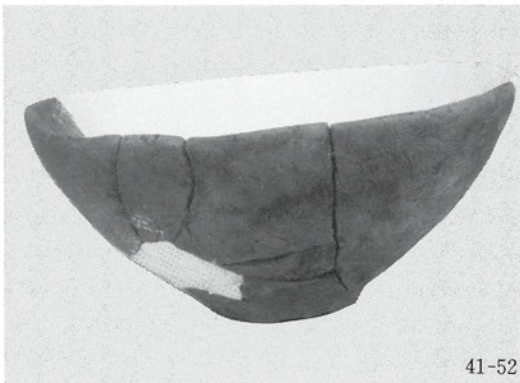


25-4





41-48



41-52



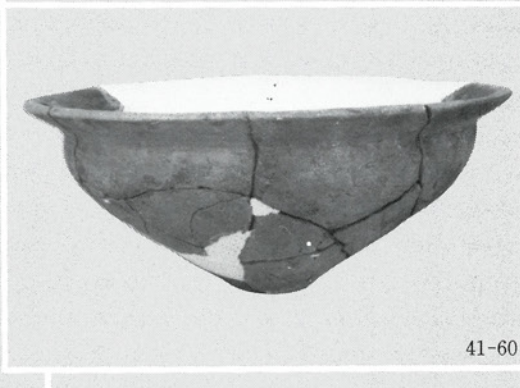
41-49



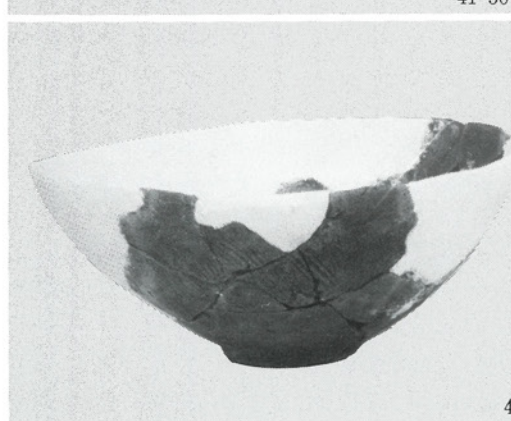
41-57



41-50



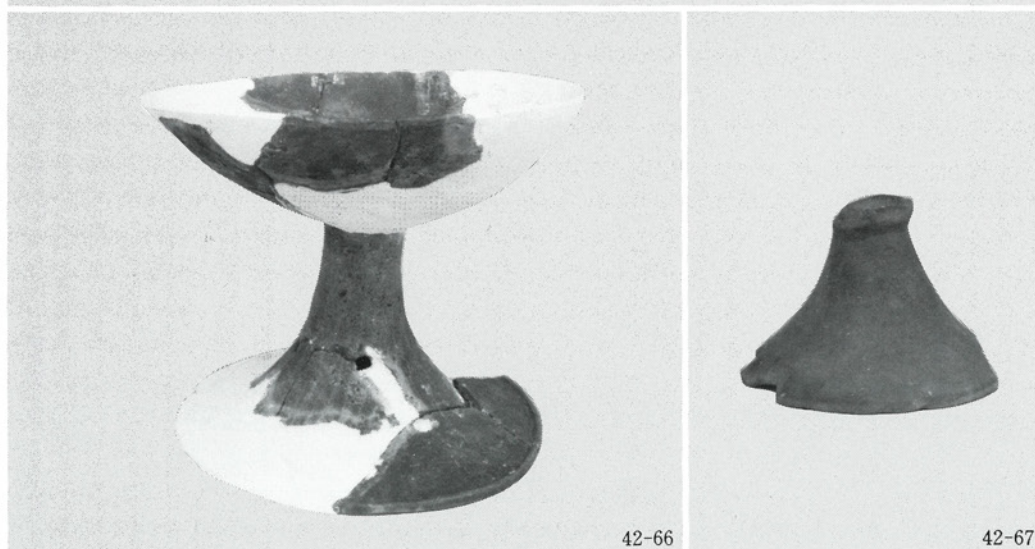
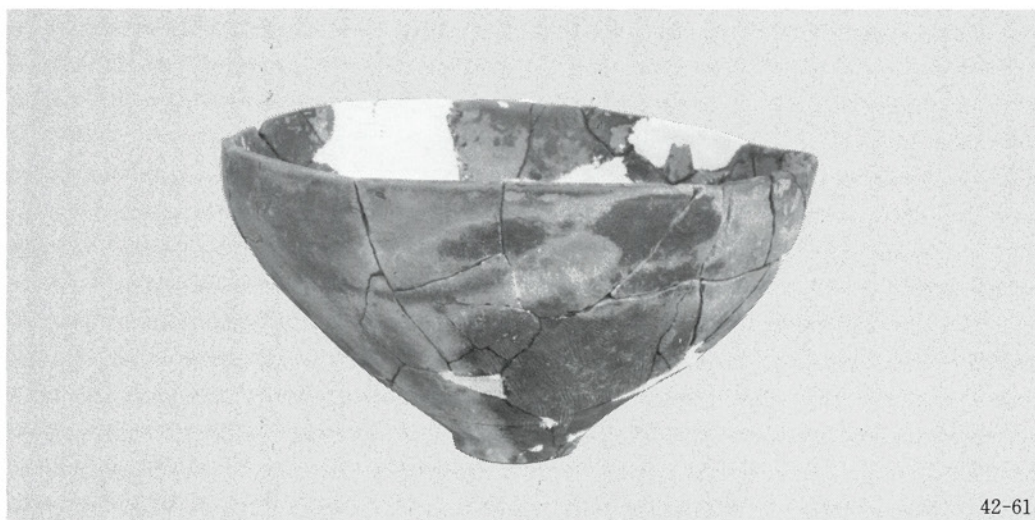
41-60



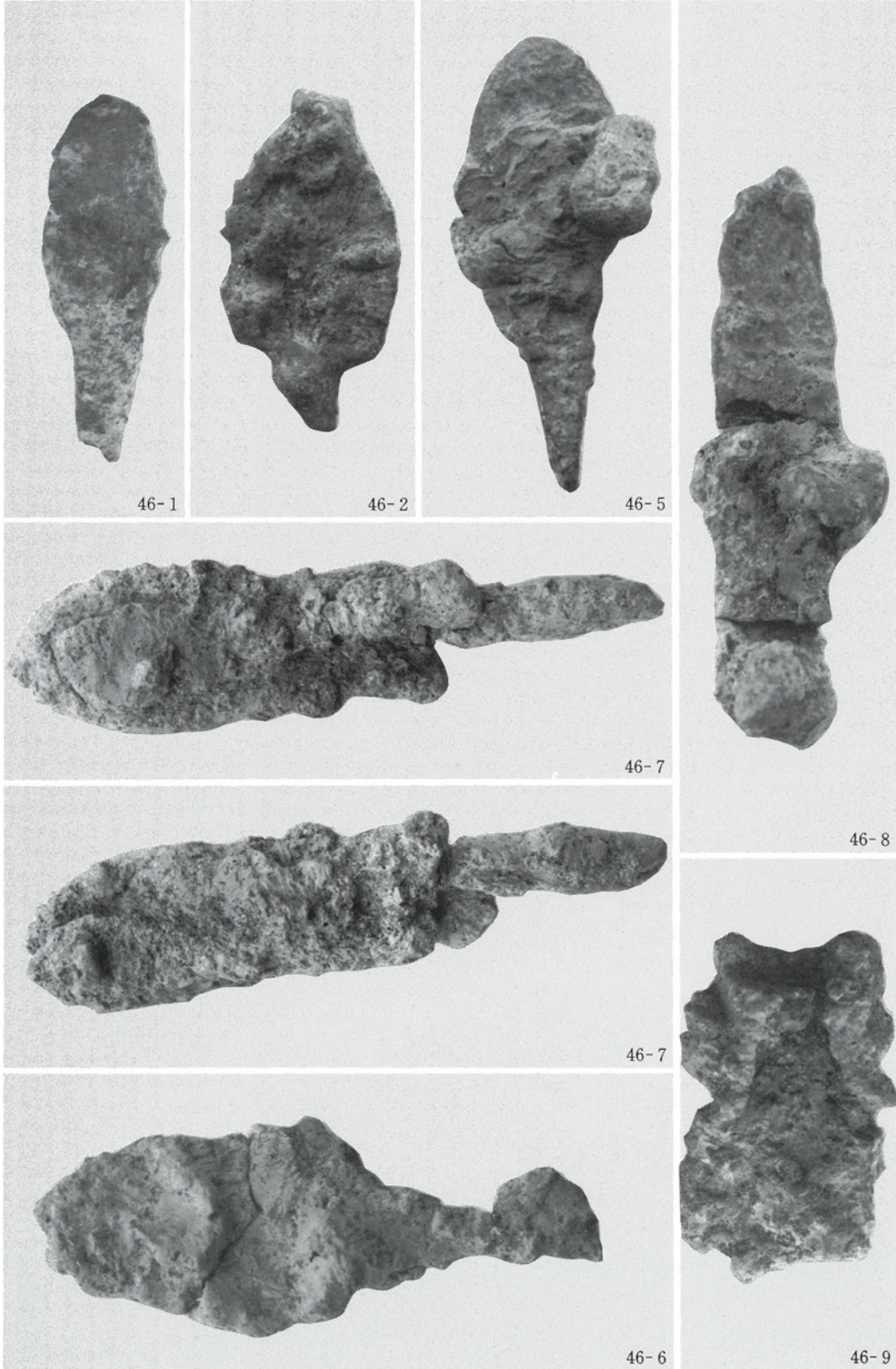
41-51



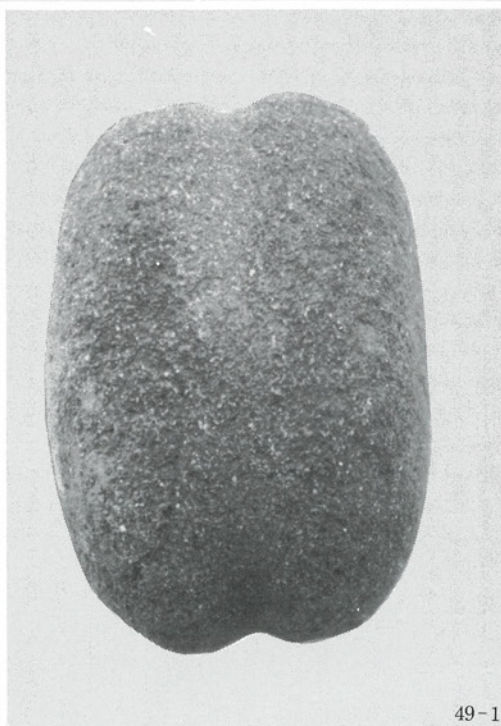
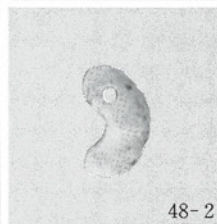
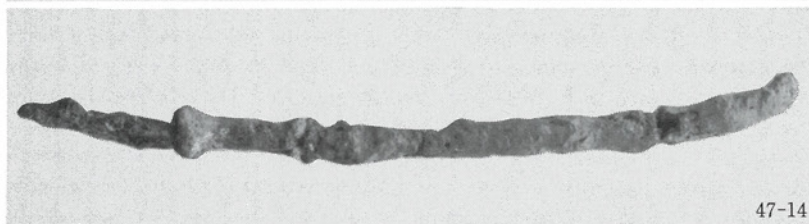
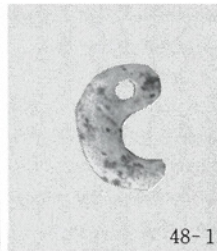
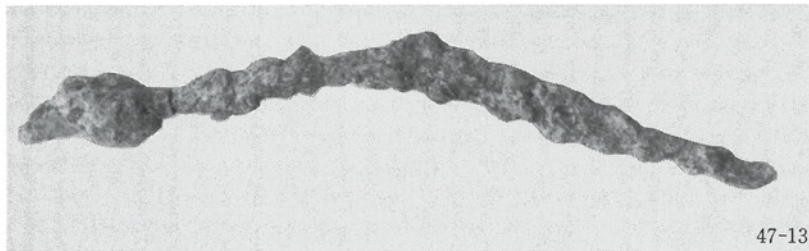
42-63







出土遺物 (16)



黒谷川郡頭遺跡 I

発行 徳島県教育委員会
徳島市かちどき橋1丁目

印刷 グランド印刷株式会社
徳島市仲之町4丁目29-1

1986. 3. 25